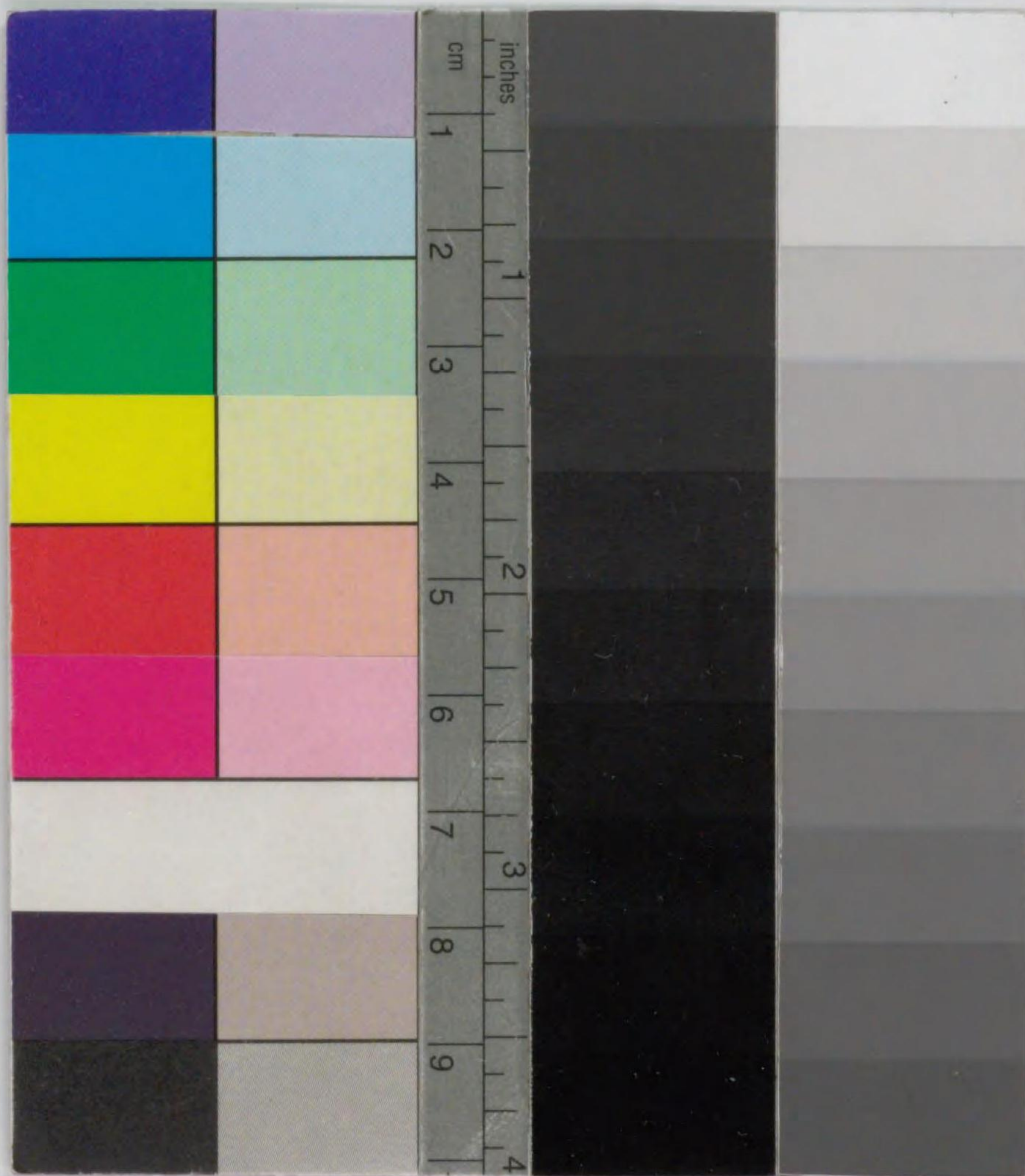
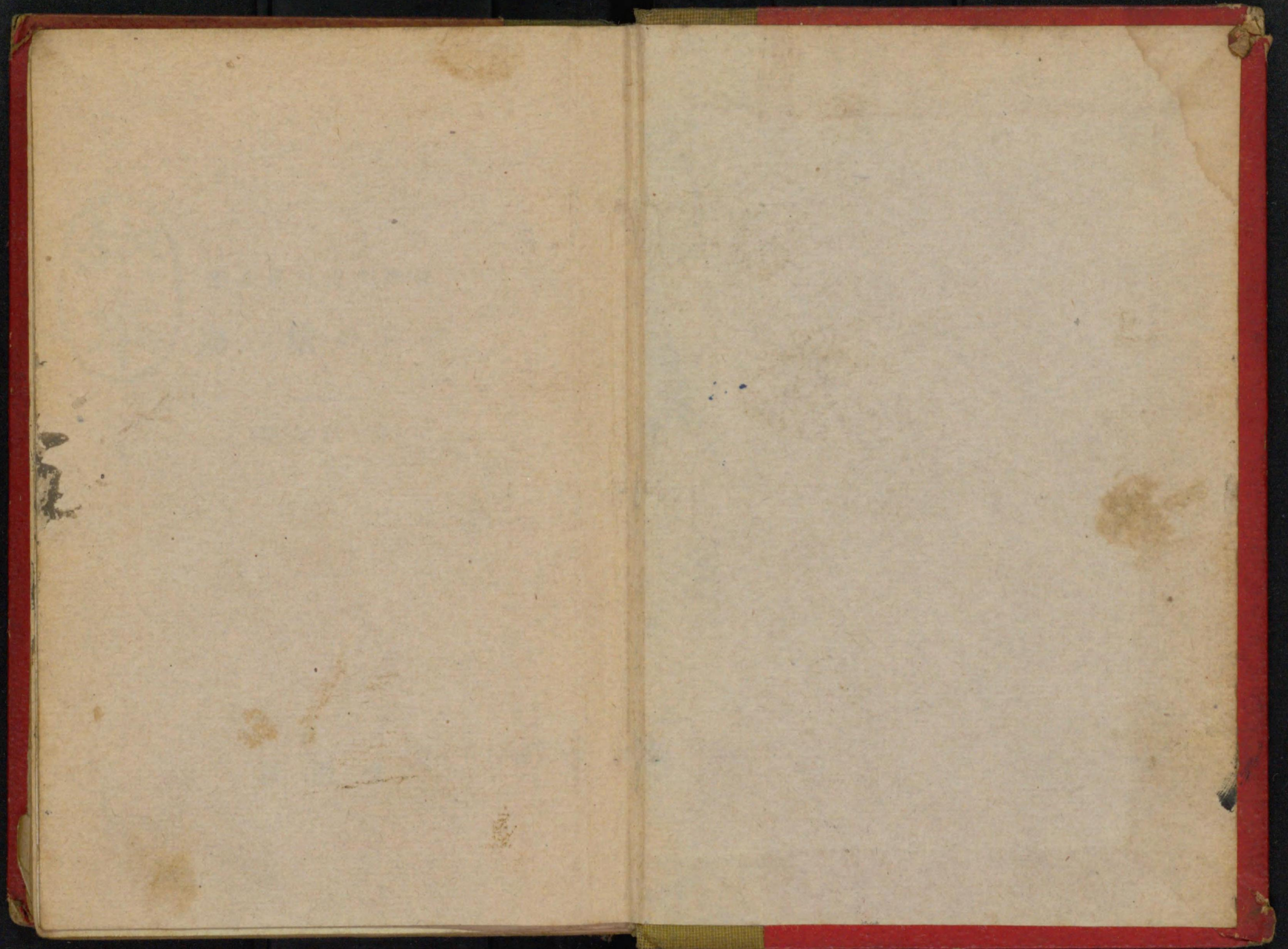


569-61



1200501517050







世大衆文學全集  
ゼンダン城の虜

寺田鼎



改造社

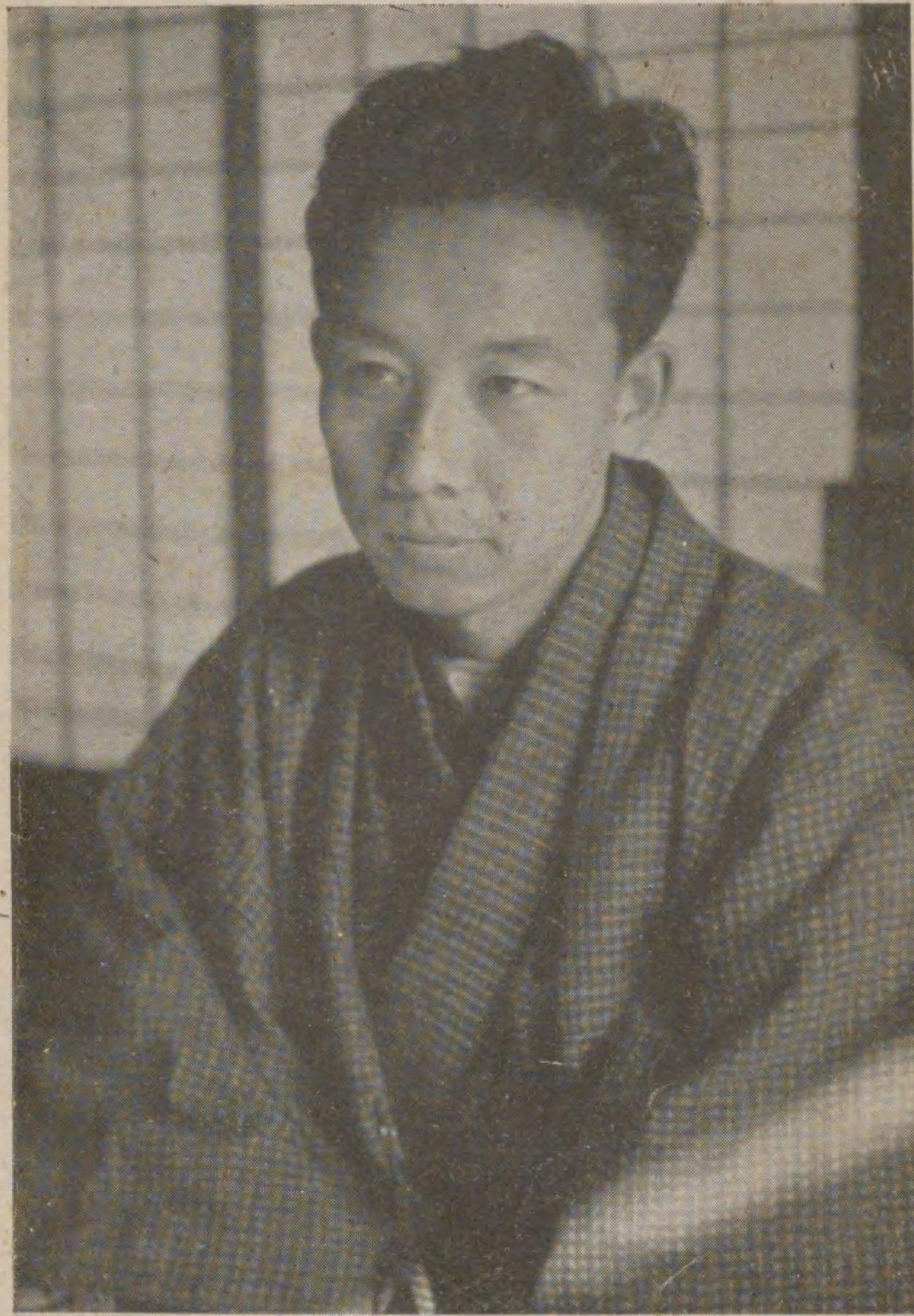


るけぞ近に(協一ヲラ・ラバーバ)人夫ンバ一モドてれくかに公太  
(照巻頁二九一)(繪中ヲザノ・ンモヲ)ト一バ

## 序

「ゼンダ城の虜」は、別名を「一英國紳士傳中三ヶ月の記録」と呼んで、本篇の主人公ドルフ・ラツセンダルの追懐談になつてゐる。そして「風雲のゼンダ城」は其の續篇で、ドルフの親友フリツ・フォン・ターレンハイムの筆になる回想記で、原名は「ヘンツオウのルバート」と云ふ。ともにルリタニア王朝顛覆の陰謀を描いたもので、忠臣あり、美姫あり、俠漢あり、智勇兼備の悪人あつて、冒険とロマンスのコンサートに讀者を魅了せしむる名作である。

原作者アンソニー・ホープは本名をアンソニー・ホープ・ハウキンス (Anthony Hope Hawkins) と云ふ。一八六三年、倫敦の牧師の子として生れた。早くより文筆を以て立つたが一向に名が上らなかつた。然るに一旦「ゼンダ城の虜」を上梓するや、忽ち洛陽の紙價を高からしめ、劇に映畫に喧傳せられて、續篇「風雲のゼンダ城」を公けにするに至らしめた。従つて「ゼンダ城の虜」はホープの出世作ではあるが、其の處女作ではないのである。



寺田鼎氏

ホープの著作中重なる物を擧ぐれば左の通りである。

- The Dolly Dialogues.
- The Heart of Princess Ogra.
- The King's Mirror.
- Little Tiger.
- Phroso.
- The Prisoner of Zenda.
- Quisante.
- Rupert of Hentzau.
- Simon Dale.
- Sophy of Kravonia.
- Tristram of Blent.

終りに原作者ホープの肖像は、方々手を廻して探したが發見する事は出来なかつた。せめてはその筆蹟をと思つて尋ねたが之れも見つからなかつた。まことに残念千萬である。

一九二九、一、二四

譯者

### 目次

## ゼンダ城の虜

第一章 發端	八
第二章 男の髮色	一七
第三章 楽しい一夕	二八
第四章 王の約束	三九
第五章 戴冠式	五〇
第六章 地下室の祕密	六〇
第七章 孤軍奮闘	七〇
第八章 姫と王弟	八二

第九章	四阿の女	.....	三五
第十章	戀心	.....	一〇八
第十一章	姫と別れて	.....	一一〇
○第十二章	山の別荘	.....	一一三
第十三章	ヤコブの梯子	.....	一一三
第十四章	城外の深夜	.....	一一四
第十五章	憤怒の言葉	.....	一一四
第十六章	嵐の前	.....	一一六
第十七章	ルパートの活躍	.....	一一七
第十八章	陥穽	.....	一一九
第十九章	決戦	.....	一二五
第二十章	捕虜と國王	.....	一二四

風雲のゼンダ城

第二十一章	訣別	.....	一二三
第一章	女王の別辭	.....	二四三
第二章	停車場	.....	二五六
第三章	再びゼンダへ	.....	二六六
第四章	城濠の波紋	.....	二七八
第五章	謁見	.....	二九〇
第六章	計略	.....	三〇三
第七章	シモン歸る	.....	三二四
第八章	獵犬	.....	三三五
第九章	意外な報告	.....	三三八



ゼンダ城の虜

第十章	王の出現	三三八
第十一章	亂鬪の巻	三五九
第十二章	めぐりあひ	三七一
第十三章	從兄弟同志	三八〇
第十四章	最後の接吻	三九一
第十五章	忠僕の策	四〇六
第十六章	平和な街	四一七
第十七章	兩雄の再會	四二八
第十八章	ルバートの最後	四四三
第十九章	嵐の後	四六一
第二十章	天命	四七五
第二十一章	追記	四九五



# ゼンダ城の虜

## 第一章 發端

「貴方は何時になつたらお働きのなるんでせうね、ルドルフさん？」と嫂が云つた。

「ローズさん。」私は卵匙を下に置きながら答へたのである。「僕なんか働かなくてもいゝぢやありませんか。なにしろ氣樂な身分ですからね。誰だつて不自由のない程収入のある人はない世の中に、僕にはザツと自分の慾を満たすだけの収入はありますし、パーレスドン伯爵の弟で、美貌無雙の貴方を嫂に持つと云ふ、社會的に羨ましがられるやうな地位まで持つてゐるんです。これだけで澤山ぢやありませんか？」

すると嫂はかさねて云つた。「貴方はもう二十九歳ですよ。それなのに何一つなさらなないで、ただ……」

「のらくらしてゐると仰有るんですか？ 其の通り。我等の一家と來たら、何一つしないでもいゝんですからね。」

かう答へた言葉は、却つてローズを惱まして了つた。と云ふのは、誰でも知つてゐる事だから爰に打ち明けて云つて了ふけれども、嫂は才色兼備の女ではあつたが、其の實家は漸くラッセンダル家産まで持つてゐたので、利口な兄のロバートは、嫂の家柄など問題にしなかつた。家柄など、云ふものは實際、次ぎにローズが云つた言葉が示す通りのものである。で、彼女は云つた。「良家なんでものは、一般に、他のどんな家庭よりも悪いものですわ。」

かう云はれて、私は頭を搔いた。其の言葉の意味はよく分つてゐたから。

「ロバートの髪は黒色ですから、私嬉しいのよ。」と嫂が云ふ。

恰度其處へロバートが入つて來た。彼は朝七時に起きて、朝飯前に仕事を済ませる定めであつた。兄は嫂をチラと見た。すると彼女の顔に微かな紅葉が散る。兄はそれを、可愛ゆくてたまらぬと云はぬばかりに軽く突つきながら、

「如何したんだ、えゝ？」と訊いた。

「僕が何一つ仕事はしないし、赤い髪をしてゐると云ふのでお咎めを喰つたところですよ。」と、私は不満げな聲で語つた。

「まア、髪なんか生れつきですもの、如何にもなりはしませんわ。」とローズが云ふ。

「これは普通一代に一度は出て來るんだよ。それに鼻が赤くなるんだがね……。ルドルフにはそれが兩方共備つてゐると云ふ譯だ。」と兄が云つた。

「そんなもの、出て來なけりやよろしいのに、ね。」と、ローズはまだ頬を紅らめたまゝで云ふ。「僕

は両方共好きですよ。」私はかう答へて立ち上つて、伯爵夫人アメリカの肖像に敬禮した。

嫂は吃驚して叫んだ。

「そんな繪はお外づしなさいまし、ね、貴方。」

「これ！」と兄が聲をかけた。

「いやはや。」と私が云ふ。

「では、お忘れになつて頂戴」と、嫂が云ふ。すると兄は頭を振りながら、「迎も——ルドルフには……。」

「何故忘れなきやなりませんか？」と私は尋ねた。

「ルドルフさん。」嫂はほつと顔を紅めながら聲を立てた。

私は笑つて、また卵を食べにかつた。少くとも私は、問は、曰くのありさうな疑問を抛つ事にしたのであつた。でも、いざ言ひ合ひを止めると云ふ段になると、私は嚴しい嫂を少々ぢらしてやらうと思つて斯う云つた。「いつそ、僕もエルフバードになりたいものですね。」

私は小説を読む時、説明を読み洩らす癖がある。けれども自ら筆を執つて書き始める時になると、我れながら説明を加へて置く必要を感じる。と云ふのは、何故嫂が私の鼻や髪の毛の事とや角云つたか、そして又私は私で、何故わざ／＼エルフバードのやうになりたいと云つたか、と云ふ理由を説明すれば明かになる事だ。元來ラッセンダル家は、勿論血統は少しも通つてはゐなかつたが、數代の長

い間に渡つて、一見しても名門エルフバードの家系と何かつながらがあるか、又は同王家の名乗りを立てる程のものと見られてゐた事は、有名な事實である。例へばルリタニアとバーレスドンとの間なり、ストレルソー宮殿やゼンダ城と、西バークレーン三〇五番地との間なりに、何か關係があると思はれてゐるやうに……。

さて、わが親愛なるバーレスドン夫人が忘れてくれと云つてゐる悪い噂を、私は是非とも打ち明けねばならない。時は一七三三年、ジョージ二世の御宇、王様並びにプリンス・オブ・ウエールズ殿下の未だ御不和にわたらせ給はぬころ、後々ルリタニア王國のルドルフ第三世とて、歴史に名高い王様となられた若君が、英國朝廷を御訪問遊ばされた事があつた。若君は長身瀟洒の青年であらせられたが、玉に瑕とも云ふべきは、際立つて長い鋭い、筋の通つた鼻と、房々した赤黒い髪とを持つて居られた事である。實際、エルフバード時代を髣髴させる鼻と髪とは氣になつた。若君は數ヶ月英國に御滞在になつて、非常な御歡待を受けさせられてゐたが、終に消えるやうに立ち去つておしまひになつた。それは若君が、當時社交界に時めく一貴族と決闘されたからの事である。決闘で自分の階級の諸問題を解決する事が、其の爲人のよさを示す事と思はれてゐた頃だつたから、其の貴族とて、自分一個の名譽や手柄の爲ばかりでなく、其の美しい夫人の夫として闘つたのであつた。其の決闘で、ルドルフ殿下は大怪我を遊ばされたが、お癒りになると間もなく、殿下を荷厄介に思つてゐたルリタニア大使の手で、サツサと連れ戻されて了はれた。貴族の方は決闘では負傷しなかつたが、其の目が

濕つばい朝だつたので、烈しい空気に襲はれ、ルドルフ殿下が出發されてから半歳ほど経つた時分、夫人を親類一同の手に托する暇もあらばこそ、病を癒し得ずして逝つて了つた。二ヶ月の後、其の夫人はバーレスドン家の爵位と邸宅とを承け繼いだ。それが伯爵夫人アメリカで、私の嫂がパークレインの家の應接間から取除けてくれと頼んだのは、此の夫人の肖像なのだ。彼女の夫ジェームスは、英國華族バーレスドン家第五代目の伯爵であり、ラッセンダール家第二十七代目の男爵で、ガーター騎士の一人であつた。(註。英國では一人で二つ以上の爵位を持つてゐる人が多い)一方ルドルフはルリタニアへ歸り、結婚して王位に即かれたが、其の子孫は今日只今まで(一寸缺けた事はあつたが)王位に即いて居られるのである。バーレスドン家の畫廊を巡視する者は、一世紀半以前の肖像五十餘りの中に、第六番目の伯爵を入れて五六枚の、長い鋭い筋の通つた鼻と、房々した赤黒い髪の人を見出すであらう。そして此の五六枚の繪の主は、ラッセンダール家では大抵黒い眼をした人が多い中で、青い眼をしてゐる事が分るだらう。

説明は以上で終りを告げる。家門の譽れを汚すと云ふ事は怪しからぬ事だが、我々が繁々聞かされる此の遺傳は、世にも稀れな悪い噂の種作りである。そして此れが、慘めにも華族の家柄に、變な事柄を捲き込むのだ。

嫂は、嫂獨特の理窟から、(相手が女だからと云つて、打ち棄て、は置けない)私の肌を、まるで私の罪か何かのやうに見做して、自ら清しと信じてゐる私の腹の中までが、外側から見透せるやうに云つてゐる。そして鬼の首でも取つたやうに云ふ此の怪しからぬ推測から、私の生活態度を無益だと云つてゐるのだ。が、それはそれとして、私は非常な快樂と、非常な知識とを併せ得た。私は獨逸の學校や大學に通つたので、獨逸語は英語同様に上手に話す事が出来たし、フランス語は全然自國語を喋るやうに巧みであり、おまけに生かぢりの伊太利語とスペイン語とをあやつつた。私は抽んで、とは云へないまでも、一廉劍術に達してゐたし、射撃も巧い自信がある。それに乗物と來たら、鞍さへ置けるものなら何でも御座れた。しかも頭腦は、燃えるやうな赤毛にも似合はず頗る冷靜である。それにも不拘、私は有益な仕事をしろと云はれたら、私の兩親が年々二千磅の金を與へて、のらくら遊ばせるやうにしてくれたのは何故だと云ふより外、何にも云ふ所を知らないのである。

「貴方とロバートとの違ひと申しますと、ロバートは自分の地位の職分を辨へてゐますのに反して、貴方は自分の時機を規つていらつしやると云ふ點ですわ。」と、嫂は時々演説口調で、演壇にでも立つてゐるやうにして云ふのであつた。

「氣力ある人間にとつては、時機即ち義務なんですよ、ローズさん。」と、私は答へるのだ。

「冗談ばかり仰有つて……」と、嫂は頭を振りく、すぐにつづけて云ふのだつた。「時に、ヤコブ・パーロデール卿が、貴方に打てつけといふお仕事を頼みたいと仰有つてゐるんですよ。」

「それは千萬、忝い次第ですね。」と、私が呟く。

「あの方、六ヶ月以内に大使におなりになるので、屹度貴方を大使館附武官にして下さるとロバート

が申して居りましたわ。なつて下さいましね、ルドルフさん——私の顔を立て、ね。」  
嫂がかう云ふ風に、眉を聳て、手を曲げて、訴へるやうな眼ざしをしながら、何の義理も責任もない私のやうな怠け者のために、色々取計らつてくれるのを思つては、さすがに私も良心の可責を感じないでは居れなかつた。其の上、私は或る面白い遊びの出来る境遇にゐて時を過ごす事が出来るさうな氣がしたので、斯う答へた。

「嫂さん。若し此の半歳ばかりの間に、意外な邪魔も起らず、ヤコブさんにも待たれてゐるやうでしたら行く事にしませう。行かなかつたら首を上げますよ。」

「まア、ルドルフさん、ようこそさう仰有つて下さいました。ありがたう。」

「一體ヤコブさんは何處へ行らつしやるんです？」

「まだ御當人にも分らないんですわ。ですが何處かい、大使館だと云ふ事だけは確かですわ。」

「僕ね、嫂さん、貴方故に行くんですよ、たゞのポロ公使館なら眞平ですけれど。僕やりかけたら、中途半端ぢや止めませんからね。」

かう云ふわけで、約束はして了つたものの、六ヶ月は六ヶ月だ、が、永遠のやうな氣がしてならなかつた。そして私と豫定事業（大使館附武官なんてものは生産的なものらしい、が、まだヤコブ卿なり其の他の人のお附武官を勤めた事がないから、斷言は出来ないけれど）との間に此の六ヶ月が介在する以上、私は此の月日を過すに相應はしい方法を探す事にした。そして突然ルリタニアを訪づ

れてみたい氣になつた。可笑しい事に私はまだ此の國を訪づれた事がなかつた。が父は（エルフバ  
ーグを内々好いてゐたに不拘、ルドルフと云ふエルフバークの有名な名は二男の私につけてくれた）  
いつも私が訪づれる事を嫌がつてゐた。が、父が死ぬと、兄はローズに勧められて、家風通りルリ  
タニアへ行く事を避けるやうになつた。然しルリタニアの事が私の腦裡に閃いた刹那、私の心は  
訪づれたい好奇心で一杯になつて了つた。とにかく、赤毛と長い鼻とはエルフバーク家の外に一歩も  
出てはならぬと云ふのではなし、又ルリタニアは歐洲史上少からぬ役目を果たした國であり、噂に高き  
新王の壯心勃々たる治下にあつて、今後も亦前途有望の國たるべき、極めて興味あり重要な國であ  
つたから、アヤフヤな昔話など、此の國を識らうと志す自分を妨げる理由にはならなかつた。私  
の決心は、ルドルフ三世が三週間の後ストレルソーで即位されると云ふ「タイムス」紙の記事を讀ん  
で固められた。此の盛事は私の旅行を記念させるに違ひない。私は即座に決心して準備にとりか  
かつた。然し旅の道程を親類へ披露するなどと云ふ事は私の未だ嘗てしなかつた事ではあつたし、  
今回の事では私の意思に反對する者もあらうと想像された所から、私は漫然とチロルへ巡遊する  
のだと云つておいた。チロルは私の曾遊の地である。それに隣邦の國政及び社會問題の研究を志  
してゐる事を明らかにして、私はローズを怒らせたくはなかつたから。  
「ひよつとすると、此の旅行は何か土産を齎らすかも知れませんかよ。」と、私は暗に仄めかして云  
つた。

「と仰有ると……？」と嫂の尋ね。

「なアにね」と私は何氣ない風で「徹底的の研究を遂げて、前人未發の貢獻が出来さうな氣が……。」  
「あら、貴方、御本をお書きになりませんか？」それは屹度素的な仕事ですわ、ね、ロバートさん？」と、嫂は手を叩いて聲を上げた。

「それは今日の政治的生活の、又とない紹介になるよ。」と云つたのは兄だ。兄は五六度こんな事をした。「舊思想と新事實に關するパーレスドン説」と、一政治研究家著「最後の收穫」の二つは有名な兄の二著述である。

「兄さんの仰有る通りです。」と、私は答へた。

「著述をすると約束して頂戴。」と、ローズは熱心に云ふ。

「いや、約束はしません。が、材料さへ充分にあれば、書きますとも。」

「そりや結構だ。」とロバートが云ふ。

「材料なんか問題ぢやありませんわ。」と拗ねた調子でローズが云ふ。

が、今度はローズは、曖昧な約束しかして貰へなかつた。實を云へば、其の夏の私の旅行記は紙一枚分も出来ないに違ひない事、火を見るよりも明らかだつたからである。そして、それは未來と云ふ物の如何に豫測し難いものであるかを示すだけであつた。と云ふのは、現に私は今、曖昧な約束を履行して、本なぞ著す氣はないながらも筆を走らせてゐるからである。しかも政治的生活の紹介

とは、まるで似ても似つかないものであり、チロルの事なぞ一行も書いてはないものである。

何づれにもせよ、パーレスドン夫人よ、これを貴女の批評眼に供せねばならぬものとすれば、御高覽に供するの心あらざりし事を私は恥づるのであります。

## 第二章 男の髪色

パリを通過する者は誰でも、二十四時間をパリで過ぎなければならぬ、と云ふのは伯父ウイリアムの意見であつた。伯父は世界中の知識に通曉してゐたので、私はチロル行きの旅に上るや、伯父の忠告通り「コンチネンタル」で一日一夜を明かす事にしたのである。私は大使館のデヨーヂ・フェザリーを訪づれ、さ、やかな晚餐をデユランで済ませて、其の後でオペラに跳び込んだ。それが済むと又食事をして、それから可なり有名な詩人でクリチク紙のバリ通信員バートラム・バートランドを訪問した。此の男は氣持のいい、客間を持つてゐて、色々の人に煙草を喫はせたり、雑談させたりしてゐた。バートラムは放心して、元氣がなかつたけれども、大變この室が氣に入つたので、我々二人の外は皆立ち去つて了つてから、私はバートラムの退屈な様子を冷やかにやつた。彼は暫く私の相手になつてゐたが、やがて自分の身體をソファの上に投げ出して叫んだ。  
「ふん。どうでも好きなやうにし給へ、僕は戀してゐるんだ。滅茶々に戀してゐるんだ。」  
「ぢや、もつとい、詩が出来たらう。」と、私は慰め顔に云つた。

彼は指で髪を掻き上げて、いらくして煙草を喫つた。デヨーヂ・フェザリーは煖爐棚に背中を凭せて立つてゐたが、餘所々々しく微笑んで云ふ。

「バート、例の一件なら、綺麗さつぱり忘れて了へよ。明日あの女は巴里を去るんぢやないか。」

「知つてゐるよ。」と、バートラムが答へた。

「巴里に居るとしたところで、如何なるつて譯ぢやなしさ。あの女と來たら新聞屋さん以上に飛び廻る性質なんだからね。」と、デヨーヂは遠慮會釋なく追つかぶせる。

「畜生！」とバートラムが云つた。

「話の主が誰だか分つたら……」と、私は詮索したくなつて訊いてみた。「僕にも面白い話らしいな……さぞ。」

「アントワネット・モーバン」の事だよ。」とデヨーヂが云つた。

「ド・モーバンさ。」と、バートラムが唸る。

「ほう！」と私は「ド」の意味がき、たさに云ひ出した。「バート君、もしや其の女は……？」

「五月蠅いな。」

「何處へ其の女は行くんだい？」其の女と云ふが有名なので、斯う訊いてみた。

デヨーヂは貨幣をデヤラクと鳴らして、ニヤリとバートラムを尻目にかけてが、楽しさうに答へてくれた。

「行先は誰にも分らないんだ。時にバート、先夜……と云つても一日位前の事だ、僕は或る偉い人物とあの女の家で出遭つたんだぜ。君はその人物に逢つた事があるかい？ ストレルソー太公なんだ。」

「うん。逢つたよ。」とバートラムが答へる。

「随分しつかりした人物だ、と思つたよ。」

デヨーヂが、太公を褒めそやしたことが、氣の毒にもバートラムの煩悶を一層深めてしまつた事はすぐに分つた。それで、太公はド・モーバン夫人を最眞にして、引立て、やつた事も想像された。夫と云ふのは後家さんで、金持ちで、美しくして、噂では中々の野心家と云ふ評判であつた。そしてデヨーヂの云つた通り厳格な皇族生活を味つた事がないだけで、太公がどんな位山に登られやうが、一緒に飛び廻る事の出来る性格の人であつた。と云ふのは、太公は先代のルリタニア國王の二度目の落し胤で、新王の腹違ひの弟だからである。そして父君に寵愛せられてゐたので、首府と同じほどの都に因んだ肩書をつけられて、新らしく太公に定められたが、其の後は香ばしからぬ評判が立つた位であつた。太公の母上と云ふのは、育ちのいゝ人であつたけれども、素性はよくなかつた。

「太公は今巴里には居られないんだらう？」と私は尋ねた。

「あないとも。王様の戴冠式があるから御歸國なすつたのさ。その戴冠式も、何方かと云ふと御氣に召さないんだ。だがね、バート君失望するんぢやないよ。太公はアントワネットとは結婚なさらないから——計畫が晝餅に歸して了はない限りはね。だが多分——」と口を切つて、笑ひながら、「王族の

お引立と云ふものは拒ぎ切れないものだね。ねえ、ルドルフ？」  
「さうさなア。」さう云ふなり私は立ち上つて、不憫なバートラムをデヨーヂに任せたまゝ、家へ歸つて寢て了つた。

翌日、デヨーヂ・フェザリーは私と一緒に停車場へ行つた。其處で私はドレスデン行き切符を買つたのである。

「繪でも見に行くのかい？」ニヤリとしながらデヨーヂが訊いた。

デヨーヂは古狸のゴシップ屋だ。それに向つて私はルリタニアへ行くと云つて了つたんだから、三日も経てば此の噂が倫敦に廣まり、一週間位の中にはパークレーンへ聞えるに違ひない。それで、何とか逃げ口上を並べようと思つてゐると、有難い事にデヨーヂは突然歩き出してブラットフォームを急ぎ横切つて行つた。その姿を見送つてゐると、彼は今切符賣場を出たばかりの、流行服を身につけた優美な婦人に帽子を脱いで會釋しながら話しかけた。婦人と云ふのは、見たところ三十の坂を一つ二つ越した位の年恰好の、丈の高い、髪黒い何方かと云ふと肥り肉の女である。デヨーヂに話しかけられながら、女は私を流し眼に見てゐる様子。何しろ四月の日の事として私は毛皮の外套にくるまつて、襟巻をして、旅行用のソフト帽を目深に冠つてゐたから逆も伊達な姿とは云へないに違ひないと思つて、大いに見榮を傷つけられて了つた。すると間もなくデヨーヂは傍へ引返して來た。

「君に、別嬪さんの道伴れが出來たぞ。」と彼は語つた。「あれが、例のバートラムの辨天さまのアントワネット・ド・モーバンだよ。君と同様ドレスデンへ行くんだ——確か繪畫見物にさ。現在のところ君の知遇を忝くしたいなぞとは思つてゐないんだが、随分妙だね。」

「お引合せなんか頼みやしなかつたよ。」と、私ははれて答へた。

「うん。君を引張つて行かうと云つたらね、『又の時に』と云ふ返事さ。なに、氣にしないでもいよ君、今に衝突でも起つて、君が彼女を救ひ出す、そしてストレルソー太公から横取りしてみせる、といふ機會が來るかも知れないからな。」

さう云はれたものゝ、私にも、ド・モーバン夫人にも、衝突なぞと云ふ事件は起らなかつた。私は彼女の事も、自分の事と同じく公明に話す事が出来るが、ドレスデンで一夜を明かすと、彼女は私の車室へ入つて來た。彼女は人眼を避けてゐるんだな、と思はれたから、私は注意深く彼女の眼を避けようとしてゐたが、私が車の後端の方へ寄つて行つたのに、彼女も私と同じやうに後端へ寄つて來た。それで、先方には氣づかれないで、相手を充分よく觀察出来るやうな羽目に巡り合はせてしまつた。

我々がルリタニアの國境に着くや否や（其處の税關事務を司つてゐる老官吏は、私のエルフバード風の人相を見て、私にも驚かれる程びつくりして、優待してくれた）私は新聞を買つて、見る中に、活躍せざるを得ない記事を見た。明確な説明こそしてないが或る理由と、或る秘密な事情のため、戴冠式日が突然繰り上げとなつて、式は明後日擧げられる事になつたと云ふ記事である。國內長

がために動揺してゐるらしかつたが、ストレルソウの繁昌は確かであつた。部屋と云ふ部屋は悉く貸し切られ、ホテルは満員で、私の宿さへ容易には取れさうもなく、法外の値段を支拂はされる事は明らかだつた。終に私は、首府からは五十哩手前で、國境を去ること約十哩の小都會ゼンダに止る決心をした。汽車は夕方ゼンダに着いた。私は翌くる火曜日を景色のいゝので名高い岡の上を歩き廻つたり、有名なお城を眺めたりして過し、水曜日の朝は汽車でストレルソウへ行つて、夕方は泊りにゼンダへ歸るつもりであつた。

ゼンダへ着くと私は汽車から降りた。ブラットフォームに立つてゐると汽車が動き出して、ド・モーパン夫人が其の座席に坐つてゐるのが見えた。私も用心深いつもりだつたが、彼女は明らかに私の一枚上を行つて、眞直ぐにストレルソウへ行つて泊るつもりであらう。で、私と彼女とが、こんなに長い間道伴れになつてゐた事を知つたら、デヨーヂ・フェザリーの奴、どんなに喫驚するだらうと思つて、私はニツコリ微笑んだのである。

ホテル——と云つた所で、高々肥つた婆さんと二人の娘とが經營してゐる旅館だつた——では大事にされた。宿主は、善良な静かな人間で、ストレルソウの御大典なんかに大した興味は持つてゐないらしかつた。お婆さんは太公に憧れてゐた。と云ふのは、太公は先王の遺言によつてゼンダ領と、宿屋から一哩内外距つた谷端れの険しい岡に魏然と聳えたゼンダ城との主だからだ。お婆さんは全く恐れ氣もなく、太公が兄さんの代りに王位に即かれてゐないのは残念だと云つた。そして、

「私なんかミハエル太公を存じて居りますよ。あの方はいつも、我々と共に住んでいらつしやるんですもの。ルリタニア中の者がミハエル太公を知つてゐます。ですが王様と來たらまるで外國人ですよ。外國に許りいらしたものですから、お目に掛つた位ぢや十人に一人だつて見分がつかませんよ。」

「それにね、」と、一人の娘が相槌を打つて、「王様は鬚を剃り落してお了ひになつたんです。だから誰にも分りつこありませんわ。」

「鬚をお剃りになつたつて？ 誰からお聞きだい？」とお婆さんが尋ねた。

「太公のお附きのヨハンが云ひましたわ。あの人は王様にお目にかつたんですつて。」

「さう／＼。王様は今、森にある太公の狩小屋においでになつてゐるんですよ。此處からストレルソウにお出懸けになつて、水曜日の朝戴冠式をお擧げになるんです。」

私はこれ聞いて面白くなつた。そして明日になつたら、王様に逢へるかも知れないから、小屋の方へ歩いて行かうと決心した。お婆さんは諄々と云ふ。

「王様が狩に御逗留になればいゝのに。王様はお酒と、女とお好きだと云ふから——太公が水曜日に戴冠なさるやうお弱りになつて、下さればいゝのだ。とは思ふもの、如何なる事が分つたもんぢやない。」

「シツ！ お母さんてば。」と、娘がたしなめる。

「私と同じ事考へてる人は澤山あるんだよ。」とお婆さんは頑固に云ひ張つた。



私は安樂椅子に身體を投げ出して、お婆さんの片意地なのを笑ひながら見てゐた。すると、二人の娘の中、年下の方の、綺麗な丸ぼちやの娘が云ひ出した。

「私は、黒のミハエルさまは嫌ひよ。私は赤のエルフバーグの方がいゝわ、お母さん。王様は、狐か何かのやうに、眞赤な方なんですつてね……。」

娘はかう云ひながら、私を流し目に見て悪戯好きらしい笑ひを漂べた。そして姉娘が吐るやうな顔つきをするのを見て頭を振つた。「今までは、大抵の人が赤毛を嫌つたものだよ。」とお婆さんが呟いた。私は五代目のバーストン伯爵ジェームスの事を思ひ出して。

「でも女はそんな事なかつたわ。」と娘が云ふ。

「いゝえ。後では、女だつてさうだつたよ。」お婆さんの答へは嚴しい。娘は黙つて眞紅になつて了つた。

「何うして王様は此方へおいでになつたんです？ 此處は太公の領地だと仰有つたぢやありませんか？」沈黙を破つて私は尋ねた。

「水曜日に来るまで、御静養になるやう、太公が御招きになつたのです。太公はストレルソーで王様の歓迎會の準備をなすつていらつしやるんです。」

「では、お二人は仲がいゝんですね？」

「悪い方ではないんですよ。」とお婆さんの答へが、妹娘はまた頭を振つた。そして、いつまでも黙つては居られないと見えて、また口を開いた。

「もし仲が好いと云へるなら……同じ地位、同じ奥方を欲しがつてゐる男たちの交際と同じ程度の仲の好さなのですわ。」

お婆さんは娘を睨みつけたが、此の言葉は私の好奇心を挑發した。それで、お婆さんが此の言を云はぬ中にと思つて口を挟んだ。

「何、同じ奥方ですつて？ 何うしてですか、お嬢さん？」

「黒のミハエル——ぢやない太公さまが、従姉のフラビヤ姫と結婚出来るのだつたら、自分の生命を棄て、もいゝとまで思ひ詰めていらつしやる事は、世間一般に知れ渡つた事なんですわ。そのお姫様と云ふ方が、王妃におなりになる方なんです。」

「實を云ひますと、太公つて方が僕には氣の毒になつて來ましたよ。人の弟と生れたら、兄の選り屑だけしきや貰へないのに、何故弟は心からの感謝を捧げなきやならないものでせうか？」と云ひかけたが、不圖我が身を顧みて私は肩をすくめて一笑した。そして又、アントワネット・ド・モーパンの事や、ストレルソーへ向つた彼女の旅路の事などを考へた。

「黒のミハエルの事は、餘り申し上げ……。」と、娘が母親の怒るのも構はずに云ひ出したが、丁度其の時床を踏む荒々しい聲音がして、嚇しつけるやうな荒々しい聲が聞えて來た。

「殿下の領分にあながら『黒のミハエル』の話をしてゐるのは誰だ！」

娘は半ば吃驚、半ば面白半分（らしい）に、アツと小聲で叫んだ。

「私に云ふぢやあるまいね、ヨハン。」と娘が云ふ。

「何方へ向つてお云ひだえ？」とお婆さんが云ふ。

聲の主の男は入つて来た。

「お客さまがあるんだよ、ヨハン。」とお婆さんに云はれると、男は帽子を脱いだ。一瞬の後、其の男は私を見たが、驚いた事に、何か大變な物でも見たやうな様子で一足後へ退つた。

「如何したの、ヨハン？」と姉娘が云つた。

「此の方は、戴冠式見物にいらした旅のお方なんですよ。」

男は我れに返つたが、まるで燃ゆるやうな眼つきで、探し物でもするやうにちつと私の顔をみつめた。

「今晚は！」と私が云つた。

「今晚は！」と其の男も云ふ。然し穴のあく程見つめたまゝだ。すると氣輕な娘たちはゲラ／＼笑ひ出して了つた。

「ね、ヨハンさん。お前はこんな色の方が好きなんですよ。旦那さま、此の人は貴方の髪を眺めて居りますよ。そんな色の髪は、此のゼンダにたんある色ぢやありませんわ。」

「失禮いたしました。一と男は、困つたと云ふ様子で云ふ。」「誰方にもお目にかゝらないつもりで参りましたのに。」

「此の人に一杯飲まして上げて下さい、僕の健康を祝つて貰ふんですから。それから僕はお先に寢せて頂きませう。お嬢さん方、いろ／＼面白い話を伺はして頂いて、有難う。」

云ひながら立ち上つて、私は軽く會釋して戸口の方へ向つた。妹娘は駈け出して来て、私の道先を照らして呉れる。男はまだ私を見つめたまゝ、通さうとして後へ腰かけた。通りすがりに、男は一歩進んで云つた。

「伺ひますが、貴方は此處の王様を御存じですか？」

「まだお目にかゝつた事ありません。水曜日にお目にかゝりたいと思つてゐるんです。」

男はそれ以上何にも云はなかつたが、室外に出て戸をしめるまで、私は男に見送られてゐるやうな氣がした。すると此の道案内の小娘は、一足先きに二階へ上りながら私を振り返つて云つた。

「貴方のやうな色では、ヨハンさんを喜ばせる事は出来ませんわ。旦那さま。」

「貴方の色ならいゝんですがね、屹度。」と私はごまかして云つた。

「男の方の色を申上げたんですわ、私。」と、娘は笑ひながら、婀娜つぽく見つめた。

「えゝ？」と、私は蠟燭を握りながら云つた。「男は色で違ふものですか……？」

「いゝえ。でも私、貴方の色は好きですわ——エルフバーグの赤色ですもの。」

「男の色なんて物は、それつきりの物なんですよ。」と云ひながら、私は心からの禮を述べた。

「戸締りの用心をよろしく。」と娘が云ふ。  
「アーメン。」私はさう云つて、娘と別れた。實際、今になつて分つた事だが、時として男も色で男を上げる事があるものである。

### 第三章 楽しい一夕

私は自分の肌の色が、ヨハンの氣に入らなかつたからとて、理由もなくヨハンを嫌ふと云ふ程無茶な男ではなかつた。もしさうでなかつたら、ヨハンが其の翌朝、外見頗る丁寧な丁寧に應待してくれた事が私に警戒の念を起させたに違ひない。私がストレルソーへ行くのだと聞いたヨハンは、私が朝食最中のに不拘逢ひに来た。そして裕福な商人に嫁いで、首府に住んでゐるヨハンの妹が、其の家の部屋を貸すから来ないかと云つて来たとの話をした。ヨハンは大喜びで承知したもの、勤めの都合上行くわけに行かなくなつた。それで随分むさくるしい所ではあるが（と云つた癖に、小綺麗な感じのする所だ）つけ加へて、差支へなかつたら、代りに私に云つて泊らないかと云ふのだつた。そして妹は溫和しい女だの、明日になるとストレルソーの往還は雑沓して不自由だらうから、私が困りはせぬかなど、云つた。私は躊躇どころか即座に引き受けると、彼は妹に電話をかけたに出て行つた。その間に私は荷造りをして、次の列車に乗る用意をと、のへた。森や狩小屋を見たさの心止みがたき折柄、宿の小娘が来て、森を抜けて十哩ばかり歩いて行けば線路に出るから、沿線の驛から汽車に乗れますと教へてくれた。そこで荷物はヨハンの妹の家へ直送して、自分は徒歩でストレルソーへ向はうと決心した。ヨハンは留守の事とて私の豫定變更は知つてゐなかつた——、又知つてゐたところで、ヨハンの妹の家へ着くのが數時間遅れる位の事だ。今更それをヨハンに知らすにも及ぶまいと思はれた。先方でも私の事なんかさう——心配もしやしまいと云ふものだ。

晝食は早目に済ませて、親切な宿主一同へ別れを告げ、歸途の再會を約して、私は城やゼンダの森へ行く道の丘を登りはじめた。二十分もブラ／＼歩いてゐるうちに城に着いた。城は昔は要塞だつたと云ふが、今も舊態依然として保存され頗る巍然たるものであつた。其の背後には天守閣の一部が聳え、其の後に、舊城廓をめぐらす廣々とした深い濠に隔てられて近代的な美しい館がある。これは先王の建築されたもので、今はストレルソー太公の居城となつてゐる。舊城と新しい館との間は釣橋で通するやうになつてゐて、此の間接の道のみが舊城から外部へ出る唯一の通路である。が、近代式の館からは廣々とした美しい街路が走つてゐる。まことに理想的の住居である。「黒」のミハエルは相手が欲しくなると、此の館に住ふし、また厭世的な氣持になつて了ふと、たゞ橋を渡つて後から橋を引上げさへすればいい。（橋は滑車で動くのだ）さうすると、もう軍隊や大砲の力でも太公を引戻す事は出来なくなるのだ。私は歩く途々、「黒」のミハエルは、たとへ王位や姫君を手に入れる事が出来ないものとしても、歐洲の何處の皇族にも劣らぬ程、傑れた居城を持つてゐる人だと考へて喜んだ。

間もなく、私は森へ入った。小一時間も歩いたと思ふ頃、涼しい小暗い木蔭に出た。見上ぐれば大樹枝を交へて、隙間洩る日光はゆらくして婉然ダイヤモンドをちりばめたやう。私は場所の快さに恍惚して、一本の伐り株をみつけるとこれによりかゝつて手足を伸ばし、清澄な森の美しさに心ゆくまで冥想したり、良い煙草を味ひく喫つたりした。煙草を喫ひ盡した頃、多分陶然とし過ぎた故だらう、ストレルソー行きの汽車も、日暮れの近づいてある事も打ち忘れ、私は快い眠に陥つて了つた。こんな場所にゐて汽車を思ひ出すなどと云ふ事は、身分知らずと云ふものだ。それどころか、私はフラビヤ姫と結婚してゼンダ城に住み、終日、林や森に戀を語つて日を過す、と云ふやうな楽しい夢を見たのである。事實、姫君の美しい唇に燃ゆるやうな接吻したと思つた刹那、荒つばいキイキイ聲で叫ぶ人の聲を聞いた。(初めは此の聲も夢に聞く心地であつた)

「これは驚いたな。剃り落してごらん、王様そつくりになつちまうぞ。」

私の太い髭を剃り落せば、君主になれると云ふのは、夢にしては聊か可笑しすぎる。私は姫君と恰度二度目の接吻をしようとするところだつたが、斯う考へて來ると、心ならずも眠りを覺まされた事が分つた。

眼を開くと、随分物珍らしさうに私の顔を見守つてゐる二人の男がゐた。二人共狩獵服を着けて銃を擔いでゐた。一人は何方かと云ふと小兵ながらも丈夫な作りで、彈丸型の頭に灰色の荒毛の髭を蓄へ、ちよいと血走つてはゐたが青白い小さな眼を持つてゐる男。もう一人は中肉中春の青年で、肌は淺黒かつたが何となく隆とした男だつた。一方は老軍人だが、他は上流社會に育つて、軍隊生活なんか味つた事のない紳士としか受取れない。後で聞けば、二人共私の思つた通りの人々だつた。

年寄つた方の男は、青年を従へて私に近づいた。青年は丁寧な帽子を取つて近寄る。私もゆつくり立上つた。

「脊恰好も同じ位だ。」年上の方は、六尺一寸もある私の身長を見上げ見下しながら斯う呟いた。それから軍隊式に擧手の禮をして切り出した。

「お名前を伺ひたいんぢやが……」

「其方からお近づきにいらしたくせに、まづ御自分からお名乗り下さい。」私はにつこりしながら答へた。

青年は嬉しげな微笑を湛へて前へ進むと「此れはサブト大佐と申します。私はフリツ・フォン・ターレンハイムと申しまして、共にルリタニヤ國王に仕へてゐる者です。」

私はお辭儀をしながら答へた。

「私はルドルフ・ラッセンダルと云ふ、英國の旅行者です。一二年に一度づゝ、女王陛下の御用を承つてゐる者です。」

「では、お互ひに宮仕へする仲間ですな。」と、云ひながらターレンハイムが差出す片手を、私は待ち兼ねて握り占めた。

「ラッセンダル？ ラッセンダルと云ふと……？」とサブト大佐は呟いた。何か思ひ當る事があるやうな顔色である。

「さうだ！ 君はパーレスドン家の方ですか？」と大佐が叫んだ。

「兄は今パーレスドン伯爵になつて居りますよ。」と私。

「頭の恰好で分りますよ。」大佐は帽子を脱いで私の頭を指しながらクスリと笑つて、「フリッツ君、君あの話を知つてゐるね？」

青年はいかにも濟まないといふやうな顔附で私を見る。此の男は嫂に好かれさうな微妙な所を持つてゐた。私は此の男の氣を安めようと思つて、にっこりして調子を合せた。「おやく。お口振りから察しますと、此方まで例の話が擴まつてゐると見えますね？」

「擴まつてゐますとも」とサブトは叫んで、「まあ此の土地に逗留してゐてごらんさい。ルリタニヤ中の人間が——男も女も——同一人間が二人あるかと疑ひますよ。」

私は何だか不安になつて來た。

此の時、背後の森の中から、亮らかな聲が聞えて來た。

「フリッツ！ フリッツ！ 何處にあるんだ！」

ターレンハイムは起ち上つて、急ぎ込んで云つた。

「そら、王様だ！」

サブト老人は又クスリと笑つた。

すると一人の青年が木立の後から跳び出して、我々の傍に突立つた。私はその人を一と目見て、はつとばかりに驚ろいた。向うも又向うで、私を見ると、不思議さうに反り返つた。私の顔に生えた鬚と、先方に備はる威嚴とを除いて、更に、私より半時——否、半時足らず、と云つていい位——の脊丈の短かさを除いたら、ルリタニアの國王はルドルフ・ラッセンダルであり、私ルドルフは國王であるといつても見分けはつかない位だつた。

暫くは二人共身動きもしないで突立つてゐた、顔と顔とを見合せて。それから私は脱帽して敬禮した。王様は漸く聲を出して、驚き顔に尋ねられた。

「フリッツ——大佐。此の人は誰方ぢや？」

も少しで私が答へようとする時、サブト大佐は王様と私との間に歩み寄つて、低聲で王様に語りかけた。王様はサブト大佐の頭を見下すやうにして聞いてをられたが、眼は時々私を盗み見る。私はちつと、王様を見つめた。私はお互の相違點ばかりを探さうと力めたが、二人の相似には吾れながら驚くばかり。國王の顔面は、幾分私のより肉が多く、楕圓形の輪廓が、極めて些かながら私のよりも正確で、更に面白い事に、王様の唇は、私のが堅く引締つてゐるのに引替へて、聊か締りが無い事であつた。然し如上の、即ち極く微細な相違があるだけで、不思議な程似通つてゐた。

サブトは言葉を切つたが、國王は依然として眉に八の字を寄せたまゝである。と見る間に、王の

層は次第々々に歪んで、(私が笑ふ時もさうだが)鼻が垂れ下つて、眼が閃いた。すると忽ち、王は押へ切れぬ嬉しさの笑ひを吐き出されたのであつた。其の笑聲は森中に響き渡つて、王の快活な爲人を偲ばせた。

「これはく。」國王は私に近づきながら、私の背中を叩き、笑ひながら叫ばれた。「吃驚したのも無理ではない。眞逆今日、生き寫しの人間に逢へやうとは思ひがけない事だから喃、フリッ！」

「私こそ、失禮いたしました。何卒今後御見棄なく、御目をかけて下さいませ。」と私が云つた。

「私が目をかける、かけないに抱はらず」と、王様は笑つて、「いつまでも王の寵を樂しまれるがよい。それ所か、出来るだけの事はして上げようと思つてゐる。一體、何處へ御旅行なさるのか？」

「ストレルソーへ参ります——戴冠式に。」

王様は部下を顧みられた。まだ笑顔こそして居られたが、何となく不安の色が漂つた。けれども、まだ此の場の好機嫌を失はれずに、「フリッ！ フリッ！ ミハエルに吾々二人が竝んだ所を見せて驚す事が出来たら、千も王冠を貰つたやうな心持ちがするだらう。」云ふなり王様は、カラ／＼と打ち笑はれた。

「左様でございます。」と、フリッ・フォン・ターレンハイムは答へた。「今時、ストレルソーへ行かれるラツセンダルさんの御心が分りませぬね。」

王は巻煙草に火をつけられた。

「さうさナ、サブト？」と王様も疑はしげに仰せられる。

「行つて貰つては不可ませぬね。」とサブトが呟いた。

「これ、大佐、其方は私がラツセンダル君に義理があつて……」と、王様の言葉半ばに、「おつと、これは巧く隠れおつたぞ！」サブトはかう云ふなり、ポケットからパイプを引張り出した。

「分りました。私は今日ルリタニアを去りませう。」と、私が云つた。

「いや／＼、それは不可ん。それはサブト流に云へば單刀直入と云ふものぢや。今夜、予と晚餐を共になさい。萬事それから後の事ぢや。毎日新規に親類に逢へる譯でもあるまい。さアおいでなさい。」

「今晚は控へ目に食事するのでございますよ。」とフリッ・フォン・ターレンハイムが云ふ。

「お客があるんだもの、そんなことは出来ない。」と王様が仰せられた。そしてフリッが肩をすくめるのを見ると、追つかぶせるやうに、「予が明日早出だと云ふ事を忘れはしまいな、フリッ！」

「私も……明日は早出ぢや。」と、サブト老人はパイプを口から外しながら云つた。

「サブトはよく氣がつくな。」と叫んで、王様は、「時に、ラツセンダル君、君のお名前は？」

「王様と同じ名でございます。」と、私は一禮して答へた。

「ほう、私に恐れ氣もなく名づけたと見えるな。」と一笑された。「ではルドルフ君、來給へ。此の土地には予の館は無いのぢやが、弟ミハエルが其の館を貸してくれたによつて、其處で、何うやら君を御もてなし出來やうと思ふ。」王様はかう云ひながら、私と腕組みして、部下にはお供せよとの合圖を

するなり私諸共森を抜けて西へくと歩み出された。

我々は三十分以上を歩いた。其の間、王様は間断なく煙草を喫ひ、且つ話された。王様はひどく私の一家に興味を持たれ、私が畫廊にあるエルフバーグ風の髪色の畫の話をすると心から笑ひ出された。それから、私のルリタニア旅行が秘密だと云ふ事を話した時には殊に腹から大笑ひされた。

森を抜けると突如、小さな荒れた狩小屋に着いた。それは平屋建てで木造の、パンガローと云つた風の家だつた。小屋に近づくと制服を着た小男が出迎へに來た。此の邊で見た人間と云へば肥つた老婆がたゞ一人つきり、しかもそれは太公のおつきのヨハンの母だつた事を後で知つた。

「晚餐の用意は調うてゐるか、ヨセフ？」と王様が訊かれた。

小男は用意調つた旨答へて案内した。我々は夥しい御馳走の卓子についた。王様は心から美味さうに召上つた。フリッツ・フォン・ターレンハイムは慎しやかに、サブト老人はガツくと食つた。私は躡けられたとほり作法に叶つたナイフとフォークの使い方をした。王様はそれに氣づいて御讚めになつた。

「我々エルフバーグと來たら、揃ひも揃つて食道樂だ喃。」と王様は仰せられた。「時に何としたことだ、酒拔きで食事するとは！ 酒だ酒だ、ヨセフ！ 飲物拔きに食べるやうな獸物ぢやないぞ。我々は牛ぢやないぞ。」

此の言葉に、ヨセフは早速酒罈を卓子に運んだ。

「明日の事を忘れるんぢやないぞ！」とフリッツが云へば、サブト老人も、「大丈夫だ。明日だ！」

王様は客人ルドルフのために乾杯された。王様は大喜びで私の事を「従弟ルドルフ」と仰せられる位、私も「エルフバーグ風の赤色」を祝つて乾杯した。それを王様は聲を立ててお笑ひになつた。

さて、肉も上等には違ひなかつたが、振舞はれた酒の美味しさは金も讚辭も及ばない逸品で、我々は心ゆくまで飲んだ。フリッツは王様の御手を停めようと試みた。

「何だと！ お前は私よりも先に出發する筈だつた、喃フリッツ。其方は予よりも二時間ほど豫程が少い筈ぢや。」

フリッツは私が解つてゐないのを見てとつて、「大佐と私とは明朝六時に出發するのです。」と説明した。「ゼンダまで行つて近衛兵を引率し、八時に王様をお迎へに歸つて來るのです。それから一同馬で停車場まで行くのです。」

「同じ近衛兵は御免だ！」とサブトが唸つた。

「弟ミハエルが自分の部下に警護させたいと云ふのは、弟の好意ぢや。」と王様は云つて、「従弟よ、君は早出するには及ばないのだ。さア、もう一本傾けよう。」

私はもう一本——と云ふよりは、大部分を王様に飲まれて了つたから、その幾分かを傾けた。フリッツは諫言を思ひ止つた。諫め役が反對に口説き落されて、間もなく一同酔ひつづれ、矢でも鐵砲でも

持つて来いと云ふやうな勢ひになつて了つた。王様は未來の方針をお話しになり、サブトは昔の手柄話を、フリツは美少女の噂か何かを、私はエルフバード時代の功績を物語つた。皆な一度に喋舌り出したが、つゞいてサブトから明朝の注意に就いて文字通りの訓戒があつた。

終に王様は杯を下して椅子に反り返つて了はれた。

「随分飲んだ喃！」と仰せられる。

「私とて仰せの通りでございます。」と私が云ふ。

全く、王様のお言葉通りであつた。

私が口を利いてゐる時、ヨセフは柳籠に入れた素晴らしい細口瓶を持つて来て王様の前に置いた。それは餘程長い間暗い地下室に入れてあつたものと見えて、蠟燭の光でさへきら／＼する位だつた。

「ストレルソー太公さまからお遣ひ物でございます。王様が色んなお酒にお飽きになつた頃此のお酒を差上げて、兄弟の誼みに召上つて下さいと仰せつかつて参りました。」

「ミハエルはうい奴ぢや。」と王様が仰つた。

「ヨセフ、栓を抜け。何と心得るのぢや、弟からの酒と聞いて躊躇すると思ふか！」

栓が抜かれると、ヨセフは王様の杯に酒をついた。王様はグツと飲みほされた。そして時刻と身分に備はる嚴肅な態度で、我々を見廻して、

「皆の者及び従弟ルドルフ（ルドルフとは恥づかしい話ではある）、ルリタニア半國は云ふに及ばず、

何もかも諸君に差上げてまい、が、此の名酒ばかりは一滴たりとも差上げない。予はこれを、黒のミハエルと云ふ横着な弟の健康を祝つて飲むのぢや。」

かう云ふなり、王様は瓶を掴んで口に當てがふと一息に飲み乾して手を放された。そして卓子に眩枕して寢込まれた。

我々は王様の吉夢を祈つて乾杯した。それだけしきや私は其の夜の事を覚えてゐない。恐らくこれだけで澤山だらう。

#### 第四章 王の約束

ほんのちよつとの間眠つたのか、それとも一年間も睡つたのか、私は知らない。ギョツとして身震ひしながら眼をさますと、顔も髪も服も水にズ濡れになつてゐた。そして眼の前には片手に空バケツをぶら下げたサブト老人が、ニヤ／＼笑ひながら立つてゐた。老人の脇の机にはフリツ・フォン・ターレンハイムが腰かけてゐたが、幽霊のやうに眞蒼になつて、眼の前にゐた。

私は怒つて跳び上つた。

「冗談も過ぎるよ！」と叫んだ。

「チエツ（と舌打ちして）今喧嘩なんかしてゐる暇はない。君にこれ以上の事はしやしないよ。もう五時だ！」



「御親切にありがたう！」と、私はまた喰つてかゝつた。身體は何時になく冷え切つてゐたが心の中は燃えるやうだつた。

「ラッセンダル君！」と、フリッツは横合から口を出して、机から下りると私の腕を掴みながら、「これを見給へ。」

王様は床の上に大の字になつてゐられた。其の顔は髪と同じやうに眞赤になつて、吐かれる息は重く重い。失敬極まるサブトは、烈しく王様を足蹴にした。五體はビククリどころか、呼吸さへもお亂しにならなかつた。王様の顔や頭も、私と同じやうに水だらけになつてゐた。

「王様には三十分から掛りつ切りになつてゐたんだ。」とフリッツが云つた。

「王様と來たら君の三倍も召上つたんだからな。」とサブトが唸るやうに云つた。

私は跪いで脈を取つてみた。脈は恐ろしく緩慢だつた。我々三人は只顔を見合はずばかり。

「あの最後の酒瓶には——一服盛つてあつたのかしら？」と、私は囁くやうな聲で訊いた。

「どうだか……」とサブトの答。

「醫者を呼んで來ないと不可い。」

「醫者は十哩も行かないと居ないし、また、たとへ千人の醫者が間に合つたとしても、王様が今日ストレルソーへ行かれるやうには迎もなるまい。私は此の容態をよく知つてゐるんだ。まだ六七時間動かせさうもないよ。」

「だが戴冠式は如何するんだ！」私は驚いて叫んだ。

フリッツは肩をすくめた。是はフリッツが、大抵の場合よくやる癖である。

「王様は御病氣だと云つてやらなきやならない。」

「さうした方がいゝね。」と私が云つた。

英氣に充ちたサブト老人はパイプに火をつけて、パツバと吸つてゐた。

「若しも今日戴冠式にお出かけがないとしたら……誰に王冠を渡すものか。」

「如何したと云ふんだ、一體？」

「國民全部が王様を見たさにストレルソーに集つてゐる。それに黒のミハエルを始めとして陸軍の半数も來てゐるんだ。王様は酔つていらつしやると云つてやらうかしら。」

「御病氣だと云つてやつた方がいゝ。」と私が云ひ直してやると、

「御病氣か！」とサブトは言下に答へて、輕蔑したやうな笑顔を見せた。「王様の病氣は有名なものだよ。以前にも御病氣だつた事があるんだからな。」

「他人の思惑なんか考へては居れん。此の事を云つてやつて善後策を講じるんだ。」と、フリッツは投げ出すやうに云つた。

サブトは手を上げて、

「君、王様は一服お盛られになつたと思ふかい？」

「さうさ。」と私が答へた。

「誰が盛ツたんだらう。」

「極つてゐる、黒のミハエルさ。」と、フリッツは嘔んで吐き出すやうにして云つた。

「さうだ。」とサブトが云つた。「王様が戴冠式にお見えにならぬやうにする心算なんだな。ラッセンダル君は好男子のミハエルを知つてゐないだらうが……。フリッツ君、ミハエルは王様になれる準備が出来ると思ふかい？ ストレルソーの人民中に他の候補者はないのかしら。神様つてもものがあるなら、今日、王様がストレルソーにお現はれにならなかつたら、王位なんてものは失くしてくれればいい。俺は黒のミハエルを知つてゐるんだ。」

「王様をストレルソーへ引張つて行かうよ。」

「そんな事したらいゝ圖だらうな。」とサブトは嘲笑つた。

フリッツ・フォン・ターレンハイムは両手に顔を埋めた。王様は大軒をかいていらつしやる。サブトはもう一度足をあげて蹴つてみた。

「酔つ拂ひだ！ がエルフバークの血の流れた方で、あの父君の王子なんだが、もしも黒のミハエルが王位にでも即くやうだつたら、もうお終ひだ！」

一二瞬間、我々二人は黙りこんでゐた。するとサブトは、太い半白の眉を寄せて、パイプを口から離すと私に向つて云つた。

「人間は年を取ると運命と云ふものを信じるやうになるものだ。其の運命が君を此處へ寄越したんだ。運命がこれからストレルソーへ遣るだらう。」

「エツ。」と叫んで、私はよろ／＼とした。

フリッツは驚き顔でヂツと見つめてゐる。

「そんな事出来るものか。僕つて事が分つて了ふ！」と私が云つた。

「冒険さ！ 千萬に一番の兼ね合ひだよ。」とサブトが云つた。「君、顔を剃つて見給へ、大丈夫分りつこないよ。それとも恐いのかい？」

「何！」

「やつて見給へ！ だが、萬一暴露やうなものなら君の生命にかゝはる仕事だぜ、それから俺も、此處にゐるフリッツの生命にも……。然し君が行つてくれないとすれば、黒のミハエルが王位に即いて、王様は牢屋に幽閉されるか、墓場に送られてお了ひになるかに極つてゐるんだ。」

「そんな事しやうものなら、王様は御承知なさるまい。」とオツ／＼して私が云つた。

「我々は男だぜ！ 御承知なさるもなさらぬもあるものか。」

私は立つて思案してゐた。時は刻々と過ぎて、五十秒、六十秒、七十秒と経つて行く、すると自分の顔を見つめられるやうな氣がしたと思つた刹那、サブト老人は私の手を確かと握りしめて、泣くやうにして云つた。

「行つてくれ給へ。」

「よろしい。行かう。」私はかう答へるなり、眼を伏せて、床に横はつた王様の身體を打ち眺めた。

「今晚、我々は御殿に泊らなかりやならないんだ。」とサブトは急ぎ込んで囁いた。「一同が出發したら直ぐ、君と僕とは馬に乗つて、此處まで駆けつけて来るんだ。フリツは向うに居残つて王様の御部屋を張番する。すると王様のお用意が出来たとヨセフが云ふから、私は王様と一緒にストレルソーまで馬で歸る。そして君は必死の勢で國境へ馬を走らしてくれ、ばい、んだ。」

突嗟の中にこれだけ聞くと、私は頷いた。

「冒險だナ。」と、希望に燃える顔つきで、初めてフリツがかう云つた。

「發覺さへしなければ。」と私。

「萬一露顯の曉は、まづ『黒』のミハエルを斃してから、殺られるつもりだ。幸福を祈るよ。君、まア腰かけ給へ。」とサブトが云ふ。私はその言葉通りに腰かけた。

サブトは「ヨセフー、く」と叫びながら室から駆け出した。二三分間も経つとヨセフをつれて戻つて来た。ヨセフは湯を入れた水差と石鹼や剃刀を持つてゐた。サブトが目下の形勢を物語つて、私の顔を剃れと吩咐けるとヨセフはガタ／＼慄へてゐた。

突如、フリツは自分の膝を叩いた。

「だが近衛の者は如何するんだ。奴等には分るぞー！ 分りさうだぞー！」

「フン。近衛なんぞ待つて居ないんだ。我々はホフボーまで馬で行つて、其處から汽車に乗る。近衛が来た時はもう後の祭りさ。」

「だが、王様は？」

「王様には地下室の酒倉に御辛抱願ふのさ。これからお運びしようか。」

「もし見つかつたら？」

「見つかるものか？ それとも見つかるよと云ふのかい？ ヨセフが巧く取計らつてくれるよ。」

「でも——」

サブトは足踏みして吼えたてた。

「我々は芝居をしてゐるんぢやないよ。僕だつて冒險だ位は知つてゐる。萬一見つかつたにしても、今日ストレルソーで王冠を戴けないのに較べればまだしもさ。」

かう云ひながら扉をバツと開けて、身を屈めると見る間に、夢にも思ひがけない力を振り絞つて輕と王様を抱き上げた。恰度その時、従者ヨハンの母が戸口に立つた。が、立つや否や踵を返して、何げない様子で今来た道を引返した。

「あの婆に聞えたかしら？」とフリツが叫んだ。

「あいつの口を封じてやらう。」と、サブトは凄顔して云ひ放つと、王様を抱き上げて出て行つた。さて、私はと云ふと、安樂椅子に腰かけてゐた。半ばボカーンとして腰かけてゐると、ヨセフは私

の髭と髻とを剃り落して、王様の顔そつくりにしてしまった。フリッは此の様子を見てゐたが、長い息を吸つて叫んだ。

「ややつ……これは巧い！」

もう六時になつてゐたので、一刻の猶豫も出来なかつた。サブトは私を急ぎ王様の部屋に招き入れ、近衛大佐の制服を着せつけた。私は王様の靴を穿きながら、一寸した隙を見て、老婆を如何處分したのかサブトに訊いてみた。

「何にも聞きやしなかつたと云つたが、念のため足を縛つて、口には半巾を突込み、両手も縛り上げて石炭倉へ締め込んでやつたよ。石炭倉は王様のいらつしやる倉の隣なんだ。後から両方共ヨセフが見廻る筈なんだ。」と云ふ返事。

それを聞いて私は噴き出してしまった。サブトも亦ニヤリと笑つた。

「ヨセフが王様はお見えにならないと云はうものなら、一同我々を怪しいと思ふだらう。何故つて黒のミハエルは今日ストレルソーに王様が見えやうとは思ひがけない事だからな。」

私は王様のヘルメットを冠つた。サブトは王様の佩剣を渡しながら、つくづくと私を打ち眺めた。

「ようこそ王様は顔をお剃りになつてゐたよ！」と彼は叫んだ。

「何故お剃りになつたんだい？」と私は尋ねた。

「その理由は、フラビア姫に王様がキッスをなさる時、鬚が頬に觸つたからさ。それはさうと、さア、出かけよう。」

「此處は此の儘で大丈夫かい？」

「大丈夫な所は一つもないよ。だが、如何にも仕様がないからな。」とサブトが云つた。

フリッは私と同じ聯隊の大尉の服装で再び我々と一緒になつた。四分間はかりの中にはサブトも自分の制服を着けて来た。ヨセフが馬の用意が出来たと告げる。我々は馬に跳乗るが早い早足で駆け出した。勝負は始まつた、此の結果は如何なるのだらうか？

冷たい朝の空気が頭腦を明瞭させた。そしてサブトの言葉は全部聞きとれた。彼は偉い人物である。フリッは睡つたまゝ馬に乗つてゐるかのやう、時稀にしか口を利かぬ。サブトは王様の事は何も云はずに、すぐさま私の経歴や、家族、趣味、職業、悪友、または召使の話の話を簡単に訊き始めた。そしてルリタニア宮廷の禮式を教へてくれて、絶えず私の脇に附く事にして、知つてゐなければならぬ人を指示したり、挨拶の程度を教へてくれると約束してくれた。

「時に、君はカトリック教徒だらうね。」と問ふ。

「さうぢやない。」と私は答へた。

「へエ、君は異教徒かい！」とサブトは唸つて、それからローマ教の實際とか習慣とかの初歩を教へにかゝつた。

「仕合せな事に、これ以上知るには及ばないよ。王様と來たら、そんな事には丸でダラシがなくて無

頓着で通つてゐるんだから。だが君は當り前にやつてくれ、ばい。我々は王様を勝たせたいと思つてゐるんだ。と云ふ譯は、王様とミハエルとは長い間優先権を争つていらつしやるんだからね。」とやかくする中に停車場に着いた。フリツはすつかり元氣を恢復して、驚いてゐる驛長に向つて、王様が豫定を御變更になつた旨を話して聞かせた。汽車は走り出した。我々は一等車に納まつてゐた。サブトはクツシヨンに凭りかゝつて、私への話をつゞける。私は時計——勿論王様の御持物——を見た。恰度八時である。

「我々を皆で探しに行きやしなかつたかしら？」と私が云ふと、  
「王様を見つげ出さなきやいゝが。」と、フリツが心配さうに答へた。すると今度はサブトが肩をすくめた。

汽車はよく走つた。九時半ごろ、窓から外を眺めてゐると、大きな都會の塔や尖塔が望まれた。

「あれが首府だよ。君。」と、サブトは手を振りながらさう云ふと、前方に屈むやうにして私の脈を取つた。「幾らか速いな。」さう云つた聲は不満らしかつた。

「僕の身體も木石ぢやないのでね。」と私は叫んだ。

「君は大丈夫だよ。」と、サブトは頷いて云つた。「所でフリツは瘡が起つて仕方がないんだと云ふ事にしよう。フリツ！ その水差を空けて了ひ給へ！」  
フリツは吩咐かつた通りにした。

「一時間程早目に着くね。」とサブトは云つた。

「王様御到着の傳令を出さう。でないとお迎へに来る者が一人もゐないからな。その中に——」

「その中に、」と私が云つた。「何か召上らないと王様は御最期だよ！」

サブト老人はクスリと笑つて、手を差出した。

「君は、流石に頭から爪先までエルクバグの血をつぐ人だね。」と云ひかけると、ちよつと口を切つて、我々を見くらべながら靜かに云つた。

「今晚は無事に過したものだ喃！」

「神かけて！」とフリツ・フォン・ターレンハイムが云つた。

汽車が留ると、フリツとサブトは先に跳び出して、脱帽して、開けた扉を押へてゐてくれた。私は咽喉にからんだ塊をゴクリと嚥みこんで、ヘルメットを目深に冠り直すと（正直に白狀するが）心の中で神を祈つた。さうしてストレルソー驛の歩廊に降りたのである。

忽ちにして大混雑が湧き上つた。人々は帽子を手にして、彼方此方へ駆け廻つた。或ひは揉み合ひへし合ひした。軍隊の陣所へ急ぎ馬を飛ばせる者がある。教會やミハエル太公の許へ馳せつける者もあつた。私が茶碗を傾けて珈琲の最後の一滴を飲み干すと、間もなく町中の鐘と云ふ鐘が悉く歡喜の音を立て、鳴り渡つた。そして軍隊の樂の音や、燥き廻る男女の聲が耳に響いた。

國王ルドルフ五世陛下がストレルソーの市においでになる！　そして市民は外で叫んでゐる。

「王様萬歳！」

サブト老人の口許は、引釣つたやうな微笑に變つた。

「本當の王様も、替玉も巧く行つてくれ、ばい、が……。確りし給へ、君！」と彼は囁いた。そしてその手は私の膝を抑へてゐた。

## 第五章 戴冠式

私はフリッ・フォン・ターレンハイムと、サブト大佐とを身邊に従へながら、食堂車からブラットフォームに降り立つた。最後に私は携へたピストルに故障がないか、劍は鞘走りがよいか如何かを調べた。華美な服装をした士官や貴顯等の一團は、勳章をつけ陸軍の正装をした脊の高い老人を頭に、整列して待つてゐた。老人はルリタニア紅薔薇の黄と紅の大授章を着けて居たが、それは私の胸にも飾つてあつた。

「ストラケンツ元帥だよ！」とサブトが囁いたので、私はこれがルリタニア陸軍中名聲最も高き老將軍だナと思つた。

元帥のすぐ背後には、黒と紅の禮服を長く垂れた小男がゐた。

「王國の大審院長だ。」とサブトが囁く。

元帥は一言二言、忠誠な挨拶の辭を述べて、ストレルソー太公からの申譯を述べた。察するに太公

は、急に微恙に冒されて、停車場に來る事が出来なくなつた、めに、教會で王のお出を待受けようとしてゐたのだらう。私は元帥の言葉を慇懃に受け、又文武百官の祝辭を受けた。誰一人として私をつゆ怪しいと思ふ者はなかつた。私は自分の緊張した神経が弛み、烈しかつた鼓動が靜かになつて行くのを覺えた。けれどもフリッは依然として顔色蒼然として、握手しようとして元帥に差し伸ばした手は、木の葉のやうに慄へてゐた。

我々は直ちに行列を作つて、停車場の出口へ向つた。此處で馬に跨らうとすると、元帥は鎧を押へてくれた。一般高官は皆銘々の馬車に乗る。私は右に元帥を、左にサブト（侍從長として、此の位置に就かされる）を従へて馬を街に進め始めた。ストレルソーは一部分は新らしく、一部分は古い町である。廣々とした近代的な竝木路と住宅區とが、昔からなる狭い、窮屈な、それでゐて繪のやうな町を包んでゐた。外廓には上流階級の人々が住み、内側には商店が軒を並べてゐたが、其の賑やかな表通りから一步入ればゴミ／＼した路次や小路が隠れてゐて、其處には貧困者や、亂暴者や、中にも目立つて犯罪者が住んでゐた。私はサブトから聞いて知つてゐるのだけれど、此の社會的、地理的區別はもつと重要な或る區別と密接な關係があるのである。即ち、新しい町は王様最眞であつたが、古い方の町では、ストレルソーのミハエル太公が最眞であり、英雄であり、希望であつた。

竝木路や、王宮の在る大廣場を通過する時の光景は、まことに見事なものであつた。今や私は行列の中心に居た。沿道は軒竝に紅い布を垂れ、旗や文字板を飾つてゐた。町の兩側には一段高く座席

が竝べられてあつた。私は歡呼の聲や祝詞を浴びせかけられたり、半巾を打ち振られたりする中を、左右に會釋しながら進んだ。バルコニーには姿美々しい婦人連が竝んでゐて、拍手したり、お世辭を並べたり、美しい眼ざしを投げかけたりした。紅薔薇が瀧のやうに降りかけられた、と見る間に一枝の花が馬のタテガミに留つた。私はそれを摘み上げて其のまゝ、服につけた。元帥は微笑する。私は元帥の顔を盗み見してみたがその嚴めしい顔には私に對する同情の色など少しもよめなかつた。

「エルフバードの赤薔薇だ喃、元帥。」と、私が氣輕に云ふと、彼は只頷いた。

私は今「氣輕に」と記した。これは可笑しく聞えるか知れないけれども實のところ、私は酒を呑んで亢奮してゐた。其の時私は、恐らく私は、自分を王様だと信じ切つてゐた。そして、勝ち誇つた、快い顔つきで、私は眼を決して、再三美人の立つてゐるバルコニーを眺めて過ぎた。それは何故か、美しい顔、亮やかな微笑もて自分を見下してゐた人こそは、わが旅の道伴の女アントワネット・ド・モーバンであつたから。そして彼女も肩をかみしめ、前へ屈むやうにして私を睨めてゐた。やがて、氣を取り直した途端、私は彼女の眼ざしを真正面から受けて、思はずピストルに手をかけたのである。「あれは王様ではありません！」とでも叫ばれたら何としやう！

さて、我々は進んだ。やがて元帥は鞍に跨つたまゝ、向きを變へて手を振つた。すると胸甲騎兵が我々の周圍にかけつけてくれたので、群集は私に近づけなくなつた。我々は王様最眞の人々の町を過ぎて、ミハエル太公の土地に入つて行つた。するとミハエルの行動は、町の感情の赴く所を、言葉以上に雄辯に證明してくれた。然しながら、たとへ運命が私を王様たらしめたとしても、私の務めは、自分の役目を完全に果すと云ふ事ではなかつたか？

「何うして隊伍を變へたのか？ 元帥。」と私は云つた。

「かうしたはうが一層、用心堅固と心得まして、ございます。」と、元帥が呟く。私は手綱を引きしめた。

「前方にゐる者共を五十碼ばかり先に遣つてくれい。それから元帥とサブト大佐其の他は、予が五十碼進むまで此處に待つてゐて貰ひたい。何人も予の身近に近寄つてはならぬぞ。予が人民に深く信頼してゐる事を總ての者に悟らせたいから喃。」と私は云つた。

サブトは私の腕に手をかけたが、私はそれを振り拂つた。元帥は躊躇した。

「云ふ事が分らぬのか？」と、私が云ふと、彼はまた肩を嚙んで命令を下した。サブト老人は髪を動かしてニツコリしたが私の方に向いて頭を振つた。若しも私が白晝ストレルソーの町で殺されでもしたら、サブトの立場は困難なものとなるに違ひない。

此處で私は黒い長靴を穿いてゐる外、全身雪白の装束であつた事を云つておきたい。頭には金屬の飾の着いたヘルメットを冠り、胸には廣い薔薇紋章を斜に垂れた。私が若し近代的な姿、勝れた體格を持つてゐなかつたら、私は王様に餘りい、挨拶はしなかつたかもしれぬ。私が唯一人馬に跨つて、古い町の煤けた、飾りのまばらな、陰氣な通りに入つて行くと、人民もさう思つたのか、呟く聲

が聞えてそれが何時しか歡聲の聲にだけ込んだ。とある料理屋の二階の窓から女の聲がした。それは此の地方の諺を叫んでゐるのだつた。

「赤い方なら本物だ！」

それを聞くとにつこりして、私は自分の赤毛を見せようとヘルメットを脱いだ。すると人民はこれを見て又はしやぎ始めた。

かうして一人馬上で歩くと、群衆の批評が聞かれて頗る面白かつた。

「王様は平生より蒼ざめていらつしやる。」と云つた者がある。

「王様みたいな生活をしてゐると、蒼ざめるのは當り前さ。」これは頗る不遜な相槌だ。

「思つたより大きな方だね。」と別な人が云ふ。

「鬚と云ひ、顎と云ひ綺麗な方だね。」と又別な者が云つた。

「御眞影より御本尊の方がズツと好いわね。」と私に聞えよがしに、美しい娘が云つたが、これは萬更御追従とも思はれなかつた。

然し、かう云ふ歡びを示す人々があつたにも拘はらず、大部分の群衆は沈黙して、重苦しい顔つきで私を迎へてゐた。そして王弟の肖像の額面が軒毎に飾つてあつた。それが王様への挨拶にはちと皮肉に思はれた。私はミハエルが不愉快な思ひをさせられないで済むのを嬉しく思つた。恐らくミハエルは敏感な質の人間で、私のやうに穩やかな解釋はしないかも知れなかつたから。

終に我々は寺院に到着した。數百の像を飾られて、歐洲無雙を誇る一對の樞戸を持つた、灰色の大女關は初めて私の前に現はれた。が、私の膽は即座に据わつて了つた。馬から降りると、何もかも呆やりとして、元帥もサブトも微かに見え、豪華な装ひを凝らして私を待ち受けた僧侶の群もかすんで見えた。歩いて本堂へ上る時も、眼はまだかすんでゐたが、オルガンを奏る音だけは耳に聞えた。私には本堂一杯に満ちた群衆も全然眼には見えなかつた。たゞ、僧正が挨拶を述べようとして監督職の座席から立上つた時、私は驟ろに其らしい姿を眼にとめた。二つの顔が竝んで、眼前に竝んだのが明瞭と見えたが——それは色白の美しい、エルフバーク風の髪の方々した（女には此の色の髪が素的に見えるものだ）娘と、血色のいゝ、紅い頬に黒髪と黒く澄んだ眼ざしの、一目で王弟黒のミハエルと知られる男の前に私は立つてゐたのである。ミハエルは私を見るや否や、紅顔忽ち蒼白となつて、冠れるヘルメットはガラ／＼と音を立て、床上に落ちた。明かに此の時まで、王様がストレルソーへお臨幸にならぬものと、ミハエルは確信してゐたに違ひない。

それから何が起つたか、私は少しも覚えてゐない。私が祭壇に額くと、僧正は額に油を塗つてくれた。それから立ち上つて、私は兩手を擴げて僧正の渡すルリタニア王冠を受取り、自分の頭に戴いた。そして古來の國王の誓文を宣べて（たとへこれは罪惡であらうとも、寛恕して貰へる事と思ふ）聖禮を一同の面前で受けた。すると再びオルガンが鳴り渡つた。元帥が私に聲をかける。かうしてドルフ第五世は王冠を戴いたのであつた。此の立派な式の光景は繪になつて、現在我が食堂にかけて



ある。王の肖像こそ見物である。

やがて、顔色白く髪美しい姫君は、二頁も書き連らね、ば云ひ盡せぬ程の淑やかさで、私の立てる場所まで連歩を運ばれた。すると元帥の聲が聞えた。

「フラビヤ姫にわたらせられます。」

姫は頭を低く垂れて、手を我が手の下から差入れ、持ち上げるとこれに接吻された。私は此の突嗟の場合爲す事を知らなかつた。それで姫を抱き寄せて、二度頬に接吻した。姫は顔に紅葉を散らしたのである——その時、僧正は黒のミハエルの前を通りぬけて、私の手に口づけすると羅馬法王よりの文書を捧げた。これは私にとつて後にも前にも、高貴の人から貰つた初めての手紙であつた。

次いでストレルソー太公が現はれた。其の足どりは亂れ、屠所の羊の如く右顧左眄し、顔色は紅くなり白くなつた。手は、私と握り合つた時躍らんばかりに慄へて、唇は乾燥しきつてゐた。サブトはと見ると、鬚の中の口を動かしてにつこりしてゐる。私は自分が引受けた此の生命がけの仕事の義務を立派に果さうと、ミハエルを両手に抱へて、其の頬に接吻してやつた。それが濟んだ時、サブトと私の嬉しかつた事!

然しながら、姫君の顔にも、他の誰の様子にも、露疑ひの色は見えなかつた。それでも、私と王様とが打ち並んで立つてゐたならば、即座に、或ひは暫時考へ込んで、姫君はこれを判別されたに違ひない。けれども姫君は固より他の何人も、私を王様意外の何人でもないと思ひ込んでゐた。それで私

は、相似を利用して一時間ばかり此處に立つてゐたものゝ、まるで一生涯王様であるやうな退屈さを感じてゐた。悉くの者が私の手に接吻した。大使連の中にはトーフアム老卿も居られた。私はグロスヴェナー・スクエアの卿の邸宅で度々舞踏した事があつたが、有難い事に卿も亦他の人同様、私の素性を看破し得なかつた。

それから我々は町を通つて宮殿へ還つて行つたが、人々が黒のミハエルに聲援してゐるのを聞いた。が、フリツの話によれば、ミハエルは夢幻の人のやうに爪を噛んでゐた程で、其の友達でさへしつかりしてくれ、ばいゝのにと云つてゐた程であると云ふ。私は今度はフラビヤ姫と相並んで馬車に乗つてゐた。悪戯な者が聲を揚げた。

「御婚禮は何時ですか?」此の聲がまだ終らぬ中、其の者の顔を打つて「ミハエル太公萬歳」と叫んだ者があつた。姫は眞紅になつて——その美しかつたこと——眞正面を向いて居られた。

茲で私は一大困難に遭逢した、と云ふのは私の姫に對する愛着の程度とか、姫君と私との間の交渉の程度と云ふものを、サブトに聞いてゐなかつたからだ。實際のところ、私が本當の王様なら、二人の仲が深入りすればする程、私は嬉しがるべき筈である。それは私が血のめぐりの鈍い人間でない上に、唯でフラビヤ姫の頬に接吻しなかつたからである。こんな考へが私の胸中を駆け廻つてゐたが、自分の立場をよく知らないために、私は口をつぐんでゐた。が、一二瞬の間に、姫はその平靜に復されると、私の方に向き直られた。

「ルドルフさま、今日は何となく御様子が変わつて見えますね？」と、姫君の言葉。

「驚ろく程の事でもなかつたが、此の言葉は心配になつた。今日は平生より謹直で落ち着いていらつしやいますわ。それに苦勞にお賽れになつていらつしやるやうで、幾分御瘦せになりましたのね。貴方が物事を眞剣に御考へになるなんて、謙のやうな氣がいたしますわ。」

姫の王様に對する態度は、嫂のパーレスドン夫人の私に對する態度と丸で同様のものであるらしい。

私は勇氣を出して言葉を交はした。

「これでは御氣に召しませぬか？」と、私は物柔らかに尋ねた。

「私の心持ちは御存じの癖に！」と、姫は眼を外らしながら答へた。

「御氣に召す事なら何なりともいたしますよ。」と云つて見ると、彼女はにつこりして顔を紅らめた。思ふに私は王様の役割を巧く果してゐたらしい、それで私は言葉をついだが、それは全然私の本心を語つたものであつた。

「私は生れてから此の方、今日ほど心をひかれた儀式には出遭ひませんでした。」

彼女は快く微笑んだ。が、忽ちまた陰鬱な顔になつて囁いた。

「ミハエルさまを御覽になりまして？」

「え、。」と、私は言葉をつないだ。「不快さうでしたね。」

「氣をおつけ遊ばしませ。」と云つて、彼女はまた、「貴方は——全く御監視が足りませんよ。と申し

ますのは……」

「分りました。ミハエルは私のものを欲しがつてゐる。と仰有るんでせう。」

「さうですわ、シートツ。」

それから——私は興へられた權利以上に王様の役目を努め過ぎたから——警戒されてゐるらしいと思ひながら語りつづけた。「そして、も一つは未だ自分の物にはならないで——今に——と思つてゐる物の事でせう。」

私はかう答へたのである。私が王様であつたなら、どんなに心が引立つてゐた事であらう。

「貴女は一日だけしきや責任をお持ちにならないのですか？」

「ズドン、萬歳々々！我々は宮殿に歸り着いた。大砲は轟き、喇叭は鳴つた。従者は數列に並んで待つてゐた。私は姫の手を取つて廣い大理石の階段を上つて先祖の形通り私の卓子についた。姫は直ぐに右に坐り、姫の向側には黒のミハエルが、私の左には大僧正が座に着いた。私の椅子の後はサプトが立つてゐる。見ると食卓の端にはフリツ、フォン・ターレンハイムが腰かけてゐたが、彼は即座にシャンペンの盃を底まで傾けてのみ乾した。

一體、ルリタニアの國王は今何をしてゐられるのだらう？それが私には氣になつた。

第六章 地下室の秘密

我々——フリッツ・フォン・ターレンハイムとサブトと私の三人は、王様の衣裳部屋に居た。私はぐつたりして安樂椅子に身を投げかけてゐた。サブトはパイプに火をつけた。彼は我々の大冒険の大成功に對しては何一言祝辭なぞ述べなかつたけれども、其の舉止萬端が満足な雄辯に物語つてゐた。其の成功と、も一つは多分酒の力であらう、フリッツはまるで別人のやうになつてゐた。

「君には忘れる事の出来ない日だね。」とサブトが云つた。「僕も十二時間でいゝから王様になつてみたいよ。ところでラッセンダル君、此の仕事に心まで打ち込んではいけないよ。黒のミハエルは平生以上に眞黒になつてゐたが、君と姫君とは随分睦まじさうだつたな。」「お姫様つて、随分綺麗だね」と私は叫んだ。「女の話なんか如何でもいゝが、」と、サブトは呟いて、「出發の用意はいゝかい？」

「いゝ」と、私は溜息しながら答へた。

もう五時だつた。十二時になれば私はまたルドルフ・ラッセンダルに復らねばならない。私は冗談らしい口振りでこれを云つた。

「君は運が好いよ。」とサブトは苦々しげに云つた。「故ドルフ・ラッセンダルと云はれるやうにならないで濟んだからね。それはさうと、君が此の町にある間は、僕は、自分の首が肩の上でヨロ／＼してゐるやうな氣がして仕方がないんだ。君はミハエルがゼンダから便りを受取つた事を知つてゐるか？ ミハエルは室に入つて一人でよんでゐたが、出て來た時は血相が變つてゐたぞ。」

「僕は用意はいゝよ。」と私は云つた。此の便りの來たことなぞ、私を引止める種には少しもならなかつた。

サブトは腰を卸した。

「私は、我々に此の町を退去させる命令書を書、せなきやならない。我々は邪魔がある場合の用意をしなければならぬんだ。君、命令書に署名してくれ給へ。」

「大佐 僕には偽文書を書く癖はついてゐないんだよ。」

サブトはポケットから一片の紙を取り出した。

「これが王様の御署名だ。それから、」と云ひかけてポケットを探つてから、「これが謄寫紙だ。君が十分間以内にルドルフと書けないと云ふなら——仕方がない、僕がやるまでだ。」「僕の教育も随分該博なんだが、君のはもつとヒドイものだね。君書き給へ。」と私が云つた。

そこで此の多才多能な豪傑は、大骨を折つて偽文書を作成した。

「フリッツ！ 王様は御寝みだ。御疲れたから明朝九時までは謁見謝絶たぞ、分つたね、誰でも謝絶だよ！」

「分りました。」とフリッツが答へた。

「ミハエルが來て、非常謁見を求めるかも知れない。そしたら姫君の外何人も謁見の資格がないのだ

と答へてくれ。」

「さう云へばミハエルが困るだらう。」とフリッツは笑つた。

「分つたね？」サプトは念を押して、「我々の留守中、此の戸が開けられないやう君は死を以て守つてくれ給へ。」

「御念には及びません。」とフリッツは聊か昂然と答へた。

「さア、君は此の外套にくるまるんだ。」と、サプトは私に向つて、「そして此の平帽を冠るんだよ。傳令が私と一緒に今晚狩小屋に行く事になつてゐるんだから。」

「それは無理だ。」と私が答へた、「馬では逆も四十哩は驅けられまい。」

「大丈夫さ、一頭の馬を使ふんだよ。一頭は此處にゐるので、もう一頭は狩小屋にゐるんだ。ところで、君の用意はいゝんだね？」

「いゝ。」

フリッツは手を差し出した。

「ひよつとすると……」と彼が云ふ。互ひに心からの握手をした。

「氣の弱い話だ。」と、サプトは鼻の先であしらつて、「さア、行かう！」

サプトは戸口の方へは行かないで壁の羽目板の方へ行つた。

「前の王様の御時勢には、よく此方の戸を使つたものだよ。」と、云ふ。

彼に尾いて歩く事凡そ二百ヤードばかりで我々は小路に出た。其處には頑丈な櫺の戸がある。サプトは鍵を外づした。我々が潜つて外に出ると、そこは宮廷の裏の靜かな大通りになつてゐた。見ると一人の男が馬を二頭用意して待つてゐる。一頭は栗毛の古今の俊馬で、もう一方は丈夫な狐色の馬であつた。サプトは私に栗毛の方に乗れと相圖した。待つてゐた男とは一語も交はさず、我々は馬に跨るが早いか駆け出した。町は陽氣で騒々しかつたが、我々は町外れの道をとつた。私の外套は半面を覆ひ、大きな平帽は人目に立ちやすい髪を隠してゐた。サプトの指圖に従つて私は鞍にとりすがつて、又と人目にかげられぬ猫背の可笑な恰好になつてゐた。長い細道を下つて行く途々、浮浪人や騒ぎ廻つてゐる人々に逢つた。其の上、まだ王様を歓迎して鳴り響く寺院の鐘を馬上で聞いた。もう六時半になつてゐたが、まだ明るかつた。やがて我々は市の外壁の門へ着いた。

「武器を用意し給へ。」と、サプトが囁いた。

「門番が口數利いたら、口止めしなきゃならんからな。」

私はピストルに手をかけた。サプトは門番に聲をかける。我等の運は強かつた。出て來たのは十四位の女の子であつた。

「あの、父は王様を見に参りまして留守でございませすが……。」

「出かけないで居れば好いものを。」と、サプトは私を見てニヤリとした。

「でも、私に門を開けては不可いと申しつけて置きました。」

「さうか、さう云つたか。」と、サブトは馬から降りて、「では鍵を出してくれい。」  
鍵は少女が持つてゐたので、サブトは一クラウンの貨幣を握らせてやつた。

「これは王様の命令書だ。これをお父さんに見せるんだぞ。命令ぢや、開門！」  
私は跳び降りた。大門をガラ／＼と引きずり下ろして、馬を出し、又、門を閉めた。

「ミハエルに門番が居なかつた事が分ると、可哀想だなア。ところで駆足にし給へ。町の近所では餘り早く駆けては不可いから。」

とは云へ、人々は歡樂を逐うて市中にある事とて、一步市外に出づれば、危険は少くなつたのである。やがて日が暮れるにつれて、我等も駒の足掻きを早めた。私の乗つた俊馬はまるで鞍上人なきが如く進んで行つた。快い夜で間もなく月が上つた。途中我等は殆ど口を利かなかつた。利けば主に事物の進行に就いて語つたばかり。

「太公へ来た手紙には何が書いてあつたらう？」と、一度訊いた。

「されば、何だらうな？」とサブトも答へた。

我等は酒に咽を潤し、秣をやるために馬を留めたが、これで三十分位費して了つた。私は部屋には入らうとしないで、馬と一緒に厩に入つてゐた。それから再び馬を走らせて大凡二十五哩ほど駆けたと思はしい頃、サブトが突然足を留めた。

「シューッ！」と叫ぶ。

耳を傾けると、遙か我等の後から宵闇の翻けさを破つて——恰度九時半頃であつた——とゞろくけた、ましい馬蹄の轟きを聞いた。風は後から強く吹き當てるので、此の聲音を齎らしたのだ。私はサブトの顔を覗いた。

「さア！」と、サブトは叫んで拍車を一と蹴り、馬は又駆け出した。次ぎにまた馬を停めて耳を濟ますと、今度は蹄の音は聞えなかつた。それで我々は足を緩めた。やがて又聞えて来る。サブトは跳び下りて、耳を大地につけて聞いた。

「二人だな。」と、彼は云つた。「一哩しか遅れてゐない。有難い事に、道が曲りくねつてゐる上に、此方は風下と来てゐる……」

我々は又駆け出した。抜かつてゐるとは思へなかつた。やがてゼンダの森の麓に入つたが、樹木は枝を交へ、道は稻妻形に曲折して、追跡者を見る事も出来なかつたが、向うにも亦我々は見えなかつた。

尚ほも三十分程走つてゐる中に、路が二股になつてゐる所へ来た。サブトは手綱を引きしめた。

「我々は右の方へ行くんだ。左へ行くと城に着く。何方に行つても八哩位だ。さア、下りよう。」

「でも、追つつかれやしないかしら？」と私が叫ぶと、

「降りるんだ！」と、無遠慮に同じ言葉をくり返した。私は云ふなりになつた。

森は道の際まで繁つてゐた。それで馬を茂みに引き込んで、兩眼を半巾で縛りつけると其の脇に立

つてゐた。

「誰が来るか確かめるつもりかい？」と、私は囁いた。

「さうだ、それから行先も。」と、サブトは答へた。其の手はピストルを握つてゐた。

馬蹄の音はだんく近づいて来た。折しも月は皎々と冴え渡つて、月光を浴びた道は眞白に見えた。土は堅かつたから我々の足跡は少しもついてゐなかつた。

「来たぞ！」と、サブトが囁いた。

「あッ、太公だ！」

「さうだらうと思つてゐたよ。」と、サブトの返事。

それは果して太公であつた。そして一緒に来た、逞ましい男は私のよく知つてゐる、そして向うも後で私を知るやうになつたマクス・ホルフで、お附きのヨハンの弟であり、太公の侍従を勤めてゐる男であつた。二人は我々の前まで来ると太公は手綱を引いた。見るとサブトの指はピストルの引金にかゝつてゐた。サブトはどんな犠牲を拂つても射ちたがつてゐる風であつた。もし射つのなら納屋庭に遊んでゐる鶏を射つよりも容易に黒のミハエルを射てたに違ひない。サブトは用心深く頷いた。彼は義務のためなら自分の趣味や嗜好を何時でも抛てる男であつた。

「何方へ行くのか？」と黒のミハエルが尋ねた。

「お城へ参りませう。さうすれば萬事真相が分ると云ふものです。」とお伴のホルフが答へた。

太公は、ちよつと逡巡つた。

「蹄の音が聞えたやうだつたが！？」

「そんな筈はなかつたと存じますが！！」

「何故狩小屋の方へは行かないのぢや？」

「敵の術中に陥りたくないからでございます。また、若し萬事都合に運んでゐるものなら、何を好んで狩小屋へ参りませう。萬事意に任せぬといたしましたら、毘の中へとび込むやうなものかと心得ます。」

突如として太公の馬が嘶いた。其の瞬間、我々は外套を馬の首の周りに折り畳み、抱へるやうにして、ピストルの狙ひを太公とその従者につけた。我々を見つけやうものなら、彼等を殺して了ふか捕虜にするかのつもりであつた。

ミハエルは暫し待つてゐたが、間もなく叫んだ。

「では、ゼンダへ！」そして馬に拍車を當てるが早いか駈け出した。

サブトは二人の後姿を見送りながらピストルを振り廻して、さもく残念で堪らぬと云ふ面ざしをした。餘りの可笑しさに、私は嘔き出す所をやつところへた。

それから十分間ばかり、我々は其の場所に立ち停つてゐた。

「萬事好都合だ、と云ふ便りが行つたらしいな！」と、サブトが云つた。

「何の意味だらう？」と私が訊く。

「それは分らないが！」と、サブトは眉を深く蹙めながら云つた。「よくく、困つてストレルゾーから引返す程の便りには違ひない。」

そこで我等も馬に乗つて、疲れ切つた馬を走れるだけの速さで駆けさせた。最後の八哩は口一つ利かなかつた。「萬事好都合」とは果して何の事だらう？ 王様は無事でいらつしやるのかしら？

終に小屋が眼に見えるやうになつた。拍車を蹴つて更に馬を跳ばせて、到頭門に着いた。四邊はしんとして静かである。人一人出ては來なかつた。急いで馬から降りると、サブトはいきなり私の腕を掴んで、

「あれを見給へ！」と、地面を指して云つた。見下すと、足許には五六枚の半巾が、斬つたり裂いたりして散らばつてゐた。不審に思つて私は相手の顔を見返した。

「此の布片で、あの婆さんを縛つておいたんだ。馬を繋いで來てごらん。」

扉のハンドルは譯なく開いた。我々は昨夜一芝居やつた部屋へ通つた。室には我々の食ひ残した食物や、空瓶が散らばつてゐた。

「此方へ來給へ！」と、サブトが云つたが、其の態度には平生の立派な様は殆ど見られなかつた。

我々は地下室へ行く道路へとび込んだ。石炭倉庫の戸は開け放されたまゝになつてゐた。

「婆さんは見つかつたな。」と、私が云つた。

「それは半巾を見たゞけで分つてゐるんだ。」とサブトが云つた。

それから、酒倉の境になつてゐる戸口へ行つてみた。此の戸は閉つてゐた。此の戸は如何見ても朝出發する時其の儘の姿であつた。

「此處は大丈夫だ！」と、私が云つた。

サブトの口から、大きな息が漏れた。顔を眞蒼にして、またもや床を指した。戸の下から紅い血の滴りが道路の床に流れて、其處で乾いてゐた。サブトは反對側の壁に向つて沾んで了つた。私は戸を押してみた。戸には鍵がかゝつてゐた。

「ジヨセフは何處にゐるんだ？」とサブトが呟いた。

「王様は何處に？」と、私が云つた。

サブトは水差を取り出して、唇を潤した。私は食堂に駆け戻つて、爐邊から重い火掻棒を持つて來た。私は恐怖と昂奮の餘り、戸の錠前を亂打して、彈丸を射ち込んだ。これが利いたと見えて、戸はバタンと開いた。

「燈りを持つて來てくれ給へ。」と、叫んだが、サブトは相變らず壁に向つたまゝ、踞つてゐた。

云ふまでもなく、サブトは王様を思つてゐたゞけに私以上に動揺してゐた。自分の事を思つて動揺してゐたのではなく、彼は今まで自分の事で動じた事はなかつた。が、此の暗い地下室の中に横はつてゐる物の事を考へたゞけで、誰でも顔色を蒼白にするのは請合だつた。私は自ら出かけて行つて

食堂から銀の蠟燭臺を取出して火をつけて戻つて来た。途々蠟燭がユラ／＼揺れる度に熱い蠟涙が手に滴つた。

私は地下室の戸の前に来た。紅い血汐は甚しく鈍褐色に變つて内部の方へ流れ込んでゐた。私は二ヤード程地下室の中へ入つてから、燭を頭上高く差上げてみた。室一杯葡萄酒が詰めてあつた。壁には蜘蛛が這ひ廻つてゐたし、床には空壇が二本横はつてゐた。それから隅の方を見ると、一人の男が横になつてゐた。その男は仰向けになつて、兩手を擴げ、咽喉には横に眞紅な深傷を負うてゐた。私はその男に歩み寄つて蹠づき、此の男の冥福を祈つた。此の男こそは召使ヨセフの屍體で、王様守護中に殺されたのであつた。

私の肩に手をかけた者がある。振り返ると恐怖に満ちた眼をギロリと輝かして、サブトが私の脇に突立つてゐた。

「王様は——あゝ、王様は如何なすつたんだらう！」と、彼は嘔聲で囁いた。私は蠟燭の光で、地下室を照らしてみた。「王様は此處にはいらつしやらない。」と、私は言つた。

### 第七章 孤軍奮闘

私はサブトの腰を抱いて、地下室から引き出してから傾いた戸を閉めた。十分間ばかりと云ふもの、二人とも何にも云はずに食堂に坐つてゐた。それから、サブトは心配さうに身悶えしてゐたが、

大きな溜息をして我に返つた。燧爐棚の時計が一時を打つと、彼は突立ち上つて云つた。

「王様は生捕りになられたんだナ——」

「さうだ！」と私も云つた。「萬事好都合と黒のミハエルへの便りに書いてあつた通りさ。今朝ストレルソーで皇禮砲が發射されてゐた頃、王様は一體どんな目に遭つていらしたんだらうな？ 一體何時便りが着いたんだらう？」

「手紙は朝の中に出されたのさ。君がストレルソーへ着いたと云ふ知らせが、ゼンダに着かない中に

出されたに違ひない。あの手紙はゼンダから來たのだらうと思ふよ。」

「約一日掛りで手紙を届けて貰つたんだと見えるね。」と私は叫んだ。「試練と戦つてゐたのは僕ばかりぢやなかつたんだね。一體、ミハエルは何んと思つたらう、な？」

「それが何うしたんだ？ 何んと思つたらうつてのさ？」

私は立ち上つた。

「引返さう。そしてストレルソー中の兵隊を召集しよう。明日正午までにミハエルを追跡しなければいけない。」

サブト老人はパイプを取出して、丁寧に蠟燭から火をつけた。蠟涙はテーブルに流れてゐた。

「かうしてゐる中にも、王様が殺害されるかも知らないよ。」と、私が云つた。

サブトは黙つたまゝ、ちよつと煙草を吸つた。



「あの悪婆め！」とサブトは吐き出すやうに云つた。

「如何かして、彼奴が嗅ぎつけられたのに違ひない。様子はよく分つてゐる。王様を攫はうと思つて来て見た、所が——とにかく王様は見つかつたと云ふ譯だ。若し君がストレルソーへ行つてゐなかつたら、君も、儂もフリツも今頃は天國へ行つてゐたかも知れないね。」

「王様は？」

「何處においでになるか、分るもんか。」と云ふサブトの返事。

「サブ、引上げよう。」と、私は促したが、サブトは依然として坐つてゐる。と、忽ち齒を軌らせながら笑ひ出した。

「占めたツ！ 此方は黒のミハエルに一杯喰はせたぞ！」

「さ、君！」と、私は堪へ切れなくなつて云つた。

「もう一度、一杯はめてやらう。」と、サブトが云ふと、皮肉な微笑が風霜と戦つた皺だらけの顔一杯に擴がつて、齒が白髪まじりの口髭の間からチラ／＼した。「君、ストレルソーへ引返さう。王様は明日また都へ御成りと云ふ譯ぢや！」

「王様と云ふと？」

「御即位になつた王様さ。」

「冗談ぢやないよ！」と、私は叫んだ。

「もし引返して、此のお芝居のからくりを明かさうものなら、此方の生命は如何なるか知つてゐるか  
い？」

「首がとぶだけの事さ。」

「では王位は如何なるんだ？ 貴族や人民共は、あれが芝居だつたと分つても、まだ酒啞々々と浮かれてゐると思ふのか？ 自分は酔つ拂つて戴冠式にも行けない代り、召使を身替りに遣はすやうな王様が、人民に好かれると思ふかい？」

「王様は藥を盛られてお了ひになつたんだし、僕だつて召使ぢやないぢやないか。」

「では儂は黒のミハエルの召使ひつて譯かい？」

サブトは立上つて私の傍によると、肩に手をかけた。

「君、君も男なら王様を救ひ出さなくつちやならん。引返して王様を守つて上げてくれ給へ。」

「だつて、太公も——太公に傭はれた悪者共も知つてゐるぢやないか？」

「そりや、さうかも知れん。けれども人に語る氣遣ひはない。」と、サブトは勝ち誇つたやうな怖い顔をして吠えた。「奴等は此方のものだよ。自分達の事を棚に上げて、君を責める筈があるものか。『王様は我々が拐かして下僕まで殺しておいたから、此奴は王様ではないぞ』などと云へないからね。」

凡ての事情が私の頭の中に閃いた。私を知ると否とに論なく、ミハエルがこれを喋舌る虞れはない。王様を連れ出さない限り、ミハエルには何にも出来はしないのだ。若し王様を連れ出して來ると

すれば、王様の有處が問題である。私は忽ちの間に、無鐵砲にも深入りして了つたが、此の時幾分の困難が烈しく降りかゝつて來た事を知つた。

「今に僕の素性が暴露するよ。」と、私は云つた。

「そりや分らん。が、まだ大丈夫だよ。それは兎に角、王様にストレルソーに來て頂かないと、町は二十四時間の中にミハエルのものになつて了ふ。さうなつて了へば王様も王位も萬事休矣だ！ 君、よろしく頼むよ。」

「王様が殺されてお了ひになつてたら如何するんだ？」

「君が頼まれてくれなきや、殺されてお了ひになるんだよ。」

「萬一王様が殺されてお了ひになつたとしたら？」

「其の時は、天命さ。君だつてミハエル同様エルフバードの後裔だから、君がルリタニアを治めてくれるのさ。だが、そんな事はないだらうし、君が王位に就いてゐる以上、王様を殺すやうな事は信じられん。君を王位に立てるのに、王様を殺したりなぞするものか？」

これは實に大膽な計畫——で、今までの筋書以上に大膽無謀なものであつた。が、サブトの言葉に耳を傾けてゐる中に、此の筋書の強味が分つて來た。それに私は血氣盛んな青年で、活動好きであつたし、未だ何人も嘗て試みざる仕事に乗り出させられてゐたのである。

「今に僕の事が分るよ！」と、私は云つた。

「ひよつとしたら……」と、サブトは答へた。

「さア、ストレルソーへ行かう。此處にあると鼠にかゝつた鼠みたいに捕まつちまうぜ。」

「サブト。」と、私は叫んだ。「引受けよう。」

「出かした！ 所で、馬が置いてあればいゝが……見に行つて來よう。」

「此の死骸を葬むつてやらなきやならないぜ。」と、私が云つた。

「そんな隙はないよ。」

「でも、僕は埋めて來る。」

「仕方がないなア。君は王様だと云ふのに……。よし、埋め給へ。儂が馬を探しに行つてゐる間に濟ませるんだよ。土はあまり深く掘らなくてもいゝぜ。此の男はそんな事意に介しない質だから。可哀想に、ヨセフは正直な男だつたになア。」

サブトは出て行つた。私も地下室へ降りた。私は不運なヨセフを抱き上げて、通り路に出て、小屋の戸口の方へ向つた。それから死骸を室の中に卸して、穴掘りの鋤を探さなきやならないなど、考へてゐると、そこへサブトが歸つて來た。

「馬は大丈夫。君を乗せて來た栗毛の弟があるよ。所で、此の仕事だけは止した方がいゝぜ。」

「いや、それはいけない。」

「僕は行かないよ。サブト大佐、ルリタニア中の人民のためにでも行かないよ。」

サブトは私を戸口まで引張つて来た。月は沈みかけてゐた。けれども三百ヤードばかり向うを、ゼンダからの道に沿うて来る一群の人の姿を認めた。人数凡そ七八人、内四人は馬に跨り、あとは徒歩と云ふ姿であつた。彼等は、鋤や鶴嘴と覺しい長い道具を肩に擔いで歩いてゐた。

「彼奴等が君の代りに働いてくれるよ。さア來給へ！」

サブトの云うた通りだつた。近づく一群は云ふまでもなくミハエル太公の部下で、その非行の跡始末に來るところだつた。私はもう逡巡しなかつた。が、或る止み難い欲望が起つたので、ヨセフの死骸を指しながら、サブトに向つて、

「ヨセフの代りに、奴等の度膽を抜かしてやらうか？」

「と云ふと、ヨセフに道伴れを拵へてやらうつてのかい？　だが、そいつは危い藝當だぜ、陛下！」

「奴等に一泡吹かせるんだよ。」と私が云つた。

サブトはためらつた。

「さて、君は詰らない事をするんだね。もつと分つた男だと思つてゐたのに……。萬一やり損じたら如何するんだ。此處は一と思案する場合なんだよ。どれ、僕が一つ奴等をあしらつてお目にかけてよう。」

彼は注意深く戸の隙間を開いた。そこから我々は脱け出して、裏口へ出た。此處に我々の乗る馬が繋いであつた。馬車道が此の小屋の廻りについてゐた。

「ピストルの用意は？」と、サブトが訊いた。

「ない、が刀を持つてゐる。」と、答へる。

「ほう——君は今晚、血にうゑてゐるんだね。無理もない。」と云つて、サブトはニヤリと笑つた。

我等は馬に乗り、刀を抜いて、一二分間黙つて待つた。すると馬車道を進んで來る人々の蹙音が、家の向側から聞えて來た。そして馬車の仕立場に着くと一人が叫んだ。

「それでは彼奴を捕へて了へ！」

「それッ！」と、サブトが囁いた。

馬に拍車を當てる、我等は馬をひた走りに走らせ家を駈け廻つて、忽ち惡漢共の中にもぐり込んできた。後で聞くとサブトは一人斬殺したと云つたが、恐らくは本當であつたらう。けれども、少しもそれらしい者を見かけなかつた。私は一太刀で鹿毛の駒に跨つた男の頭に斬りつけた。男は大地にどうと落ち仆れた。すると眼の前に一人の大男が立ち塞つた。と思ふ間もなく右に又一人現はれた。むし暑さに堪へなくなつて、馬に拍車を一當あてるが早い、持つたる太刀を大男の胸先めがけて突刺した。彈丸がヒュツと私の耳を掠めて飛ぶ——あはや射たれたと思はんばかり。私は刀を引抜かうとしたが抜けない。そのまゝ、刺し放しにして不圖見るとサブトは二十ヤードばかり向うを駈けて行く様子、後れじと私は跡を追うた。そして手を振つて別れを告げてゐたけれど、一彈が指を掠つて血を出して了つたので、アツと一聲、手を下ろした。聲にサブトは馬の上から振り返る。すると亦何

處から一發聞えたが、彼等は小銃を持つてゐなかつたし、我々は着弾距離を出てゐた。サブトは噴き出しながら、

「儂には一人、君には二人が片づけて貰つた譯だな。ヨセフも道伴れが出来たと云ふものさ。」

「奴等は死出の供だ。」と私が云つた。私の血は躍つた。そして彼等を殺して了つた事が嬉しかった。

「さて、面白い夜業をしたものだ。」と、サブトが云つた。「所で君だつて事を感づかれやしなかつたかな。」

「大きい奴は感づいたよ。逐ひ廻してゐる中に奴さん、王様！ つて叫んだぜ。」

「占め〜。今の中に黒のミハエルに一泡吹かせてやらうよ。」

我々はちよつと休んで、私の傷いた指に繻帶をした。傷口からは血が頻りに流れ出で、痛みがはげしかつたし、骨まで血が滲んでゐた。それから再び馬に乗つて、全速力で駆け出した。鬨争の興奮や覺悟は何時しか消えて了つて、我々はたゞ黙々として馬を走らせてゐた。起きたばかりの農夫を見つけたから、我等は自分等の朝飯と馬の秣とを出して貰つた。私は齒痛を装つて、顔を包んだ。それから再び行をつづけて、ストレルソーまで走つた。もう八時か九時近くで、門は八文字に開かれてゐた。此の門は太公の氣紛れや陰謀の度によく門ぢられる事があつた。我々は昨夜來た道を辿つて行つた。主従四人——主二人、馬二頭——はへつ〜に疲れて了つた。町は昨夜通つた時よりは遙かにひつそりして、人々は昨夜の歡樂に酔つて眠つてゐた。宮殿の門まで行く間に、我等は一人の人にも逢はなかつた。門前にはサブトの老馬丁が待つてゐた。

「御都合は如何でしたか？ 旦那さま。」と、彼が聞いた。

「萬事好都合ぢや。」と、サブトが云つた。馬丁は私に近寄つて手に接吻しようとした。

「王様はお怪我をなすつていらつしやるんだ。」と、サブトが云つた。

「これきしの事、何でもない。」と、私は馬から下りながら、「指を戸に挟んだのぢや。」

「いゝか……誰にも云ふなよ。」と、サブトは云つた。

老馬丁は肩をすくめた。

「若い者は誰でも遠乗りを好くものですが、何故王様は遠乗りをなさいませんのですか？」と、云ふので、サブトは呵々と笑つて、ごまかして了つた。

「君、人間は何時も信用しなきや謙だね。少くとも、君はさうし給へ。」サブトは鍵を鍵穴に差入れながら云つた。

我々は衣裳部屋に入つた。戸をバツと開け放すと、中には盛装したフリツがソファにふんぞり返つてゐた。眠つてゐたのだらう、我々が入ると眼をさました。そして直立すると私を見て歡喜の聲をあげながら、私の足下に跪いで了つた。

「よかつた〜、陛下は御無事であらせられましたか。」かう云ひながら、兩手を擴げて私を抱きかへた。

事實、これには私も感激した。王様は、たとへ過失もあるにはあつたらうが、人民に好かれて居られた。私は暫しは言葉もなく、又相手の幻影を破らうともしなかつた。だが丈夫なサブトにはこんな感情は持合せがなかつた。彼は嬉しさに自分の股を平手で打った。

「出かした。これなら大丈夫だよ！」と、サブトが叫んだ。

フリツは喫驚して私を見上げた。私は両手を差出した。

「お怪我なさいましたね。」と、フリツが叫んだ。

「引掻いたけの傷だが——」と、云ひかけて、私は口ごもつた。

フリツは呆れた顔をして立上つた。私の手をとつて見上げ、見下し、見下し見上げた。そして、いきなり私の手を振り放すと後へ退つた。

「王様は何處に——？」と、叫んだ。

「シーツ、馬鹿。」と、サブトは咎めた。「そんな大きな聲する奴があるか。此れが王様ぢや。」

コツ、コツと戸を叩く音がした。サブトは手を擴げて私を遮切つた。

「早く、寢室へ！ 帽子と靴を脱ぐんだよ。床に入つて、何もかも覆つてゐ給へ！」

私は吩咐かつた通りにした。間もなくサブトは、様子を覗いて、頷くとニヤリとしながら、頗る氣の利いた謙讓な紳士を紹介した。其の紳士は寢室の傍まで近寄つて、再三お辭儀してから、自分はフラビヤ姫のお邸から参つた者で、王様には昨日の盛儀でお疲れはございませんかと、伺つて参れとの姫のお使で参りましたと申述べた。

「姫君に厚く御禮申上げてくれ。かくも心氣爽快なは、生れて始めてございませと、な。」と、私は云つた。

「王様は……」と、質の良い諷刺を並べたがるサブトは、つけ加へて云つた。「昨夜ぐつすり御熟睡遊ばされたのですよ。」

青年紳士は（ハムレットのオスリックもかくやと思はせるやうな男であつた）またお辭儀をして退出した。狂言は濟んだ。そしてフリツ・フォン・ターレンハイムの蒼ざめた顔が現實の事物を想ひ出させるのだつた——とは云ふものの、我々にとつては此の狂言が實は狂言ではない眞剣なことだつたのだ。

「王様はおかくなつたのかい？」とフリツが囁いて訊いた。

「そんな事はない。が、只今、黒のミハエルの虜になつていらつしやるんだ。」と、私が答へた。

## 第八章 姫と王弟

本當の王様の生活と云ふものは、骨の折れるものであらう。けれども假りの王様の生活も、甚だ苦しいものである。次ぎの日サブトは私に、王様の義務、つまり爲すべき仕事と知つておくべき事柄とに就いて、三時間も講釋してくれた。それから朝食を攝つたが、サブトは例によつて私の向側に坐つ

て、王様はいつも朝食の時白葡萄酒を召上つて、味の強い料理を非常にお嫌ひになつてゐたが、話した。それから大審院長が来て、これまた二時間も話し込んで了つた。私は此の人に向つて、指に怪我をしたから（彈丸のお蔭の有難さよ！）何にも書けなくなつて了つたと言ひ聞かせてやつたが、書けるとすれば判決を書くとか、色々、書類に私の「認め」を記入すべき用事が澤山ある。裁判長はそれに對して恐ろしく澤山の宣誓をしなければならぬのだつた。次ぎにはフランスの大使が信任状捧呈に來た。が、大抵の王様はこんな事務には誰でも素人だから、私が何にも知つてゐなかつたからとて、別に差支へはなかつた。（爾後數日間、私は外交團と一緒に仕事をしたが、即位には斯かる御儀式騒ぎがつきものになつてゐるのだつた）

それから到頭、一人ぼつちにされて了つた。私は新しい召使（ヨセフが死んで了つたから、その代りに、まだ王様を見た事もないと云ふ男を新しく選んで雇つた）を呼んで、プランデー・ソーダを持つて來いと命じて、予はこれから一休みするから、萬事よろしくサブトに傳へてやつた。

フリツ・フオン・ターレンハイムは起立してゐた。

「大變だ！ 我々は時間を空費してゐるよ。これから黒のミハエルを壓倒する手筈だつたぢやないか？」と彼が云つた。

「穩かに、君、穩かにし給へ。」と、サブトは肩を寄せて云つた。「それは痛快な事には違ひないが、容易な事ぢやない。ミハエルは王様を生かして作れると思ふのか？」

「それに、王様が此のストレルソーにおいでで位にありながら何で弟ミハエルに憐憫の心なぞ抱かれるものか。」と私が云つた。

「では、何にもしないつもりか？」

「詰らない事は何にもしないつもりさ。」とサブトが唸つた。

「實を云ふと、僕は英國の劇を思ひ出したんだよ、フリツ君。『世評』と云ふ劇なんだがね、君は此れに就いて何か聞いた事はないかい？ それは、二人の男が、互にピストルを突きつけ合つてゐると云ふのだ。僕は自分を棄てない限りミハエルを葬り去る事は出來ない、と云ふ譯なんだよ。」

「すると王様は？」とサブトが云つた。

「ミハエルが、僕を仆さうとしてゐるに不拘自分自身を棄て、かゝらないと云ふ事は斷じてないぜ。」

「若しも僕の身の上が分らうものなら、僕は何處までも抵抗して、太公と鎗を削つてみせる。けれども、現在僕は向うから仕掛けて來るのを待つてゐるんだ。」と私が云つた。

「太公は王様を殺しちまうだらう！」とフリツが云つた。

「そんな事はしないよ。」とサブトが云ふ。

「六人組が三人までストレルソーにあるんだもの。」とフリツが云つた。

「三人でかい？ 間違ひないね？」と、サブトは熱心に訊く。

「さう、三人だけ。」

「ぢや、王様は生きていらつしやる。残りの三人が護衛してゐるんだ。」とサブトが叫んだ。

「さうだ。仰有る通りです！」とフリツも叫んだ。が、顔色は活々して来た。「若しも王様が殺されて

お了ひになつたのなら、六人共ミハエルのお供をして来てゐる筈だ。時に大佐はミハエルが歸つた事

を御存知ですか？」

「知つてゐるとも！」

「六人組つて、一體何だい？」と私が尋ねた。

「今に君も逢ふやうになるだらうとは思ふんだが……」と、サブトが云つた。「ミハエルの子飼ひにな

つてゐる六人の男達の事で、それがミハエルと形影相伴つてゐるんだよ。三人はルリタニア人で、あ

とはフランス人、白耳義人、英國人なのだ。」

「六人共ミハエルの命令なら、身を惜しまないんだ。」とフリツが云つた。

「今に僕を殺しに来るかも知れないね。」と、私は肩を聳やかした。

「さう思つて居れば間違ひない。」とサブトは相槌を打つて、「此處に来てゐるのは誰々だ、え？ フ

リツ。」

「ド・ゴージェと、ベルソニンとデチャードとだ。」

「外國人ばかりか。一目瞭然たるものだな。ミハエルは此の三人を連れて来て、ルリタニア人に任せて置きたいからなんだ。」

と一緒に残して来たんだ。と云ふ譯は、出来るだけルリタニア人に任せて置きたいからなんだ。」

「と云ふと、その人達は狩小屋で戦つた中にはあなかつたのかい？」と私が問ふ。

「あの中に居れば好かつたのにさ。」と、サブトは不安顔しながら、「さうしたら六人組ぢやなくなつ

て、今頃は四人組になつてゐたさう。」

私は既に貴族の氣品——自分の心持ちや祕密な胸の中を、親友にさへ洩らさないで居られる感情

——を備へてゐた。そして自分の行動に就いても知りすぎる程よく知つてゐる。自分出来るだけ人

望を集めたい、と同時にミハエルにも嫌な態度を見せたくないと思つてゐる。かうしてミハエルの部

下の敵愾心を和らげて置いて、萬一公然の争ひが起つた場合には、ミハエルは壓迫された、めにかう

なつたのではなく、背徳の人間であるが故にかうなつたのだと思はせるやうにしたかつたのである。

それでも公然の争ひは、私の望んだものとは違つてゐた。

王様の利益を計るには祕密を守らなければならなかつた。が、祕密がつゞく間は、私はストレルソ

ンで自分の役目を勤めおほせなければならぬのだ。ミハエルが強くなるやうな事があつてはこれを

長引かせるばかりである。

私は馬の用意を命じて、フリツ・フォン・ターレンハイムに供奉をさせ、堅苦しい程の丁寧さで敬

禮を返しながら王立公園の大廣場へ乗り入れた。それから彼方此方町へ乗り込んで、美しい少女から

花を求めて金貨を興へたり（五六百人から的人數が私のあとから尾いて来たから）して、フラビア姫

の御邸へ行つて、御目にかゝつて下さるか如何かと聞いてみた。此の行爲は多大の興味を喚起して、賞讃の聲に迎へられた。姫君は頗る平民的な方であつたし、大審院長は無遠慮な方だつたから、私ともつと手詰に談判すればする程早く私は幸運な結果に到達するのであり、姫君への愛着は愈々深くなつて行くのだと話してくれた。大審院長は勿論、私が其の忠誠無雙の忠告に従ひかねる、苦しい事情など御存知なかつたのである。然しながら姫を訪問するのは何等差支へない事だと思へたし、驚いた事にはフリツまでが衷心から私の肩を持つてくれて、フリツ自身、姫のお邸を訪問するのが嬉しいと打ち明けた位だつた。尤も彼は姫の侍女であり親友たるヘルガ・フォン・ストロワジン伯爵嬢に逢ひたい思ひに焦れてゐたからである。

私の訪問がフリツの希望を叶へてやつた。私が姫君の室へ案内される時、フリツは伯爵令嬢と一緒に控間に留つてゐた。四邊の人や召使がちらほら姿を見せてゐたに拘はらず、二人はさゞめき交してゐた。私は二人の事など考へる餘裕もあらばこそ、難役中の難役たる、最もデリケートな仕事をしなければならぬのだ。私は姫に思はれるやうに力めねばならぬと同時に、又無關心で居て貰はうとも力めた。姫への愛慕の情を示さねばならぬと同時に、それを感じないやうにしなければならなかつた。私は他人のために戀をしかけねばならぬのだつたが、その相手は——姫君であらうとわからうと——世にも稀な美人なのである。此の仕事を受け、嬉しい當惑を感じた私は容易ならぬ事だと思ふのだつた。私が如何に巧く豫定を遂行し得たかと云ふ事は次ぎ次ぎに記して行くつもりである。

「貴方は金の月桂冠をお貰ひになるんですわ。」と姫が云つた。「貴方は王様になつた爲に變つて了つた、沙翁の王子にそっくりですわ。でも私、貴方が王様であらつしやる事を忘れかけてゐますのよ。」  
「何卒、お心にもない事は仰有らないで下さいまし。そして、私の名前以外は呼ばないやうにして下さい。」

姫君は暫し私を見つめてゐた。

「まあ、私、嬉しいやら得意なやらでございませすわ、ルドルフさま。だつて、此の間も申上げました通り、お顔つきがすっかり變つて了ひましたんですもの。」

お世辭を云はれてゐる事はよく分つたが批評をされるのは厭だつたから答へた。

「弟が歸つて來たさうですね。弟は暫く旅行してゐたんではないですか？」

「え、お歸りになりましたわ。」と、心持ち眉をひそめた。

「長くストレルソーを離れては居られないと見えますね。」と、私は笑ひながら話した。「弟に逢へるので皆大喜びですよ。弟が近所に居ればある程いゝですね。」

姫は妙な事を承はります、と云はまほしげな眼ざしを投げて、私を見た。

「あのう！……其方に……？」

「私に、弟の動靜が分つていゝと仰有るんですか？ 或ひはさうかも知れませぬ。が、貴女は何故嬉しく思召すのです？」



「私、嬉しいなど、申上げはいたしませんでした。」と姫は答へた。

「人の噂では、お喜びの由承はりましたが……」

「世間には不躰な人が澤山居りますものねえ。」と、彼女は嬉しい事に傲然と答へた。

「では、私までが其の世間の人の仲間だと仰有るのですか？」

「真逆……そんな事はございませぬわ」と、庇ふやうな調子で答へた姫は、ちよつと口を切つて嫌な言葉をつけ加へた。「少くとも……。」

「はア？ 少くとも……？」

「少くとも、ストレルソー太公の事を、私が指先程位は氣にかけてゐるとでも仰有つて下さいません限り……。」

「私は、自分が本當の王様であれば好かつたと思つてしまつた。」

「貴女は従弟のミハエルが……？」

「あら、従弟のミハエルですつて？ 私の方の事はストレルソー太公と申してゐますのよ。」

「お逢ひになつてゐる時はミハエルと仰有るんですか？」

「え、おかくれになりました王様のお吩咐けですもの。」

「成る程、それから私の命令通りに……ですか？」

「貴方もさうお吩咐けになるのでしたら、さうお呼びいたしますわ。」

「よく分りました。ミハエルに逢ふのは愉快ですねえ。」

「太公のお友達もお迎へするやう、貴方に吩咐かつたやうな氣がいたしますわね？」

「六人組の事ですか？」

「あなたも六人組と仰有いひますの？」

「世間並にさう云ふのですよ。しかし、御氣に召さない者には一切お逢ひくださらぬやうにしてください。」

「貴方だけは別にして……ですの？」

「お手柔らかにお願いします。これだけは命令も出来ませんからね。」

話し半ばに、通りの方から歡呼の聲が聞えて來た。姫は窓際に向け寄つた。

「あの方ですわ……ストレルソー太公さま……」

私は何にも云はないで、たゞにつこりした。彼女はまた元の座に戻つて來た。雙方黙つたまゝ暫くちつとしてゐた。外部の騒ぎは止んだが、控へ間の方から聲音が聞えて來た。私は世間話をし始めた。

これが暫くつゞく。ミハエルは如何なつたらう、と氣にはなつたが、これは私から切り出す譯には行かない。すると突然、フラビア姫は兩手を握り合せながら、亢奮した聲で云つた。

「あなたは太公をお立腹させていらつしやいますわ。」

「え！ 誰を？ 何うして怒らしてゐるんです？」

「お待ちたせして……ですわ。」

「僕は弟を……。」

「では、此方へお呼びませうか？」

「どうぞ。お望みなら。」

姫は怪訝さうに私を見て、

「面白い事を仰有いますね。でも、貴方がおいでになつてゐる時は、誰方もお通ししない事になつて居りますのよ。」

それには魅すやうな尊い氣品があつた。

「見上げた禮儀ですわね！」と私は叫んだ。「が、僕すつかり忘れてゐましたよ。若し僕が他の人と對談中でしたら、貴女をもお通ししないでせうか？」

「何もかも御存じのくせに。私は差支へないのですわ。同じ血統なんですもの」と、姫はまだでれた形で答へた。

「こんな詰らない規則は、僕は忘れ勝ちなのです」と、私は寧ろ弱々しい聲で答へた。が、内心フリツが知らせに來ないのを不満に思つてゐた。「が、今後、氣をつけませう。」

私は跳び上つて、ベツとばかりに戸を開け放つと、控へ間へ跳び込んだ。ミハエルは机に凭れてゐたが、眉には深い八の字が寄つてゐた。横着な若僧フリツを除く外は、皆起立してゐたが、フリツは氣樂さうに安樂椅子に凭れて、伯爵令嬢ヘルガとベタ／＼いちやついてゐた。私が入るとフリツは突立ち上つたが、其の落ちついた敏捷さには、今までの平靜を見せるだけの餘裕があつた。太公がフリツを好いてゐない事は直ぐに分つた。

私が手を差し出すとミハエルは之れを握つたので、私は抱きついてやつた。それからミハエルを内側の部屋へ引き入れた。

「其方が此處へ來ると知つてゐたら、待たせるのではなかつたのに、弟をお引き合せしますから一寸申座いたしますと、私は斷つて來たんだよ。」

ミハエルは感謝した、が、それは冷や、かだつた。人間にはいろんな性質があるものだけれど、感情と云ふものは隠くせないものである。赤の他人が見たら、ミハエルが私を憎んで居り、殊に私がフラビア姫と一緒にゐる所を見るのを厭がつてゐる事が分つたに違ひない。それでも私には、ミハエルがその感情を押し鎮めようとしてゐるのが分つた。そればかりではない、私をまぎれもなく王様であると信じてゐるやうに見せかけてゐるのも察しられた。勿論私は知らなかつたけれど、王様が偽物でない限り、私よりも利口で豪膽であるとは、ミハエルには容易に信じられなかつたのだ。又もしさうでなかつたら、私に對して敬意を表して、「ミハエル」とか「フラビア」と云はれるのを聞く事を嫌がつたに違ひない。

「兄さんは、手に怪我をしてゐますね。」と、ミハエルは心配さうに云つた。

「あゝ。雑種の犬をからかつてあたらね。(と吃驚させるつもりで言った) あんな犬は氣性がムラだね。」

ミハエルは悄然としたまゝ、につこりして、暫く私を見つめてゐた。

「咬まれると危くはありませんこと？」と、フラビアは心配さうに云つた。

「これで危いつて事はありませんよ。咬まれて深傷を負うたなら、又別ですがね。」

「でも、そんな犬は殺しておしまひになつたんでせう？」

「まだ殺しません。咬み傷に毒があるか、ないか、今様子を見てゐる所なんです。」

「若し有毒なら……？」と、苦笑ひしながらミハエルが云つた。

「撲殺されるだけさ。」と私は答へた。

「もう、これからは其の犬のお相手をなさらないで、ね。」とフラビアが云つた。

「さうするつもりです。」

「又、咬まれるといけませんわ。」

「たしかに咬みつくでせうね。」と、私は笑ひながら答へた。

それから、屹度私が怨みさうな事を、ミハエルが云ひ出しはしないかと案じながら、(自分の憎惡を示さねばならなかつたかも知れないけれど、思ひやりある人らしく見られてゐなければならなかつた) 私はミハエルの軍靴の立派な訓練や、歐州式の日の忠實な愛護に就いて、お愛想を述べた。

それから、ミハエルが貸してくれた狩小屋の愉快な話をした。しかしミハエルは突然立ち上つた。居るに堪へなくなつて、別れを告げた。それでも戸口まで行くことと立ち止つて云つた。

「私の友だち三人が、是非とも御拜調の榮に浴したいと云つてゐます。三人とも今控室にゐるんですが……。」

私は直ちに彼と一緒に出る事にして、腕をミハエルの腕に絡んだ。彼の顔つきは溫和かつた。如何にも兄弟らしい態度で控室へ入つて行つた。そしてミハエルが手招きすると三人の男が近寄つて来た。

「此の三人は」と、應揚な丁寧さで、ミハエルが云つた。「最も忠誠にして獻身的な、陛下の下僕であり、私の忠實無雙な親友であります。」

「お初にお目にかゝつて、私も嬉しい。」と、私が答へた。

三人は交るゝ近づいて、私の手に接吻して行つた。脊が高く瘦せて、逆毛の立つた髭を撫でつけたドカウテと、中脊ではあるが禿頭の(その癖三十をいくらかも越えてゐなかつた) 肥つた白耳義人ベルソニンと、最後に英國人で、細面の、散切り頭に、銅色の肌をしたデチャードとの三人であつた。デチャードは肩が張つて、臀部の細い、立派な男だつた。勝れた勇士ではあつたが、心の悪い奴で、私に挫がれて了つた。私が少し外國訛りをつけた英語で話しかけると、くすりと笑つた。ほんのちよつとではあつたけれど、くすりとした。

弟と、其の友だちとを逐ひ出してから、私はフラビアに別れを告げに、部屋へ入った。彼女は入口に立つてゐた。私は姫の手をとつて別辭を述べた。

「ルドルフさま」と、彼女が云つた、聲は随分低かつた。「お氣をおつけ下さいませね。」

「何に……氣をつけるんです？」

「あの……申せませんわ。あなたの御身體は……」

「私の身體は……？」

「ルリタニアのものですからね。」

私が此の役目を勤めてゐる事は、事なのか、悪い事なのか、私は知らない。孰れにしても、事ではない、が、私には眞實の事は言へなかつた。

「ルリタニアだけのものですか？」と、私は物柔らかに尋ねた。

彼女の美しい顔には、思ひがけない紅葉が散つた。

「それから、お友だちのもの……よ。」

「お友だちのもの？」

「それから、貴方の従妹……と云ふ召使のものですわ。」

私は何にも云へなかつた。たゞ姫の手に接吻して、自分自身を呪ひながら出て行つた。

外に出ると、不注意至極の侍従フリツが、伯爵令嬢ヘルガと接吻してゐる最中であつた。

「え、くそッ！」とフリツは云つた。「いつまでも陰謀はやつて居れやしない。戀にも身を浸らせたいだらう。」

「ミハエルの心も思ひやられるね。」と私が言ふと、傍に立つてゐたフリツは慎しまやかに私の後へ従つた。

## 第九章 四阿の女

若し、も私が當時の日常生活の出来事を巨細に書き連ねなければならなかつたのなら、それは何にも知らない人民に宮廷の内部を知らせるやうなものである。そして私が、自分の知つただけの秘密を明らかにしようものなら、それは歐洲政治家にとつて興味深いものであるに違ひない。が、私はそんな事は少しもしたくはない。私は退屈と無頓着とに進退谷まつて了ふに違ひない。そしてルリタニア政界の表面に現はれない、蔭の舞臺に、身心を抛つて働いてみた方が遙かによいやうに思はれる。私はたゞ、自分の詐術の秘密が露顯されない事だけを言つておけばいい。私は間違つてゐた。悪い生活をしてゐたのだ。そして手管と優しい心とが必要だつた。が必要なら肉體上の相似を備へてゐたと言ふ事は、私をして隣家の人に扮するよりも、ルリタニア國王に扮する方を、遙か容易ならしめた所以であつた。

或る日、サブトが私の室に入つて来て、手紙を投げつけながら言つた。

「君宛の手紙だぜ。女から……らしいな。それはさうと、耳寄りな話があるんだよ。」

「何だい？」

「ゼンダ城にいらつしやる王様の事だが……」とサブトが言った。

「どうして分つたんだい？」

「其の證據に、ミハエルの六人組の半分が向うにあるからさ。穿鑿してみたんだ、そしたらローエングラムも、クラフスタインも若いルバート・ヘンツオウも皆向うにあるんだよ。三人共放浪者のくせにルリタニア國內で立派に生きてゐるのだよ。」

「それで？」

「それで、フリツは歩兵、騎兵、砲兵を引率して君に城へ行つて貰ひたいと云つてゐるんだ。」

「そして城の濠でも探させるのかい？」と私は訊いた。

「言はさうだ。さうしても王様の御死骸は見つかりはしないよ。」とサブトが言った。

「では、君は確かに王様があると云ふんだね？」

「十中八九までは……ね。その上、三人が向うに残つてゐると言ふ事と、釣橋が引上げてあつて、ヘンツオウ青年が、黒のミハエル自身の命令がない限り誰も出入りしないと云ふ事實があるんだからね。フリツの言葉に信頼しなければいけないよ。」

「僕、ゼンダへ行かう。」と私は言つた。

「君は氣でも違つたんだ！」

「どうせ、さうだらうよ。」

「さうらしいな。何なら、向うに踏み留つちや如何だい？」

「それは結構！」と私が無難作に言ふ。

「王様御機嫌斜めだね。お姫様との關係は何如だい？」とサブトが言つた。

「何を、失敬言ふない。」と私が答へる。

サブトは暫く私を見つめてゐた。それからパイプに火をつけた。私の機嫌が悪かつたのは本當だつた。そして益々意地を張つて了つた。

「何處に行かうが、僕は六人組に取捉まりやしないよ。」

「君はさうだよ、僕は六人組を迎へにやるんだ。」と、サブトは平然として言つた。

「何のために？」

「さればさ」とサブトは煙を輪に吹きながら、「君が姿を消すと云ふ事は、黒のミハエルには萬更嬉しくない事もなからうからだ。君があなくなつて了ふと、我々が止めてゐたお芝居が始まるんだ——それとも、ミハエルが殺されて了ふか……だ。」

「僕は自分の事は自分でやるよ。」

「ド・ゴートと、ベルソニンとデチャードとはストレルソーにゐるんだ。其の中の誰だつて平氣で君

の首を搔つ切つちまうに違ひないよ。例へば儂が黒のミハエルの首を容赦なく斬れるやう……さ。いや、もつと手酷くやる。時に手紙は何だい？」

私は手紙を開いて、聲高に読み上げた。

「王様の御一身に關する一大事申上げた候間、本狀指定の件御履行相成度候。新道路の端に、廣大なる庭園に圍まれし邸宅有之候。家の方關には女精の彫像をおき、庭園は塀をめぐらされ、塀の裏側には門有之候。今宵十二時、王様單身此の門より御入御下され、右折し、約二十ヤード進みて六段上れば四阿に到り候。此處に御入り下され候は、王様の生命並びに王位に關係ある事を申上べき人物御待受申上候、本狀は忠實なる友の記す所に有之候。王様は必ず單身御枉駕相成度、然らざれば、御一命は風前の燈、同然に御座候。また本狀を他人に御示し下さるまじく、然らずんば、王様を慕ひ參らす女性の生命失はるべく、黒のミハエルも御容赦仕るまじく候。」

「いや。」と私が読み終るのを待つてサブトが云つた。「ミハエルがこの手紙を他人に筆記させたのかも知れないね。」

私も同じ考へを抱いてゐたので、此の手紙を投げ棄てようとしたが、不圖見ると裏にも亦字が書いてあつた。

「御躊躇の節は、サブト大佐に御相談然るべし。」とかきつけてあつた。

「えつ！」とサブトは心から驚いて叫んだ。「儂を君以上の馬鹿者扱ひにしてゐるわい！」

私は手を振つて、サブトを黙らせた。

「太公と姫君との御成婚を妨げ、従つて太公の王位に即かるゝを妨げんがためには、婦人は第一に何をなすものなりや、サブト大佐に御尋ね下され度、且つ、其の婦人の名がアの字に始まる事も御尋ね下され度し。」

私はとび上つた。サブトはバイブを叩した。

「驚いた！ アントワネット・ド・モーバンだ！」と私は叫んだ。

「如何して分る？」とサブトが訊く。

私は、彼女に就いて知つてゐるだけの事を語つた。それから知つた動機も。サブトは頷いた。

「あの女はミハエルと大騒ぎをやらした事があるんだよ。」と、サブトは物思はしげに云つた。

「そんな女なら、役に立ちさうぢやないか。」と私が云つた。

「でも、この手紙はミハエルが書いたものだけだぜ。」

「僕もさう思ふが、確かめてみたいから行つてみよう、サブト。」

「いや、儂が行かう。」とサブトが言ふ。

「君は門のところまで行き給へ。」

「僕は四阿まで行くよ。」

「そんな事したら大變だ！」

私は立ち上つて、背中を燧燼棚にもたせかけた。

「サブト、僕はあの女を信じて行くよ。」

「女なんて決して信用ならん。君行つちやいけない。」とサブトが言ふ。

「僕は四阿へ行くか、英國へ歸るか、どつちかにしよう。」

その頃サブトは私を指導したり、差圖する加減や、服従すべき場合を呑みこんだ時分だつた。

「時間と競争だ！」と私は云つた。「毎日々々、王様をそのまゝにしておくのは冒険だよ。毎日僕がかう云ふ風に假装するのも冒険だ。もつと氣の利いた事をしようよ、サブト、一と勝負、此方から仕かけようぢやないか。」

「よしッ！」と、サブトは云つて溜息を吐いた。

閑話休題、其の夜十一時半になるとサブトと私とは馬に乗つた。フリツは又留守番で、我等の行先は全然知つてゐなかつた。非常に暗い晩だつた。私は劍を佩かないで、ピストルとナイフを持ち、角燈を携へた。門の外に來ると馬から降りた。サブトは手を差し出した。

「儂は此處で待つてゐる。銃聲を聞いたら——」

「ちつとしてゐ給へ。王様にとつて唯一無二の冒険だからね。君までが泣き面しに來ないたつていいんだよ。」

「そりや、さうだ。では無事で！」

私は小門を押してみた。門は譁なく開いて、云はば灌木林のやうな處に出た。其處には草の繁つた小径があつて、手紙に書いてあつた通り右折してゐた。私は警戒しながら其の道を進んだ。角燈の火は隠して、手にはピストルを握んでゐた。物音一つ聞えない。間もなく眼の前に、黒い大きな物がぼんやりと眼に映つた。これが四阿だつた。石段に來ると登つて行つたが、弱い、よろ／＼した戸に突當つた。戸は掛金で釣下げられてゐた。これを押し開いて中に入ると、一人の女が跳びついて、ついと私の手を握つた。

「戸をお閉め下さい。」と女は囁いた。

私は言はれる通りにして、角燈の明りを女に振り向けてみた。女は夜會服を着けて、非常に美々しく装うてゐた。その魅すやうな黒づくめの美しさは、角燈の光りで見ると尙ほ素的だつた。四阿は何の飾りもない小さな室で、二脚の椅子と小さい鐵の卓子が置いてあるばかり、まるで喫茶園か屋外カフェーそつくりと云ふ恰好であつた。

「何にも仰有らないで下さいまし。」と女は云つた。「餘裕がございません。よく聞いて下さいまし。」

私、貴方を存じて居りますのよ、ラッセンダールさん、私、太公の命令であの手紙を書いたのですわ。」

「さうだらうと思つてゐました。」と、私は答へた。

「二十分ばかりの中に、三人の者が貴方を殺しに此處へ參る手筈なのです。」

「三人……と云ふと、三人組の？」

「え、その時分までには此處を立ち去つてゐて下さいまし。でないと、貴方は今晚お殺されになつて……。」

「まづ、お聞き下さい。貴方がお殺されになりますと、死骸は町の場末へ持つて行かれまして、其處で見つかつた事にされるのです。ミハエルは即座に貴方のお友達——つまりサブト大佐や、フォン・ターレンハイム大尉——を眞先きに捕まへて了ひまして、ストレルソーで王座に坐り、ゼンダへ使者を差出すのです。残りの三人組が、城内で王様を殺し、太公は自分か姫君かを表向きに立てるので、強い自信があれば自分を立てるでせう。いづれにせよ、太公は姫と結婚して事實上國王になり、間もなく名實兼ねた王様になるのです。お分りになりましたか？」

「なる程、巧い計略ですね。時に如何して貴女が……。」

「私を、嫉妬してゐるとでも、何とでも思つてゐて下さい。が、太公が姫君と結婚なさるのを見るに忍びないのです。もうお立ちになつてもよろしうございますが、特に申し上げたいのは——忘れないうで下さいまし——日夜貴方には危険が迫つてゐると云ふ事です。三人組は護衛同様に貴方におつきして居ります。さうでせう？ 三人は附いてゐるのです。ミハエルの三人組は貴方から三百ヤード以上離れては居りません。貴方のお生命は、お一人でいらつしやる所を見つかり次第有無を言ふ間もなくするので。さア、いらして下さい。あ、門にはもう今頃は番人が附いてゐるでせう。靜かに降りて、四阿を過ぎ百ヤードばかり行らつしやいますと、扉際に櫛子が置いてありますわ。これに乗つて、生けんめい飛んで行つて下さいまし。」

「貴女は？」と尋ねてみた。

「私にはまだ仕事がございますわ。私の仕事が無くなりましたら、もう二度とお目にはかゝれませんでせう。でなかつたら、また——なんて……。さ、お早くお歸り下さいまし。」

「でも、何と太公に仰有るんです？」

「貴方のおいでにならなかつた——と申しますわ。此の計畫みをお見抜きになつたんだ……と。」

私は女の手をとつて接吻した。

「今晚、貴方は偉いお忠義をなさいましたね。王様は城内の何處にいらつしやるんですか？」

彼女は、急に聲を潜めて囁いた。私はちつと耳を澄ました。

「釣り橋を渡りますと、裏戸があります。其の戸の蔭に……。シート。あれは？」

外には聲音が聞える。

「來ましたわ！ 何て早い事でせう。本當に早かつた！」と彼女は云つた。顔色は死人のやうにまづ蒼だつた。

「三人共、際どい所で僕に逢へるものですね。」と私が言つた。

「燈りをかくして下さい。それ、あそこに戸の隙間があるでせう？ 分りましたか？」

私は戸の隙間に目を當て、みた。石段の一番下に、朦ろに三人の姿が見えた。思はずピストルの弾



金に手を當てると、アントワネットは急ぎ私の手を押へた。

「一人だけは殺せるでせうけれど、あとは何うなさるおつもり？」  
外から聲が聞えた。それは立派な英語を操る聲であつた。

「ラツセンダル君！」と呼ぶ。

私は返事をしなかつた。

「君に話したい事がある。それが済むまで射たないと約束して貰ひたい！」

「さう云ふ君はデチャードか？」と私は呟いた。

「名は名乗るに及ばない。」

「然らば僕の名も呼ばないで貰はう。」

「承知した。さて、君に頼みがある。」

私は猶ほも眼を隙間につけてゐた。三人は二段程上つて來た。三つのピストルが眞向から戸口に向けられてゐる。

「我等を室内へ入れて貰ひたい。名譽にかけても休戦を誓ふ。」

「信用してはいけませんよ。」とアントワネットが囁いた。

「戸を隔て、承はらう。」と私は答へた。

「然し……、君は戸を開いて發射するかも知れない。」とデチャードが云ひ出した。「たとへ君を斃さうとも、君も我等の中の誰かを斃すに違ひない。お話中は射たないと約束して頂きたい。」

「信用してはいけませんよ。」と、アントワネットが囁いた。

突如、私は妙案を考へ出した。ちよつと思案して、これなら大丈夫だと思つた。

「そちらが發砲するまでは、私は射たない。が室の中へはお入れしない。戸外に立つて話してもらひたい。」

「尤も千萬！」と向うで云つた。

三人は一番上の段まで上つて、戸の外に立つた。私は戸の隙間へ耳を押し當てた。何にも言葉は聞えなかつた。が、デチャードは、ド・ゴータと覺しき、丈高い男に頭をすりよせて何か囁いてゐた。

「フム。内輪の相談だな。」と思つて、私は聲高らかに叫んだ。

「さて諸君の御頼みとは？」

「國境までの無事通還と、英貨五萬鎊を差上げた！」

「駄目々々。」と、アントワネットは出来る限りの低聲で囁いた。「頼りになりませぬね。」

「それは忝けない」と、私は戸の隙間から外を覗きながら答へた。三人共一つに圍まつて、戸のすぐ外に立つてゐた。

私は三人の心を察知してゐた。だから別にアントワネットの警告はなくてもよかつた。私が話相手になるや否や、相手はすぐにも跳び込むつもりであつた。

「暫時考慮させてくれ。」と云ふと、外で笑ひ聲が起つたやうな氣がした。私はアントワネットに向き直つて、

「壁際にくつゝいて立つてゐて下さい。戸口からの彈丸が當らない所に。」と囁いた。

「如何なさるおつもり？」と、彼女は怯えて尋ねた。

「今に分りますよ。」と私。

私は鐵の小机を取り上げた。私程の力量の者には、さして重い机ではなかつたから、私は脚を手に取上げたのだ。私の眼の前に突き出した机の臺は、私の頭と胴とを巧く蔽うてくれた。それから角燈を帯に結びつけて、ピストルはポケットにしまった。突如、風のせるか、それとも外側から押したせゐであつたらう、戸が靜かに動いた。――

私は出来るだけ、戸口から離れて、今云つたやうな恰好に机を前にして叫んだ。

「諸君を信じて、御申込みを受けよう。もし戸を開けるなら――。」

「自分で開け給へ！」とデチャードが云つた。

「これは外へ開く戸だ。」と私は云つた。「二三歩退いて貰ひたい。でないと、戸が開く時彈丸が當るかも知れないぞ！」

私は進みよつて掛金を探り廻つた。それからち爪立ちして元の場所へ引返した。

「私には開けられない。掛金がかゝつてゐる。」

「チエツ！ 僕が開けよう。」とデチャードが云つた。「なにを馬鹿な。何故いけないんだ、パーソニン。君はたつた一人が恐ろしいのか。」

私は思はずにつこりした。忽ちにして戸はボタンと開いた。角燈の光りは、三人が外に固まつてピストルの狙ひを定めてゐたのを照らし出した。私はヤツと一聲、大股に四阿を横切つて戸口へ抜け出した。三發の彈丸は、音を立て、机に降り注いだ。次の瞬間には、私は室から跳び出してゐた。机は眞正面から彈丸を受けた。のた打ち廻り、罵り合ひ、敵と私と机とは入り亂れて争つた末、四阿の石段を下まで轉り落ちて了つた。アントワネット・ド・モーバンは悲鳴をあげたが、私は突立ち上つて聲高に笑つた。

ド・ゴートとベルソニンの二人は氣絶した者のやうに横たはつて居た。デチャードは机の下になつてゐたが、私が立ち上ると、彼は机を押しつけて又發砲した。私はピストルを取出して早射ちに一發、怨みの一聲を後に聞いて、脱兎の如くかけ出した。私は途中も笑ひ、四阿を後に、塀に沿うて走つた。すると背後に聲音がした。振り返りさま又一發！ 忽ち聲音も止んだ。

「あの女の云つた、梯子と云ふのが本當ならいゝが！」と、私は思つたのである。塀は高かつた。加之、上には鐵の忍び返しがつけてあつた。

果して、梯子はあつた。忽ちの中に乗り越して、振り返ると、數頭の馬が眼についた。そして銃聲を聞いた。それはサブトであつた。彼は我々の争ふ物音を聞き、閉された門を押し破らうと力めた舉

句、鍵穴に弾丸を打ち込んで、阿修羅のやうに猛つてゐた。彼は入つては不可いと私に云はれた事なぞ、綺麗に忘れて了つてゐた。私はカラ／＼と笑ひながら彼の肩を叩いて云つた。

「歸つて寝ようよ。まだ君が聞いた事もない、素晴らしい茶話をしてあげるよ。」

彼は歩き出しながら。「よくも無事でゐたなア。」と言つて、私の手を握つた。が、すぐつけ加へて言つた。

「オイ、一體何を笑つてゐるんだ？」

「四人でお茶の卓子を圍んだからさ。」と、私はまだ笑ひつゞけながら答へたのだつた。と言ふのは、さしも剛勇の三人が揃ひも揃つて、たかゞ茶卓と言ふ下らぬ武器に敗れ、蹴散らされたのが、一方ならず滑稽だつたから。

そればかりではない。約束を守つて、先方が發砲するまで自ら發砲しなかつた、私の高潔さを認めて頂きたいと思ふ。

## 第十章 戀心

毎日午後になると、首府の状況、市民の動勢を警視總監から私に報告するのが例になつてゐた。其の報告書には、警察の方で注意人物だと思ひつけた人物の動靜まで記してあつた。私がストレルソに來てからは、サブトが此の報告を通讀して、其の中に記された面白い事柄を教へてくれる癖になつてゐた。四阿での冒険のあつた日から後、暫く経つてからの或る日、私がフリッ・フォン・ダーレンハイムとトランプをして遊んでゐる所に、サブトがやつて來た。

「今日の報告は面白い事柄ばかりだぜ。」と腰を卸しながら言つた。

「何か騒動記事でもあるのかい？」と私は訊いてみた。

彼はニヤ／＼しながら頭を振つた。

「第一に、」とサブトが言つた。「ストレルソ太公殿下には（記事通り言へば甚だ突然に）五六人の従者を召連れ此の市を御退去遊ばされた、と言ふのだ、行先はゼンダ城だらうと思はれるんだが、一行は汽車に乗らないで國道をとつてゐる。ド・ゴイテ・ベルソニン及びデチャードは一時間遅れて發つたがデチャードは腕を吊布で頸から吊してゐた。その負傷の原因は分らないが戀愛沙汰に關係した決闘でもしたんだらうと思はれてゐると言ふのだ。」

「戀愛沙汰には縁遠いな。」と、私は此の男に自分の符牒をつけてやつた事を心嬉しく思ひながら言つた。

「それからかう言ふのである。」とサブトが言つた。「内命によつて看視しておいたド・モーパンは、市中汽車で出發した。ドレスデン行きの切符を買つて……。」

「それは、あの女の癖だよ。」と私。

「ドレスデン行の汽車はゼンダ城に停車す。」中々鋭敏な奴さ。それから、これは如何だ。「市民の感

情は満足なる状態にあらず、國王陛下は（極く露骨に言つてあるよ）御婚禮の手續を踏み給はずとの評判頻りなり、フラビア姫妃懇の人々の御諮問によれば、姫君は陛下の遅々たる態度にいたく御不満の體なりと承る。人民は一般に姫君の御名をストレルソー太公と並稱し、太公も亦此の評判によつて盛名を博し給へり。されば國王陛下におかせられては今宵、姫君との御尊を廣く傳播せしめんがため舞踏會を開催せらるべき旨公表されたり。此の効果や揚るべし。」とさ。

「それは初耳だ！」と私が言ふ。  
「もう準備は出来てゐるんだよ。」とフリツが笑つて言つた。「それがため僕は今君に逢つてゐるんだが。」

サブトは私に向き直ると、鋭い、決定的な聲で言つた。

「今夜、君は姫君に愛情を示さなくつちやいけないよ。」

「姫が一人ぼつちなら出来さうな氣もするけれどね。いやだよ、サブト。それが難事業だと云ふ事が、君には分らないんだらう？」

フリツはピエツ／＼と口笛を吹いて云つた。「何、譯のない事なんだ。い、かね、これは云ひたかないんだが、止むを得ない。ヘルガ伯爵令嬢の言葉によると、姫は王様を大分好きになられたと云ふんだ。戴冠式の日以來、姫のお心持ちには非常な變化が起つた。大體、姫君は王様の怠慢さには大分弱つてゐられたんだからナ。」

「これは困つた事になつたな。」と私は唸つた。

「チエ、チエツ！」とサブトは舌打ちして、「君は大分女を口車に乗せた事があると見えるナ。それがお氣に召したのだよ。」

フリツは、自分自身が戀せらるゝ人として、私の苦しみをよく察してくれた。彼は片手を私の肩にかけたが、何にも言はなかつた。

「いつその事。」と冷靜なサブトは言つた。「今晚自分の本心を打ち明けては如何だ？」

「エツ！」

「それとも、とにかく、それに近い事はし給へ。さうすると僕から、非公式な發表を新聞に廻しておくよ。」

「そんな事、僕には全然出来ない。姫君を揶揄ふやうな仕事の仲間入りは御免蒙りたいね。」と私が言つた。

サブトは、その小さい、鋭い眼で私を見つめてゐた。やがてにやりと、するさうな微笑みを浮べた。

「い、よ。分つたよ。無理にはお願ひしない。出来たら姫を慰めて上げてくれ給へ。今度はミハエルのために！」

「ミハエルの爲なんて、厭だ！ 明日自分でやるがい、さア、フリツ、庭でも散歩して來よう。」

と私が言った。

「サプトは直ぐに屈服した。その大まかな仕ぐさには素晴らしい手管が包まれてゐた。知れば知る程、人間性をよく知り抜いてゐる事も察しられた。何故、私には姫の事を殆ど何も語らないんだらう？」それに、姫の美しさと私の熱心とが、サプトの講釋以上に深入りさせて了ふに違ひない事をサプトは知つてゐた。そして私は物事を深く考へない癖に、随分とやりたがる質な事をも知つてゐた。我々のやつてゐる事は間違つてゐたと、打ち明けて言へるだらうか？もしも王様が引き戻されておいでになれば、姫は王様の本物と贋物とのからくりを御存じでも、御存じなくても、本當の王に心を傾けられるに違ひない。そして、若し、王様がお戻りにならないとしたら如何であらうか？これはまだ我々が口に出さなかつた問題である。しかし、そんな場合には、サプトは私を一生涯ルリタニア國王の玉座に登せておかうとしてゐる事が、私には分つてゐた。サプトは黒のミハエルと言ふ悪魔の弟子を玉座に据ゑるよりは、悪魔の方を据ゑたがるに違ひないのだ。

舞踏會は華美贅澤なものであつた。此の會を、私はフラビア姫とのダンスを踊つて始めた。その次にワルツに合せて姫と踊つた。好奇の眼や、烈しい囁きが起つた。それから晚餐をたべに行つたが、宴半ばにして、早熱狂した私は彼女の眼ざしに、我が眼ざしを酬いた。姫の早息は私の吃り文句と調子を合せた。私は貴顯列座の前で立ち上つて、つけてゐた紅薔薇章をとり、綬ごと姫の首にかけてやつた。喝采の聲喧しき中に腰を下すと、サプトは杯を傾けながら微笑み、フリツは眉を擧めてゐ

た。それから後、食事は黙々の裡に運ばれた。フラビア姫も私も一語も發しなかつた。フリツが私の肩に手を觸れてくれたので、私は立ち上つてフラビア姫を腕に纏らせ、席間から小部屋へ歩いて行つた。其處では珈琲が出された。やがて來客の男女は皆引上げてしまつたので、後には我々だけがのこつた。

此の小部屋には、庭に面してフランス式の窓がついてゐた。快い、涼しい、香ぐはしい夜であつた。フラビア姫は腰かけてゐたし、私は向ひ合つて立つてゐた。私は自分自身と戦つてゐた。若しもフラビアが私を見てゐないなら、私は其の時も自分を立派に支配してゐたかも知れない。然しながらいきなり、不意に姫はちよつと私を見た。それは急に外らされた疑問の一瞥であつた。今までにない疑問の紅ががサツと彼女の頬に擴がつた。彼女は息を呑んだ。あゝ、もし此の時の彼女を見たならば！私はゼンダ城に居られる王様の事は忘れて了つた。彼女は姫君、自分は贋國王である、と言ふ事さへも忘れて了つた。私はガバと踞いで、彼女の手をしかと握りしめた。私は何にも言はなかつた。何の言葉を言ふ必要があらうぞ！姫の唇に幾度もく接吻をすると、夜の柔らかな響が、求婚者の無言のメロデーのやうに思はれた。

彼女は私を押しつけて突然叫んだ。

「あの、本氣でいらつしやいますか！義理でさうしていらつしやるのではありませんか？」  
「正氣です！」と私は重々しく答へた。

「私は貴女を、生命よりも、眞理より名譽よりも強く愛してゐるのです。」

姫はそれを、たゞ漫然と聞いてゐた。愛の睦言を聞くかのやうに、が、私に近づいて囁いた。

「貴方が王様でいらつしやらないなら、私、思ひのたけを打ち明けるんですけれども、ねえ。今、お慕ひ申してゐるのがお氣に召しまして、ルドルフさま？」

「今……と仰有るのは？」

「え、最近ですわ。今まではお慕ひ申しませんでしたの。」

清い勝利の念が私の胸に一杯になつた。彼女を克ち得たのは、私、即ちルドルフ・ラッセンダルのだ。私は彼女の腰を抱きしめた。

「前にはお思ひになりませんでしたか？」と尋ねた。

姫は私の顔を見上げてゐたが、につこりして囁いた。

「多分王冠のせゐですわね。私、戴冠式の日に初めてさう感じましたんですもの。」

「前にはそんな事なかつたんですか？」と私は熱心に訊いた。

彼女は軽く笑つた。

「まるで私が『え、』と言ふのを聞きたがつていらつしやるやうな御様子ですわね。」

「『え、』と仰有つても謔ではないでせう。」

「え、」と答ふる彼女の息使ひを私は聞いた、と忽ちつゞけて、「氣をおつけなさいませね、ルドル

フさま。あの方、今頃はお怒りになつていらつしやいますわ。」

「何……あのお方……。若しもミハエルが一番悪い人間だとしても……。」

「どんな悪い事がございますの？」

まだ私には一縷の望みがつなされる。出来る限りの努力を以て自分を制し、彼女から三四尺離れた處に立つた。外の楡の木に當る風の音が、快く聞えて來た。

「若しも私が國王でなく、只一個の平民でしたなら……。」

と云はせも果てず、彼女と私とは手を握り合つてゐた。

「たとへ貴方がストレルソー監獄の囚人でも、やはり王様でございませすわ。」と姫は言つた。

私は息を潜めながら、「有難い！」と叫んだ。が、姫の手を執つたまゝ、語りつゞけた。

「若しも私が王様でなかつたら……。」

「シート」と彼女は囁いた。「私、それは信じませんわ。ねルドルフさん。愛のない結婚をする女は、私と同じやうな考へで男を見てゐるものでせうか？」

そして姫は顔を背けた。

暫くの間、二人とも一緒に突立つてゐた。名譽や良心、姫の美しさや私の苦勞など悉り忘れて、私は腕を絡んでさへゐた。

「フラビア！」と言つて見たが、聲は妙に乾き切つて我が聲とも覺えなかつた。「私は實は……。」

云ひかけると、姫は面を上げて私を振り仰いだ。外の砂利の上に重々しい蹻音が聞える、と思ふと窓に男の姿が現はれた。フラビアは驚きの聲を上げて、私から跳び離れた。云ひかけた私の言葉は途切れて了つた其處にはサブトが立つてゐたのである。敬禮はしたものの、嚴しく眉を擡めてゐた。「失禮御免下さいませ。時に、大僧正が小半時前からお待ちになつて居られます。お別れの御挨拶に參つたと仰せられて居りますが……。」

私は眞正面に彼と眼と眼を見合はせた。其の眼には怒氣が満ち充ちてゐた。一體どれだけ立聞きしてゐたかは分らないけれども、とにかくサブトは際どい所に入つて來たのだつた。

「僧正を待たせてはいけなだらう、な。」と私は答へた。

然しフラビアは、熱愛に燃えて恥づかし氣などは微塵もなく、眼を輝かし、顔をほてらせながら兩手をサブトに差伸べた。姫は一語も發しなかつたけれど、戀愛に陶然たる女を見た程の人間ならば疑ひもなく、姫の心持ちが讀めたに違ひない。溢い、悲しげな微笑が老サブトの面を掠めたが、姫の手に口づけしようと身を屈めると、聲も穩やかに言つた。

「嬉しいにつけ、悲しいにつけ、善いにつけ悪いにつけ、姫君の御幸運を御祈りいたします。」

サブトは、これだけ言つて口を切ると、私のはうを一瞥して軍隊式に直立不動の姿勢をとつて言つた。

「何はともあれ、王様の御運長久を祈ります。」

するとフラビアは私の手を執つて接吻した。そして呟いた。

「アーメン。」

我々は再び舞踏室へ引返した。強制的に別辭を受けさせられるのに、フラビア初め一同と引き離されたが、客が歸つて了ふと、私はフラビアの傍へ寄つて行つた。サブトは彼方此方群衆にもまれてゐたが、其のある所の周圍には、眼くばせや微笑や嘔きが盛んだつた。サブトは其の使命に忠實なる餘り、見聞した事を言ひ擴めてゐたに違ひなかつた。王冠を守つて、黒のミハエルを逐ふと云ふ事が、彼の一大目的であつたのだ。フラビアと言ひ私と言ひ將又ゼンダに在す眞の國王は、たゞこれサブトの傀儡に過ぎないのだ。サブトは宮城の扉までも行かない中に踏み止つて了つた、と言ふのは、私がフラビアの手を把つて馬車に連れ込むと、我々を待ち設けてゐた群衆は、耳も聳せんばかりの聲を上げて歓迎してくれたからである。私は其の夜、王として又フラビア姫のおめがねに叶つた婿として全ストレルソーの市民に對した。

終に午前三時、といふと曙の光が忍び込んで來る頃である。私は更衣室にゐた。室には只一人サブトがゐるばかり、他に人の姿は見えなかつた。私は火を見つめてゐる人間のやうにボンヤリして椅子に腰かけてゐた。サブトはパイプを啣へて煙をバツバと吐いてゐたし、フリツは私との相談を斷つて寢こんでゐた。私の脇にある卓子にはバラが置いてあつたがそれはフラビアの衣裳につけてあつたのだ。姫は別れの時此のバラに口づけして、私にくれたのだつた。

サブトは手をバラに伸ばしたが、すばやく私は自分の手を重ねて遮切つた。

「これは僕のだ！ 君のでも、王様のでもないのだよ！」と言つた。

「今夜王様には失禮なことをしたものだな。」とサブトが言ふ。

私は屹となつて振返つた。

「何故止めるんだ？ 僕が自分を苦しめて難儀してゐるのに……。」

彼はうなづいて、

「君の心持ちは分るよ。」と言つた。「だがね君、君は名譽を重んじなきやならないんだよ。」

「これ以上、僕に名譽を重んじろと言ふのかい？」

「まアまア、さう言はないで……女相手に遊んでゐるとせうよ。」

「そんな事言ふのは止し給へ、ねえサブト。君が僕を全くの悪人にしたくないのなら——そして又王様をゼンダの土にしたくないのなら、僕とミハエルの二人が激しく鎗を削つてゐる場合——僕に任せてくれりやい、ぢやないか？」

「そりや。さうさ、任せてゐる。」

「我々は敏速に働らかなきやならないんだ。君は今晚、見たり聞いたりした筈……。」

「如何にも、見もし聞きもした。」

「鋭敏な君だもの、僕の務めを呑み込んでゐる筈ぢやないか。まア、あと一週間だけ任せてごらん。」

君には別な用事がある筈だ。それとも何か言ひ分があるかい？」

「いや、よく分つた。」サブトは眉に八の字を寄せながら答へるのだつた。「だが、そんな事する位なら、まづ僕を倒してからやるんだね。」

「うん、君に怨みでもあるのなら……倒すとも。一時間か、れば、ストレルソー中の人民を起たせて、大騙りの君に襲ひかゝる事も出来るんだよ。君の口から出た、大嘘を種に……。」

「そりや全くさうだ。」と、サブトは云つた。

「で、僕の忠告通り、君は……。」

「僕は君と結婚して、ミハエルも、王様も共々——」

「君の云ふ通りだ。」とサブト。

「では濟まないが。」と、私は両手をサブトの方に差し出しながら叫んだ。「一緒にゼンダへ行つてくれないか？ ミハエルを敗り王様をお連れして歸らうよ。」

老サブトは突立つたまゝ、ちつと私を見つめてゐた。まる一分も見つめてゐた。

「君は如何するんだ？」

私は腰まで頭を下げて、薔薇の花を揉みつぶし、それを唇に押しあてた。

サブトは私の肩に手をかけ、低い嗚れ聲で耳に呟いた。

「君こそはエルフバードの中でも、一番傑れた人間だ。が、僕は王様の祿を食んで仕ふる身の上だ。」



どれ、一緒にゼンダへ行くとせうか！  
私は老人を見上げて、その手を握った。我等二人の眼はいつとりと潤つてゐた。

### 第十一章 姫と別れて

私に襲ひかゝる恐ろしい誘惑が何であるか、もう分つた事と思ふ。その誘惑ゆゑに、私はミハエルに仕掛けて、王様を弑すやうにすることも出来るのだ。私はミハエルの反抗を禁壓し、自分が掴んだ王位を——王位を欲しいからではなく、ルリタニア國王はフラビア姫と結婚なさらねばならないから——固守する事も出来る立場にあつた。フリツ何者ぞ、サブト何者ぞ！ 噫！ さうは云ふものゝ、奔放の情熱に燃えて、胸中千思萬考に亂るゝ身體、冷靜な筆致を以て、此の渦巻く胸の中を述べる事は困難である。聖者の心を持つてゐない限り、自分を憎々しく取扱ふ必要もなからう。  
よく晴れ渡つた或る朝の事、私は供をも連れず唯一人、手に花束を以て姫君の邸へ歩いて行つた。戀する身には、尤もらしい口實をもうけてゐたが、姫に對する私の心遣ひは、姫を慕へる全市民と私とを固く結びつけて了つた。フリツの情人ヘルガ伯令嬢は、花園に出て姫に捧げる花を手折つてゐたが、勧められるまゝに、私の花束を持つて行つた。令嬢の顔は喜色に満ちて薔薇の如く美しかった。フリツは夜毎に彼女に逢はぬと云ふ事はなかつたし、彼の求婚にはストレルソー太公の憎惡こそ懸つてゐたが、外に何一つ暗影がかゝつてゐなかつた。

「あのう……」と、彼女はにつこりして、「王様はこんな事如何でもいゝと思召すか知れませんが……花を持つて参りますと、お姫さまはまづ如何なさいますか、御存知でいらつしやいますか？」  
「お姫さま！」と、嬉しさに令嬢が叫ぶと、フラビアが顔を見せた。私は脱帽して敬禮した。姫は白衣を纏ひ、髪は無雑作に束ねて居た。姫は接吻した手を私の方に差し出して叫んだ。

「王様を御案内して下さい、ねえヘルガ、コーヒーをお振舞ひしますから。」

令嬢は愛嬌たつぷりの眼で、私をフラビア姫の朝の間へ導いた。やがて姫と二人つきりになると、我々は戀人同志の挨拶をかはす。それから姫は二通の手紙を取り出して見せてくれた。一通は黒のミハエルからのもので、毎年夏季一度は必ずゼンダ城を訪ね給ふを例とせられた姫に、一日の御清遊を煩らはしたい旨、辭令やさしく記してあつた。その頃になると城内の草木繁茂して美しいのである。私は嫌惡の面持で其の手紙を抛つと、フラビアは笑つてゐた。それから、あとの一通を、何か心にかゝると云ふ様子で擴げてみせた。

「誰方から来たものか分りませんが、御覽下さいまし。」

一と目で私にはそれが分つた。此の度は全然署名してなかつたが、嘗て私に四阿の陰謀を記して寄越した手紙の字と同じ手蹟、即ちアントワネット・ド・モーパンのものであつた。手紙にはかう書いてある。

貴女さまをお慕ひまゐらす心は毛頭無之候へども、貴女さまが太公の手中に落ち給はむ事は

神の禁じ厭ひ給ふ所に有之候。願はくは太公の招待には夢應じ給ふこと勿れ。警衛の備へなくんば遠く遊び給ふまじく、警衛も一聯隊にては充分なりと申し難く候。御不審の廉有之候は、ストレルソーを治めます君に此の文書御示有之度願上まあらせ候。

「何故此の手紙には、王様に聞け、と書いてないでせうか？」フラビアは頭を私の肩に凭らせて訊く。波打つ姫の髪が私の頬を撫でた。「何か企圖でもあるのでせうかしら？」

「お生命を大事と思召すなら、文字通り、手紙を御信用なすつて下さい。今日、一聯隊の兵に此の御邸宅を護らせるやうにいたします。警護が充分でない間は、何處にもお出ましになりませぬやう。」

「出るなど、御命令なさるのでございますか？」と姫が訊いた。

「命令です——私を思つて下さいますなら。」

「え、。」と姫が叫ぶ。私は一語もなく、たゞ接吻した。

「差出人を御存じ……？」

「多分……。」と私は答へた。「一親友からの手紙でせう、しかも不幸な女友だちかも知れません。貴女は病氣で、ゼンダへ行けないと仰有つた方がいゝでせう。そしてお断りの手紙は出来るだけ形式的に、冷やかにお書きになつて下さい、ね。」

「ミハエルさんを怒らせても、貴方はお強いから、よろしいのね。」と、云つて姫はにつこりした。「貴女さへ御無事な限り、私は誰にも負けませんよ。」と私は答へた。

間もなく私は姫と袂を別つて、サブトにも相談せず、ストラケンツ元帥邸へ道を急いだ。私は元帥を偉い人物だと思つてゐたし、好きでもあれば、信頼もしてゐた。サブトは一心になりきらぬ所があつたが、今にして思へばサブトは自分に何んでも出来る時は大機嫌であつたが、時として嫉妬を働らかしてゐる事があつた。現在の場合では、サブトはフリツには處理出来ない或る仕事があつた。と云ふのは、彼等は私と一緒にゼンダへ行かなければならなかつたので、世界中で最も大事な戀しいフラビア姫を護つて、私をして後顧の憂ひなからしめ、専心王様を救ひ出す仕事に没頭させてくれる男欲しかつたからである。

元帥は頗る忠誠な態度で私を迎へてくれた。私は或る程度まで秘密を打ち明けて、姫の護衛を一任した。私は彼の顔を真正面から見つめて、太公の方から寄越す者は一人たりとも姫に近づけてはならない事、餘儀ない場合は、元帥自ら十二人以上の兵士を従へて姫の側に待すべき事を吩咐けた。

「仰せの通りでございます。」と、元帥は灰色の頭を悲しげに振りながら言つた。「世の中には、太公以上の方でありながら、戀のためにはどんな悪い事でもする人がございますからねえ。」

元帥の言葉は犇々と胸を打つたが、私は言つた。

「戀ばかりならいゝが、喃、元帥、戀と言ふものは心に望むものぢや。弟は頭に王冠を望んではあないであらうか……？」

「それは陛下の御誤解であればいゝと存じます。」

「元帥！ 私は二三日ストレルソーを留守にするつもりぢや。毎晩其方までに早飛脚を遣はすが、三日経つても飛脚が来ぬ場合は、豫め其方に命令を授けて置くから、ミハエル太公のストレルソー支配権を剝奪し、其方を後任に補す旨公表してくれい。其の際は戒厳令を布いて、ミハエルに王の動靜を諮問するのぢや。よいか？」

「畏まりますでございます。」

「——二十四時間中に回答を求めて、王の所在を明らかにせぬ場合は。」と、私は手を元帥の膝に叩いて語りつづけた。「王は」きものと思ひ、後嗣の心配をして貰ひたい。後嗣とは、承知の通り……」

「フラビア姫でございます。」

「忠義にかけ、名譽にかけ、神に誓つて、其方は死ぬまで姫を守り、悪逆無道の者を屠り、姫を玉座に坐らせて貰ひたいのぢや。」

「忠義にかけ、名譽にかけ、神に誓つてお受けいたします。それから御伺ひ申上げますが、王様には必死の使命を帯びて御他行遊ばさるゝのでございませうか？」

「生命を賭ければとで、予の生命以上に貴いものもなからう。」と言ひながら立ち上つて、私は元帥と握手した。

「元帥！」と私は言った。「今に——必ずと言ふではないが——予の身の上についで奇怪な噂が立つかも知れぬ。予の身の上が何であらうと、又、予が何人であらうとも、ストレルソーの王者の行動だけは答めて貰ひたくないものぢや。」

老元帥は私の手を確りと握つたまゝ云つた、男らしく、キツバリと。

「私はエルフバークの御身内を澤山存じて居ります。王様とてもその御一人にわたらせられます。たとへ何事が起りませうと、王様は勇敢賢明な素質を御備へ遊ばします。加之、御一門を通じて鄭重無比の紳士たり、優雅無雙の戀人たる事を御立證なされたではございませぬか。」

「ルリタニア國王の玉座に姫が坐られたら、今の讀辭は墓碑銘として刻みつけて貰ひたいものぢやな。」と、私は答へた。

「そんな日は、私の存命中には参りません。前途遼遠でございます。」と元帥が言ふ。

私は感激した。元帥の老顔は引き釣つた。私は腰かけて命令書を託した。

「まだ指が固いので、書き辛いよ。」と私は言った。

實際、署名以上のものを記す冒険をしたのは、是れが初めてだつた。苦痛を忍んで、私は王様の手蹟を稽古しなければならなかつたが、まだ上達してはゐなかつた。

「お察しいたします。」と元帥が云つた。「平生の御手蹟とは幾らか相違して居るやうでございます。残念ながら、僞文書と見られた場合は如何いたしませう……」

「元帥！」と、私はカラ／＼と笑つた。「ストレルソーの大砲は何の役に立てるつもりぢや？ 疑惑が解けぬ場合は、大砲を用ひるまでの事ではないか。」

元帥は凄い微笑をたへて、紙片を取り上げた。

「サブト大佐とフリツ・フォン・ターレンハイムを召連れて行く。」と、私は語りつづけた。「太公に逢ひにお行きでございますか？」と、元帥は低聲で尋ねる。

「左様、太公に逢ひたいのぢや、旁々、ゼンダには尋ねる人があつて喃。」

「私もお供出来ましたら。」と、元帥は其の白い髭を引つばつて言つた。「王様のため」と働きたいしますものを。」

「予は、生命や王冠よりも貴いものを其方に預けて行くのぢや。と云ふのは、ルリタニア中其方以外に頼るべき者が無いからぢや。」

「私は、姫君を安泰にお守りして、御歸還をお待ちいたしませう。萬一の場合には、姫君を女王陛下にするばかりでございます。」

私は元帥に別れて宮殿に歸り、サブトやフリツに今までの事を話した。サブトは私に些かの過失を見つけて、不平を並べた。それは豫期してゐた通り、事後承諾を求めて、何故豫め相談しなかつたか、と云ふ事であつた。が、とにかく私の仕事を雙手を擧げて賛成してくれた。やがて時刻がだんだん迫るにつれ、サブトの氣は亢ぶつてゐた。可哀想に、情人フリツは其の幸福を前にしながら、サブトよりも多大の冒險を期せねばならなかつた。それにしても、何と羨ましいフリツではあらう！ 彼が凱歌生還する時は、彼に伯爵令嬢との結婚と幸福とが得られる時であるからだ。それに引替へ、

希望し、奮闘し、戦つた結果、我々が成功して歸ると言ふ事は、敗れるに勝る大きな悲嘆が確實に秘を待つてゐると言ふ事である。フリツには幾分私の心持ちがわかつたと見え、二人つきりになつた時（サブトは室の片隅で煙草を喫つてゐた）、私の腕と腕とを組み合せて言つた。

「君は辛からう。君に信頼してないなど、思はれたくないけれど、君は心中誠意以外何にも持つてゐない事を、僕はよく知つてゐるんだ。」

私は、然し、クルリと横を向いた。彼に私の心中が分らなかつたのは有難かつた。が、彼は私の爲さうとする仕事の事だけを考へてゐたのだらう。そればかりではない。フリツは、私のするやうにフラビア姫を仰ぎ見ようとはしなかつた。

計畫は、何時でも取りかゝるやうに出来上つた。翌朝我々は狩獵に出かける事になつてゐた。私は留守中の手配萬端を済ませておいたが、たゞ一つ、最も困難な、傷心の事だけが残つてゐた。其の日宵になるのを待ち兼ねて、私は馬を木立繁き町に走らせてフラビア邸へ赴いた。行くとき直ちにそれと分つたと見え、心からなる喜びに迎へられた。王様然と振舞つて姫に逢ふ手筈を定めた。私の意氣憤沈せるに引替へて、姫の静けさ、優美さは私の心を慰めてくれた。姫は王様がストレルソーを出て狩獵に赴かれる旨、既に聞いてをられた。

「ストレルソーで王様をお楽しみませする事が出来ないのは残念です。」と、姫は足先で床を軽く踏みながら言へた。「何かお楽しみになるやうな事をしたとは存じますが、不束さにそれも叶はず……」

「え？—と、私は頭を垂れながら言ふ。

「昨夜から……あの……。騒がしい處から一二日だけでもお離れになるのはお仕合せでございますわ。」と、姫は拗ねて横を向きながら、

「猪がうんと暴れるとよろしいのに。」

「大猪を逐つかけて行くつもりですよ。僕は。」と答へて、他に仕方もないままに姫の髪を弄び始めると、姫は頭を振りのけた。

「僕の言葉が御氣に障りましたか？」と、私は吃驚した様子を作つて言つた。少しは姫を憐れましてみたかつたから。姫はまだ怒つた顔を見せた事はなかつた。その清新な顔はいつも私を喜ばしてくれたものだつた。

「何で氣に障りませう！ 正直に申しますと、私と離れてゐては詰まらないと昨夜お仰せでございましたわね。それなのに大猪を逐つかけて行くなどと、まるで反對の事を承はるんですもの。」

「僕が猪に追つかけられてゐるんですよ。ひよつとすると、僕は殺されるかも知れませんよ。」  
姫は黙つてゐた。

「そんな危険が身に迫つても貴女は平氣でいらつしやいますか？」

それでも姫は口を開かなかつた。それでしげく見つめると、姫の兩眼には一杯涙がたまつてゐた。

「お泣きになるんですか、僕が危いから？」  
すると姫は低聲で答へた。

「いつも貴方らしいなさり方でございますわ。そして、戀しい——戀しいと思はれてゐた王様らしくはないのですもの。」

私は深く唸つて、いきなり姫を胸に抱き寄せた。

「ね、フラビアさん。」と、私は萬事を忘れて叫んだのである。「貴女をお伴れしないで狩に行ける僕だと思つたのですか？」

「え？—では……狩ではございませんのですか？」

「いや、狩は狩でも——ミハエルの巢窟に飛び込まうと言ふのです。」

姫は眞蒼になつた。

「ね、お分りになつたでせう。僕もお考へになつてゐる程、下らない戀人ではないつもりでしたよ。さう長い間留守にする譯でもありません。」

「お手紙下さいませ、ルドルフさま。」

私は感極まつたが、疑惑を招くやうな言葉は語れじと考へるのだつた。

「毎日々々、心のたけを言ひ送る事にいたしませう。」

「危い事なさいませんやうにね。」

「必要以外は断じて……。」

「何時お歸りになりますか？ まア、私、お待ち遠しう存じますわ。」

「さア、歸りは……。」と、私は口籠つた。

「ね、ねえ、すぐにお歸り遊ばしませね、すぐに、お歸りになるまで私、寝ませんわ。」

「歸りの日は判然いたしませね。」

「お早くね、ルドルフさま。」

「それは運次第です。萬一……。」

「シート」と、姫は唇を私の唇に押しつけた。

「もし僕が歸つて参りませんでしたら」と、私は囁いた。「僕の代りに王位に即いて下さいまし。一門の内残るは貴女ばかりですから。そして、僕の身の上を泣かないで、國を治めて下さいまし。」

暫しが間、姫は女王然と起立してゐた。

「よく分かりました。治めます。私、空虚な生命、死んだ心臓を抱いても、務めだけは立派に果してお目にかけてますわ。」

さう言つて口を切ると、姫は再び私に凭りかゝつて、さめくと泣き出した。

「すぐに歸つて下さいまし、ねえ。」

身を引いて、私は大きな聲で叫んだ。

「僕は、――死ぬにしても、もう一度お目にかゝらぬ中は死にません。」

「と仰有ひますと？」と、姫は不審さうな眼ざしをして尋ねたのである。私は何にも答へない。姫は依然として、訝しげな眼で私を見つめてゐた。

私は姫に、私を忘れてくださいとは言ひ出せなかつた。それは侮辱だと思はれはしないかと案じられたから。それに私は自分の素性も明かさなかつた。姫は泣き崩れてゐる、私は只其の涙を拭いてやつたばかり。

「男は、廣い世界に只一人と言ふ、いとしい女の側に戻つて来ては不可いものでございませうか。たとへ千人のミハエルがあやうとも、貴女の側へ戻つて來ない僕ではありません。」と、私は言つた。

姫は私に抱きついたまゝ、少しは氣も落ちついて來た。

「ミハエルさまに怪我などさせられないやうにして下さいましね。」

「仰有るまでもありません。」

「きつと戻つていらつしやいませ、ね。」

「勿論です。」

「何處にも引きとめられないで、ね。」

私は、また重ねて答へた。

「勿論です。」

さうは答へたものの、ミハエルの他に只一人——若しその人が生き永らへてあるならば——姫と私との仲を割く者があつた。その人のために、私は我が一身を賭してゐるのではないか。森の中で逢つた物柔らかな、陽氣な人物——狩小屋の地下倉庫に入れられた鈍重な人物、その人物の姿が二重になつて、私の眼前に現はれ、我々の間に入つて来るやうな氣がしてならない。姫が顔を蒼白にし、失神した私の胸に抱かれ眠つてゐる所に、まだ見た事もない眼ざしで、生きてゐる限り私に憑いて来るやうな人物の姿が……。

## 第十二章 山の別荘

ゼンダを去る約五哩、城の所在地とは正反對の方向に、樹木鬱蒼たる土地がある。其處は丘陵をなしてゐて、其の森の中央、つまり岡の頂上と思はしい所には一個の近代的な立派な別荘が建てられてゐる。これフリツの遠縁にあたる伯爵スタニスラス・フォン・ターレンハイムの所有に係はるものであるが、當の伯爵と言ふは學者で隱遁の生活を送つてゐる人で、極く稀にしか此處を訪づれなかつた。それでフリツの請ひを容れ、悦んで私初め我が一行を此の別荘に泊めてくれる事になつた。従つて表面上猪狩（この森は獵場にされてゐた程あつて、一時ルリタニアに蔓つてゐた猪が此處には今尚ほ多數棲んでゐた）の目的地として、此處を我々は選んだのであつた。かうして置けば、ゼンダの近傍に陣どるより遙かに、ストレルソー太公を攻撃するに手頃の距離と思はれたからである。召使

の二團は荷物を馬に積んで早朝出發した。そのあとから、我々は日中發足して、二三十哩は汽車で行き、殘餘の道程を馬で進んだ。

我等の一行は紳士ばかりであつた。サブトとフリツの外、嚴選された紳士十名が私に扈從してゐた。一同はサブトやフリツから、大體の話を聞いて、王様警護の任に當つてゐたのである。一同には其の忠義を鼓舞し、ミハエルへの敵愾心を煽らすために、四阿に於いて王様が襲はれた話も聞かせてあつた。そればかりか、王様の友人が強制的にゼンダ城内に監禁せられてゐる筈だと言ふ事も教へてあつた。其の友人を救ひ出すと言ふのが、此の旅の目的ではあるが、王様の主たる目的は、現在これ以上融和し難い仲の、王弟ミハエルに對する示威運動をなすにある、と言ふ事も言ひ添へてあつた。王様は其の使命を果すに就いては、萬一の場合一同の盡忠に俟つより外はない旨、充分に傳へて置いた。若く、逞ましく、勇敢にして誠忠な一同に、是れ以上何を望まう。一同は其の服従の美德を發揮せんものと、只管奮戦を期して、意氣天を衝いてゐた。

かうして舞臺はストレルソーから、ターレンハイム伯別荘並に谷一つ隔てた彼方のゼンダ城へ移つた。私も亦、わが戀を忘れ、全力を眼前の此の一戦に傾注せんものと、心を移さねばならなかつた。此の一戦とは、王様を生きたまふ城外へ連れ戻すと云ふ事である。暴力を以てしては無益でも、計略を以てすれば勝ち目は充分だつた。それに私は採るべき策を仄めかしてをいた。然し一番弱らされたのは私の動靜を報告する通信であつた。今頃ミハエルも屹度私の此の旅の事を嗅ぎつけて、恐

らくは狩と云ふ表面上の口實には迷はされてゐないに違ひなかつた。ミハエルは争ひの實相をよく知つてゐるに違ひない。さう云ふ危険を感じればこそ、私はおるかサブトまで、もはや事態容易ならざる事を知つてゐた。ミハエルも亦、私やサブトと同様に此の機會の乗すべき事を知つてゐた。彼も亦姫を知り、彼らしい思ひを寄せてゐたし、サブトやフリツには、非常に多額の賄賂を贈れば、二人共抱き込めるに違ひないとも考へてゐるらしかつた。かう考へて來ると、ミハエルは王様を殺しはせぬかとも案じられた。全く、彼は鼠でも殺すやうに、些の後悔もなく殺害し兼ねない男である。が、それより先に、出来るなら先づルドルフ・ラツセンダルを殺すに違ひなかつた。と云ふのは、王様を生かしたまま、手放すと云ふ事と、王様が復位遊ばされると云ふ事が、偽國王ラツセンダルとの戦ひに勝たうと志して、手に取つておいたランプを投げ出させる事になると思へば、私を殺さないのは、何にもならぬ事が明白だつたからである。路々馬の背に揺られながら、私はかう考へては勇氣を奮ひ起すのであつた。

ミハエルは確かに私の行く事を知つてゐた。私が小一時間ばかり家の外に出てゐると、其處へミハエルの許から凜々しい使節がやつて來た。ミハエルは私に刺客らしい者を遣はさないで、部下なる六人組中の三人、即ちルリタニア人のみを寄越したのである。此の三人とはローエングラムと、クラブスタインとルバート・ヘンツオウとである。三人共揃ひも揃つて偉大な名馬の騎手で、身支度まで整へてゐた。ルバートと云へる青年は、中でも最も大膽不敵な様子の、年頃は二十二か三と覺しい男で

あつたが、三人の先登に立つて、言語も明瞭にストレルソトのミハエルからの傳言を述べた。それに由ると、城内ではミハエルはじめ數人が猩紅熱を患つて、目下猩癩を極めてゐるから、傳染の虞れを慮つて、親しく行在所を訪づれない事にしたし、又、ゼンダ城に御來臨なきやう願ひたいと思ふ。甚だ無禮なやうでも、此の場合御寛容を乞ふと云ふ事であつた。ルバートは上唇を歪めてニヤ／＼笑ひながら、毛深い頭を揺ぶるやうにして以上の言葉を述べるのだつた。此の男は見るからに眉目秀麗の青年で、幾多婦女の思ひを亂し惱ませてゐると云ふ噂の主たつたのである。

「弟が猩紅熱を患つてゐると云ふのなら、尙更平常よりも近づきたがりさうなものぢや、何の心配が要るものか。」と私は言つた。

「御自分の用事だけは親らなすつておいで、ございます。」

「城内の者が無病息災であつてくれればいゝが喃……。時にドガウテや、ベルソニンやデチャードは如何してゐる？ デチャードは怪我をしたとか聞いたやうだが……。」

ローエングラムとクラブスタインの二人はハツとして落着きを失つたが、ルバートは更に笑ひつゝ、

「近い中に、よく利く薬を手に入れると申して居りました。」と答へた。

私は思はず噴き出して了つた。デチャードが望んでゐる薬と云ふのは、復讐と云ふ薬だと悟つたからである。



「諸君、一緒に晩餐を食べよう？」と私は言ひ出した。

ルベートは言葉を盡して断つた。城に急用が待つてゐるからと言ふ理由で。

「では」と、私は手を振りながら言つたのである。「又の機会にお目にかゝらう。今度は充分深い知り合ひになりたいものぢや。」

「出来るだけ早くお目にかゝりたいものでございます。」とルベートは快活に答へた。そして嘲弄の面持鋭くサブトの前を大股に立ち去つて行つた。するとサブトは拳を握りしめ顔を曇らせてゐた。

男子若し悪人たらざるを得ない場合には、上品な悪人となりたいたいのが私の念願である。それで、私は他の誰よりもルベート・ヘンツオウが好きであつた。悪事も時流に従つて意氣に行へば、案外罪深いものとはならないものである。

妙な事に、最初の夜、私は料理番が賄つてくれた晩餐を食べられなくなつて了つた。それで御馳走は扈從の者に食べさせる事にして、サブトの注意に従つて、フリツと共にゼンダの町へ馬を乗入れ、知り合ひの宿屋を訪ふ事になつた。途中には殆ど危い事はなかつた。夜は長く明るかつたし、ゼンダの町も此の宿へ来る道には馴れてゐたので、我々は從者を従へて馬を走らせた。私は大きな外套で身體を包んでゐた。

「フリツ、宿屋には人並外づれて美しい娘があるよ。」と町に入ると私は言つた。

「どうしてそんな事知つてゐるんだ。」とフリツが訊く。

「其處に泊つた事があるからさ。」

「何時？」

「前に——」

「泊れば君つて事が分りはしないかな？」

「そりや分るだらう。だが議論は止して、まア僕の言ふ事を聞き給へ。我々は王様身内の者二人で、一人は齒痛に悩んでゐると言ふ事にする。そして離れ間に陣取つて、食事も別にし、病人には極く上等の酒を出させるやうにするんだ。それから巧く交渉して、別嬪娘の外は誰にも給仕をさせないやうにするんだよ。」

「その別嬪さんが來ない場合は？」とフリツが氣を揉む。

「フリツ君、君には厭と頭を振つても、僕にはうんと言ふに極つてゐるのさ。」

我々は宿屋に着いた。眼の外は何にも私の顔は見えないやうにして中に入ると、お婆さんが我々を出迎へた。二分開ばかり経つと、こんなお客は珍らしいと言はまほしげな顔つきをしながら、娘が出て來た。食事と酒を注文して、私は離れの間に坐り込んだ。間もなくフリツが入つて來た。

「あの娘が來るんだとさ」とフリツが言ふ。

「來なきや、伯爵令嬢ヘルガの趣味が怪しまれる所だつたよ、君。」

娘が入つて來た。ゆつくりと酒を注いで貰つて——溢すのは勿體なかつたから——フリツは一杯を

私に差した。

「お痛みはひどうございますか？」と娘は同情の色を見せて尋ねた。

「此の方は、前に貴女を見た時よりも痛まないと仰有つてゐますよ。」と、私は外套をはね除けながら言つた。

娘はアツと聲をあげたが、

「あら、王様でございましたのね！ お寫眞を拜見いたしました時に、私、母にさうだと申しましたのに……御免下さいまし。」

「いや……何にも悪い事はなさらなかつた筈ぢや。」と私は言つた。

「でも、亂暴な口を利きましたから……。」

「そんな事、お待遇がよかつたから何でもない。」

「私、母にさう申して参りますわ。」

「いや。」といつて、威厳を示して、「我々は今宵戯れに参つたのではない。王様がお見えになつてゐるなど、言はないで、只食事を運んで下され。」

娘は問もなく引返して來た。嬉しいうやうな、不審なやうな容子をしてゐた。

「時に、ヨハンは如何してゐるかな？」と、私は食事に手をつけながら訊いてみた。

「あの……あの男でございますか？」

「さうぢや。如何してゐるかな？」

「此の頃は滅多に見掛けぬやうでございます。」

「ほう。そりや又如何して？」

「あんまり來過ぎるからと、面とむかつて申しましたからかと存じます。」と、娘は頭を振りくへた。

「それでは、拗ねて來ないのかな？」

「さうでございませう。」

「では連れて來たら如何ぢや？」と、私は微笑みながら言つた。

「さうしたいと存じて居ります。」と娘。

「其女の力でなら大丈夫ぢや。」と言ふと、娘は嬉しさにサツと顔を紅らめた。

「そればかりで寄りつかぬのではございませぬ。此のごろ城内で非常にいそがしいさうでございまして……。」

「まさか今頃……狩りが始まつてゐる譯でもあるまい。」

「狩ではございせんが……只今ヨハンは雜役に勤めて居るのでございます。」

「ヨハンは雜役に廻されたのか？」

娘は噂話に夢中になつてしまつた。

「え、他に人手がございませんところから——。お城には女手がないのでございませぬ、つまり召使女が居ないとの噂でございませぬが本當か如何かは存じませぬが……。」

「それが如何したかな？」

「お恥かしい事を申し上げますして済みませぬ。」

「いや、私は他所を見てゐるから、構はずに話すがよい。」

「お城には、女の方がお一人おいでになるとの噂でございませぬが、他には女の氣としては更にないのでございませぬ。そしてヨハンは殿方に侍つてゐるのでございませぬ。」

「可哀想に、骨が折れる事であらう、喃。それにしても、半時くらゐ其の母に逢ひに來られぬ筈はなからうに。」

「多分、時間の都合が悪いのかも知れませぬ。」

「其の女はヨハンを思つて居るのかな？」

「はい、思つてゐるのでございませぬ。」

「それでは、明晩十時頃、城外二番目の一里塚で逢ひたいと言つてやるがよい。其處で逢つて、一緒に家まで歸りませうと申すがよい。」

「何か、あの人に危害でもお加へになるのではございませぬか？」

「吩咐通りにすれば危害は加へぬ。さて、外に言ひ置く事もないし……吩咐通りにしてくれよ。それ

から國王親ら此處に來た事は何人にも語らぬやうに……。」

私は幾分言葉鋭く言つた。かうすれば女に恐怖心を注ぎ易いので、薬が效き過ぎてはとの懸念から娘には贈物を取らせて心持ちを柔らげて置いた。それから食事を済ませると、外套で顔を蔽うて、フリツを先登に、階下へ降りて再び馬に乗つた。

もう八時半になつてゐたが、まだ薄暗かつた。町には閑靜な處が多く、噂の種を蒔くに相適はしい所と思はれた。一方には王様を控へ、他方には太公を控へて、ゼンダこそはルリタニアの中心地と言ふやうな感じを與へてゐた。我々は靜かに馬に揺られて町を過ぎ、郊外に出てからは急に駒の足掻きを早めさせた。

「君はヨハンと言ふ奴を捕へる氣かい？」とフリツが訊いた。

「さうだ。餌を見せびらかしてやつたつて仕掛けさ。蝦で鯛が釣れるかも知れないぜ。女つ氣なしのお郎とは、ミハエルめ中々味をやるぢやないか。安全を計るには五十哩以内に女を近づけちや良くないやうだな。」

「では、ストレルソーならい、つて言ふのかい？」とフリツは溜息して言つた。

やがて別荘への道に出て、間もなく家に着いた。土を踏む馬蹄の音を聞きつけて、サブトは出迎へてくれた。

「よく無事で歸れたね。何か向うの者に出遭つたかい？」

「何故……？」と、私は馬から降りながら訊いた。そして、従者に聞えないやうに傍に寄つた。

「君、六人以上の供を附けない限り、此の邊を乗り廻つては不可いよ。」とサブトは私に向つて言つた。「我等の中にベルネンスタインと言ふ、大きい青年があるだらう。」

私も其の男を知つてゐた。それは身丈も私と同じ位の偉丈夫で、美しい肌をしてゐる男だつた。「彼奴は君、彈丸に腕をやられて、二階に寝てゐるんだぜ。」

「ふむ。」

「夕食後たつた一人で森の中へ出かけて行つたんだ。一哩位行くと、木蔭に二人ばかり人影を見たさうだが、内の一人は銃を向けて狙ひを定めたと言ふんだ。此方には武器がなかつたから引返さうと逃げ出すと、ドンとやられて了つたと言ふ譯さ。大騒ぎして歸つて來て其の儘氣絶したが、家の前まで追つかげられないで助かつたよ。」

サブトは一端口を切つて又つづけた。

「君、君を狙つて射つたんだぜ、それは。」

「さうかも知れない。ミハエルから受けた最初の犠牲者だね。」

「一體、どちらの三人なのか疑問だ。」とフリツが言つた。

「サブト、僕はね、今晚只だ遊びに出てゐるんぢやないんだよ。ちよつと思ひついたことがあつたのでね。」

「何だい、それは？」

「それはかうだ。」と私は答へた。「六人組を生かして置いては、ルリタニアから受けた名譽に酬いる事なく、僕は立去らねばならぬと言ふ事になるだらう。それで神に誓つても六人組を仆さうと……」  
聞くなりサブトは、私の手を握りしめたのであつた。

### 第十三章 ヤコブの梯子

六人組を亡す誓ひを立てた翌日の朝、私は或る命令を與へた後、今までに覺えた事のない満足を感じてゐた。其の時私は仕事をしてゐたが、仕事と言ふものは戀の苦痛を癒してくれるだけの效き目がないにしても、その麻醉劑位にはなると見えて、仕事に疲れて、日向の安樂椅子に腰を下ろし、部下の一人が澄んだ聲で歌つてくれる戀唄を聞きながら、楽しい憂鬱に浸つてゐると、昂奮してゐるサブトは之れを見て、却つて驚ろいた位であつた。

かうしてゐる所へ、若いルバートがやつて來た。彼は敵の難儀も物ともせず、大膽不敵にも敵の領土を馬で乗り切つて來たのだ。そこには射撃の名人を潜ませてゐるかも知れない木々が繁つてゐるのに、それを十分承知の上で、彼はまるでストレルソーの公園でも通るやうにやつて來たのだ。彼は私の側近くまで緩やかに馬を驅つて來て、大業さうな敬禮をして、ストレルソー太公からの音信をお渡し致したいから、是非共二人だけでお話したいと言つた。委細承知したところで、彼は始めて私の傍

らに腰をかけたが言つた。

「お見受けいたしましたところ、陛下には戀をなすつておいでのやうでございますが？」

「眞逆……。物や思ふと問はれる程でもあるまい。」と私はにつこりしながら答へた。

「それは結構です。」と彼は答へて、「さて、四邊には誰も見えませんな。ラッセンダル君——」  
私は喫驚して、思はず椅子から半分腰を持ち上げた。

「どうなさいました？」とルバート。

「いや、なに。家來の者を呼び寄せて、其方の馬を連れて來させようかと思つたまでぢや。其方が國王に對する禮儀を辨へぬなら、代りの使者を寄越すやう太公に申し傳へるまでの事ぢや。」

「さては、まだ狂言をつづけようとなさるのですか？」とルバートは手套で、長靴の塵埃を無雜作に拂ひ落しながら言つた。

「狂言はまだ終つてゐないからなア。いづれ其の中、予も名を變へるかも知れないが……。」

「それは結構でございます。私とて眞心から打ちとけて申上げてゐるのです。と言ふのは貴方が私の心を擱んでいらつしやればこそなのです。」

「どうやら予は皆の者から信用されてゐるらしい。」と私が言つた。「男も女も予を信じ祝福してゐるらしいのだ。」

彼は怒りに燃えた眼で、私を鋭く一瞥した。

「もう君のお母さんは死んでしまはれたのか？」と私が訊くと、

「はい、死にました。」

「お母さんはようこそ死なれたよ。」と私は言つた。それを聞いて、彼は低聲で私を呪つてゐた。「それはさうと、太公からの音信とは何ぢや？」と續けて言つた。

が、今の私の言葉は、彼の生やさしい傷痕を刳るものだった。何故と言ふに、彼は母を悲嘆の中に死なせながら、情婦の家で女に現を抜かしてゐた事は、世間周知の事實であつたからだ。然し、彼はすぐ私の言葉に參つた様子を直した。

「太公は貴方に、私とは比較にならぬ程、澤山の報酬を差上げたいと仰有るのです。」と彼は呟くやうに言つた。「私が貴方に差上げると約束したのは絞首索でした。けれども太公は國境通過の旅券と、莫大の金子とをお約束なさるのです。」

「さうだよ、僕が其の中の孰れかを選ばねばならぬとしたら、喜んで君の申出を受けよう。」

「では、拒絶なさるつもりですか？」

「勿論！」

「大方さう仰有るだらうと、私も太公に申上げたのでした。」と怒りを和らげて、ルバートは非常に輝やかしい笑ひを見せながら言つた。

「實は此處だけの話ですが、太公は貴方を理解してゐませんよ。」

聞くより私は吹き出した。

「で、君は？」

「理解してゐますとも！」彼は言つた。「まあ、絞首索がその證據ではありませんか？」

「氣の毒だが、君は一生其の證據を見ずに死ぬ事だらう。」と私は言つた。

「陛下は私に其の問題を論じさせて下さいませるか？」

「惜むらくは、君がもう三つ四つ年をとつてゐると、いゝ話相手なんだが……」

「神様つてもものは年ばかり與へるのです。反對に悪魔と言ふ奴は懷ろを肥やしてくれます。」と彼は

笑つて、「まあ、神様のお厄介にはなりたくありませんね。」

「君達の捕虜は如何してゐるナ？」

「王——？」

「君達の捕虜さ。」

「さうく。私は貴方が知りたがつていらつしやるものを忘れてゐました。御安心下さい。まだ生き

てゐますよ。」

彼は立ち上つた。私も立ち上つた。するとニヤリと笑ひながら彼は言つた。

「ところで、お美しい姫君は如何なさいました？ 今度エルフバードの血統をひく方が生れるなら餘

程赤毛でないと、黒のミハエルの子と間違へられる心配がありますねえ。」

私は覺えず彼に詰め寄つて掴みかゝつた。だが、彼は自若として、心地よげに肩を歪めてゐるだ

けだつた。

「足許の明るい中に、さつさと歸れ！」と、私は罵つた。母の事で彼を苦しめた私は、今見事に一矢

を酬いられたのだつた。

すると、私の一生に又とない、不覺な事件がもち上つた。味方の者共はその時、三十ヤードばかり

向うにゐた。ルバートは馬丁を呼んで、馬を引き連れて來させ、それに一枚の金貨を擲つて立ち去ら

せた。馬はすぐ側に立つてゐる。私も少しの疑念をも抱かず、ぢつと立つてゐた。ルバートは馬に乗

るやうな様子を見せて、急に私の方を振り向いて。左手を腰に當て右手を伸ばしたまゝの姿で。

「握手しませう！」とルバートは言つた。

私はたゞお辭儀をした。そして先方で豫期した通り兩手を背後に廻してゐた。しまつた！と思ふ

間もあらばこそ、彼の左手は私めがけて、サツと突き出された、短劍は宙に紫電を閃かして、強かに

左肩に突き入つた。あゝ、若しも私が身を逸さなかつたら、短劍は正しく心臓を貫いたに違ひない。

あッ、と言ふ悲鳴諸共、私は後へよろめく。ルバートは馬の鏡に足をも觸れず、ひらりと馬上に飛

び乗るが早いか脱兎の如くに飛び去つた。其の後姿を見送つて、味方の叫喚とピストルとが放たれた

が、ピストルも叫喚も彼の飛鳥の如き早業には、何の役にも立たなかつた。私は淋漓として流れる血

汐に染みながら、遙か並木路を彼方に消えゆくルバートの後姿を瞞めてゐたが、そのまゝ、ばつたり椅

子の上に崩れて了つた。味方は周囲を取り圍んだが、私は既に氣絶してゐた。

やがて私は寢臺の上に運ばれて、永い間其處に無意識か半意識の状態で寢せられてゐたらしい。ハツキリ意識を回復して眠りから覺めた時、傍にはフリツがゐた。もう夜だつた。私はまだ衰弱して、度勞しきつてゐたが、フリツは傷は軽いから直ぐ全快するだらうし、こんな事件が起つたに不拘、萬事順調に行つてゐるから安心するが、と元氣づけてくれた。それと言ふのは、從者のヨハンが私のかけた民にかゝつて、今此の家に居ると言ふ話だつた。

「それに可笑しい事に……」と、フリツは話をつづけた。「彼奴は此處に捕つて來たのを、さう悲觀してゐないらしいんだ。彼奴は黒のミハエルの計畫が成功した曉に、例の六人組を除いては、その一部始終を知つてゐる人間でも、大した褒美にありつけさうもないと考へてゐるらしいんだ。」

果してヨハンがさう考へてゐるとすれば、存外彼には鋭敏な性質があつて、用ひやうによつては我々の希望を實現させてくれるものかも知れなかつた。私は早速、彼を此處へ連れて來いと命じた。サブトが連れて來て、私の側の椅子に坐らせた。彼はむつとりして、おどろくしてゐた。然し有體に言ふと、若いルベートの事件の後だつたので、我々も無氣味でない事もなかつた。それで彼がサブトの恐ろしい六連發の銃先を避けよう／＼とすればする程、サブトはヨハンを私から離さう／＼としてゐた。それに室に入つて來た時も、両手は固く縛つたまゝだつたが、私はそれを解かせようともしなかつた。

今更、私はその時、その部屋にゐた番兵の數や、ヨハンに約束した報酬の額を管々しくくり返して數へ立てるにも及ばないのだが——兎に角、我々は約束通り正直に拂つた。其の金で彼は今裕福に暮してゐる。且つ又、其の後直ぐ分つた事であるが、彼は悪人と言ふよりは、寧ろ性格の弱い人間で、彼が此の事件に足を突込んだのは、慾得づくよりも、太公とヨハンの兄マクスとが恐ろしかつたからであつた。さうと知つて見ると、彼に對する我々の警戒も寛やかになつた。かうして太公と兄マクスを恐れて事件に左袒したのであつたが、城内では全く忠實に働いてゐた。そして密議の席上にこそ加はらなかつたが、城内の機密を知り盡してゐるので、彼の話は敵の計略の裏の裏まで赤裸々に明かにしてくれた。彼の話は短く述べるとかうだつた。

城内の地下に岩を掘り抜いて造つた二つの小さい室があり、そこに行くには釣橋の一端につゞく石の階段によらねばならない。その二つの部屋の中で、表の方に有る室には、窓は一つもなく、いつも蠟燭が灯されてゐる。奥の室は城濠に面して、一つの四角な窓が有るきりだつた。表の室には晝夜の分ちなく六人組の三人が見張りしてゐる。太公ミハエルが彼等見張りの者に與へた命令は、何時如何なる時表の室に敵が來た時でも、彼等三人の見張番は、身に危険の及ばぬ限り、其の室の扉を防禦せねばならない。然し、若しも扉が開かれさうな危険な場合になつた時は、早速ルベート・ヘンツオウかデチャード（何時も此の二人の中孰れかは、必ず此處にゐる事になつてゐた）は、他の二人に出來るだけ長く扉を防がせ、自分は奥の室に飛込んで行く。そして其處で、實際は手厚い待遇を受けては

あるが、身には寸鐵も帯びず、三吋以上は腕も動かさぬやう精巧な鋼鐵の鎖に繋がれてある王様を猶豫なしに片づけねばならない。かうして王様は、表の扉が突破されぬ間に殺されて了ふ。では王様の死骸は如何するのか？

「さうですとも。」と、ヨハンは云つた。「太公も其れは充分考へてをられます。二人の者が表の戸を守つてある間に王様を暗殺した下手人は、四角な窓にある門を抜きます。門は蝶番で閉閉する仕掛になつて居るのです。すると窓からは、もう少しの光も射し込みません、と言ふのは窓の口が大きな土管で塞がれるからなのです。さて此の土管ですが、これは人が通れる位大きなもので、濠の中へ突き抜けてゐます。そして其の一端はすぐ水面の上に出てゐますから、水と土管の間には少しの間隙もございませぬ。王様はもう死んでいらつしやいますから、下手人は其の死體に錘を結びつけて窓近くへ運び、滑車で土管の口の高さまで引き上げます。——その錘が餘り大きくならないやう、兼ねてデチャードが用意して置いたのです。そして足を土管に突込んで、王様を突き落します。死體は飛沫も音も立ずに水中に落ちて、深さ二十尺もある濠の底へ沈んでゆくのです。これが終つたところで、下手人は「大丈夫！—と叫んで、今度は自分の身體を土管の中へ滑り込ませます。そこで残りの二人が奥の室に駆け込んでそれをするだけの餘裕があり、又襲撃がさほど激しくない場合は、瞬間の餘裕をみつけて、扉に門を下した上、悠々と土管を滑り下りると言ふ次第でございませぬ。死んで了つた王様には、水底から浮き上ると言ふ事は出来なうても、此の二人はボカリと浮き上つて、對岸に泳ぎ

つきますと、そこには彼等を引上げる綱と馬とを用意して、人々が待つてゐるのです。形勢不利と言ふ場合でしたら、太公は彼等と一緒に馬に乗つて安全地帯まで逃げのびるのですが、萬事順調な場合なら、彼等は再び城内に戻つて、敵を畏にかけるのです。必要に應じて何時でも王様を處置出来るやう、太公はかう言ふ工夫をしてゐるのです。然しそれは愈々最後の時でないとは行はれませぬ。と言ふのは、御承知の通り、太公は王様を殺す前後に貴方を殺さない限りは、王様を殺さうと思つてゐないからなのです。私の申上げる事はこれだけです。諷のない事は神様も御照覽になつてゐます。で、此の上は私が太公に復讐されませぬやうお守り下さいませ。私のした事が先方に分りますと私は早速死刑です。どうぞ先方に捉まりませぬやうに！」

話は支離滅裂だつたが、聞き直して補足した。彼の話は我々に武装攻撃をせよと暗示したが、萬一、之れを悟られると壓迫されぬとは限らない。かう考へると下手な手向ひをする事は差し控へなければならなかつた。でないに、王様が暗殺される虞れがあつたから。此處まで考へて来て、不圖思ひついた事がある。それは六人組の一人が、王の身代りになつて牢に入つてゐて、搜索隊が来た時大聲で救ひを求めぬ。それを求められたミハエルは、無分別な行爲を悔いてかう言ふだらう。此の男は城内の一婦人（ド・モーバンの事である）に懇懇して、自分を憤らせた見せしめに、彼を監禁したのだと。然し、彼の申開きを聞いたので満足して釋放すると言ふ事にすれば、太公の頭痛の種のゼンダ城の虜に關する噂は消え、従つて此の噂を詮索する人々もなくならうと言ふものだ。その後で、ミハ



エルは何時でも王様の身柄を始末すればいいのだ。

サブト、フリッ、それに寢床の中の私とは、恐怖に戦きながら互ひに顔を見合せ、且つその計畫の残忍さと卑劣さに驚ろいた。公然干戈を交へて太公と戦ふにせよ、又は隠然爪牙を磨いて表面平和を装ふにせよ、王様は我々の手が届かぬ中に死んでしまはれるに違ひない。若しミハエルが強くて味方を征服すれば、萬事は解決する。だが、たとへ私より強いにせよ、彼を罪することも出来ねば、又王を死に到らしめた罪の一半を私が負はずには、彼の罪を斷ずる事も出来ない。更に又王なき後は私が王として残らねばならない。(あ、私の血は、屢々激しく躍つた)そして二人の間には未來永劫絶えざる争闘を見ねばなるまい。太公には勝利の見込みはあつても、敗れる虞れは殆どないやうに思はれる。精々悪く行つた所で、彼は今まで通り僞王様の私と言ふ邪魔者と依然抗争をつゞけるだらう。反對に、うまく私を征服すれば、彼に反對する者はあなくなる。私は此の間中から、黒のハミエルはもう、私達と戦ふことを止めたがつてゐるのではなからうかと考へるやうになつてゐた。が、今になつて、ミハエルは武器の上では平和を装つてゐても、心では常に陰謀の爪を磨いてゐることが分つたのだ。

「王様はこんな仕掛のある事を知つていらつしやるのか？」と私は尋ねた。

「私と兄がヘンツオウの吩咐で、其の十管を据ゑたのです。」とヨハンは答へた。「丁度其の日はルベトトが監視番でした。すると王様は何をしてゐるんぢやと御訊きになりましたが、ルベトトは作り笑ひをしながら、ヤコブの櫛子を造り換へてゐる所なんです。物の本に書いてあります通り、此の櫛子は娑婆から天國へ行く人間の通路です。場合によつては王様もお通りになるでせう……と申し上げたのでした。王様は勇敢な方ですけど、流石にこれをお聞きになつた時には、赤くなつたり、蒼くなつたりして御立腹になりました。」

ヨハンの話は終つた。私はフリッに、彼を向うへ連れて行かせて保護を命じた。そしてヨハンに言ひ添へておいた。

「若し人にゼンダ城に虜があるかと訊かれたら、あると答へても差支へない。が、捕虜は誰だとか訊かれたら、屹度黙つてゐるがよい。若し此處にある人が、ゼンダの虜の真相をお前の口から聞き知つたら、お前を助けると言つた約束は取消した。いゝか！」

ヨハンが連れ去られた後で、私はサブトの顔を見た。

「困つた事になつたなア。」と私が云つた。

「全くだ。」と、サブトは白髪まじりの頭を振り振り、「私が思つた通り、來年の今頃は、君は此のままマリタニアの國王になつてゐるんだらうよ。」と言つて、ミハエルの卑怯さを呪つた。

私は枕に頭をつけて横になつた。

「僕には、」と私は口を切つた。「王様を無事に奪ひ返す方法が二つある。一つは太公の手下に反抗させる事だ！」

「その考へはそのまゝにして置くさ。」とサブトは言つた。  
「僕もそれは氣乗りがしてゐないんだ。が、これから話す第二の案と來たら、奇想天外な思ひつきなんだからね……」

#### 第十四章 城外の深夜

善良なルリタニアの國民は、私の負傷の一件を知つて、嘸吃驚したに違ひない。官報は遊戯中、私  
が不慮な槍に突かれて致命傷を負うたと報じてゐるから。私は其の公報を重大らしく發表させて、異  
常な國民の昂奮を起こさせた。その結果、次ぎのやうな三つの事件に逢着した。

第一は、フリツの友人で、信用出来る青年醫師以外、誰にも診察させなかつたと言ふので、私はス  
トレルソウの名醫連の怒りを買つた事である。第二に、私の威令は最早ストラケンツ元帥の命令程の  
重みも人に與へなくなつたので、フラビア姫は元帥の警護の下に、ターレンハイムへ旅立たうとして  
ゐると言ふ手紙を元帥から受取つた事である。第三は、ストレルソウ太公が、官報や、表面的な私の  
静謐によつて、事實私が活動不可能で、生命が危いと思ひこんだ事であつた。尤もそれには、最初私  
の病氣の原因が、あまり誠しやかに報告された故もあつた。これはヨハンから聞き知つた事である。  
さてヨハンであるが、私は全く彼の正直さを信用して、再び彼をゼンダ城へ歸してやつた。彼は城に  
歸ると、戀に溺れて一晩城を空けたのは、城規を紊るものであるからとて、ルバート・ヘンツオウか

ら強か根柢を見舞はれた。ルバートの仕打ちには、彼に深い怨みを抱かせ、且つ太公が此の折檻を許し  
た事は、彼を約束以上に私の味方にしてやつた。

フラビアが着いた時の事を私は詳しく語る事は出来ない。寢込んで、生死の境に彷徨してゐる私  
を見るものと思つて來てみたら、私は床の上に起き上つて元氣にしてゐたので、其の時の姫の喜んだ  
事！ 全く一幅の美しい繪のやうだつた。今はもう、臆るな記憶となつて了つてゐるに不拘、思ひ出  
しても當時の有様が眼前に躍るやうに思はれる。正直に言ふと、彼女が私の傍にゐてくれるのは、自  
分のやうな淋しい心の人間にとつては、天國にある思ひさながらだつた。その楽しい幸福を味ふた  
めには、直ぐ其の後に、避くべからざる死刑の運命が待つてゐるやうとも憾みはなかつた。かくして私は  
まる二日間、姫と一緒に暮らせた事を喜んだ。その二日間が過ぎた時、ストレルソウの太公は、狩を  
催す準備を整へた。

今や、太公に一撃を加へる時が近づいたのだ。サブトと私とは熱心に相談した擧句、一か八かの危  
険を冒す決心を定めた。我々に此の決心を促したものは、王様は次第に瘦せ衰へて、顔色は蒼白に慄  
痺して、監禁のために健康は害はれていらつしやると言ふ、ヨハンからの知らせであつた。こんな状  
態では、王様であらうとなからうと、獄死されるは火を見るより明かである。それを思へば、我々は  
王様のために速やかに行動しなければならなかつた。私一個の立場から考へても、さうしなければな  
らなくなつた、と言ふのは、ストラケンツ元帥からは早く私が結婚してくれなければ困ると言つて來た

し、私も元帥の言葉に従つてもいゝやうな氣になつてゐたからだ。けれども、私は今でも、フラビアに對して抱いた自分の夢想を實現したとは信じてゐない。私は恐らく逃げ出したかも知れない。私が逃げ出せば、自然結婚問題も消滅して了ふだらう。それに又、私とて聖者のやうに道徳堅固とは言へないから、何時までもフラビアとさうして居れば、悪い結果を惹起したかも知れなかつた。

だが、一體、王様の弟と、質王様とが、外面非常に平和だと思はれる時、靜かな田舎町を舞臺にして、表面互ひに親睦を装ひながら、裏面で必死の鬭争をつゞけてゐると言ふ事は、まるで知らない國の歴史上の事件でもあつたやうに不思議がられる事だらう。而もさう言ふ關係が、今、ゼンダとタレンハイムの間開始つてゐた。私が當時を回顧すると、自分でも半ば氣狂ひになつてゐたのではないかと思ふのである。サブトはよく私の事を、世間見すの我儘者で、人の忠告なんかに耳を藉さない男だと言ひ言ひしたが、全く私は氣儘だつた。假りにルリタニアの王様の中に、暴君と言ふものがあるとしたら、それはあの頃の私だつた。私はどちらを眺めても、自分の人生を楽しくしてくれるものが見當らなかつた。まるで古手套でもぶら下げて歩いてゐるやうに、自分の生命を粗末にした。最初の中こそ、周圍の者共は私の身邊を警戒して、過ちのないやうにと努力したり、また無暗に外に出かけさせまいと説いたりしたが、やがて私の爲人が分つて來ると、何故私がさう言ふ氣質になつたかと言ふ理由を知つてか、知らずにか、終ひには皆諦らめて了つて、萬事は運命のする事で人力の左右し難い所とされたものか、ミハエルとの勝負を私に任せるより外はないとされて了つた。

翌晩、夜更けに、私はフラビアと並んで坐つてゐたテーブルから立ち上ると、その室の入口まで彼女を送つて行つた。私は姫の手に接吻して、熟睡して幸福な明日をお迎へ下さいと挨拶した。それから私は着物を着更へて外に出た。サブトとフリツは既に六人の部下と馬とを用意して、私を待つてゐた。サブトは鞍の上に長い一條の綱を用意して、フリツ共々嚴重な身ごしらへをしてゐた。私は私で、短い頑丈な棍棒と、長いナイフとを用意した。一行は道を迂回して、わざと町を避けて進んだ。一時間後に、我々はゼンダ城につゞく丘の上を、靜かに登つてゐた。

其の夜は咫尺も辨せぬ暗い暴風雨の晩であつた。坂を攀ぢ登ると、疾風の雄叫び、雨の礫が激しく襲ひかゝる。虚空を衝く大木は風に嘯き雨に咽んだ。やがて城から四分の一哩ばかり手前の、木立まで達した我々は、六人の部下に馬を伴れて隠れてゐると命じた。サブトは呼子笛を持つてゐた。それが鳴つたら危険が迫つた合圖だから、直ぐ我々三人の所へ集まれと吩咐けた。然し、我々は此處まで來る間誰にも逢はなかつた。私はミハエルが私を病床に呻吟してゐるとのみ油斷して、今尙ほ番兵を解いてゐてくれ、ばい、がと念じたのだつたが、果してその通り、我等は無事に丘の頂上に達した。やがて路の下に淀んで、路と城とを隔てゝある濠の岸に達した。一本の樹が堤の縁に立つてゐる。サブトは音のせぬやう、一心に木に綱を結びつけた。私は長靴を脱ぎ、壇のまゝ、ブランデーを一杯引つけ、ナイフの鞘をゆるめ、棍棒を口にくはへた。すつかり身支度が出来ると二人と握手した。此の期に及んでも、フリツは私の無謀を引き止めたげな面持ちをしてゐたが、私は氣にもかけずに、綱を

身體に巻きつけた。私はこれから、ヤコブの梯子を探りに行かうとするのである。

そろ／＼と水の中に身體を沈めた。その夜は荒れてこそあつた、日中は温かな好天氣だつたので、濠の水はさして冷たくなつてゐない。私は、目の前に嚴めしく聳り立つ大きな石垣の周圍を泳ぎ出した。見えるのはたゞ前方二ヤードばかりである。私はじめ／＼と苔のむした石垣の直下を泳いでゐるので、これなら大丈夫敵に發見される虞れはないと安心した。對岸の新らしく築いた城の一劃から、數條の燈影が洩れて、時々笑ひさゞめく聲が聞えて來た。私はルバート。ヘンツオウの甲高い聲を聞いたやうな氣がして、酒で眞紅になつたルバートの姿を目に泛べた。私は差し當り、しななければならぬ仕事を思ひ出しながら、氣を落ちつけて一と休みした。若しヨハンの話に偽りがなかつたとしたら、私は今、王様の牢の窓に近づいてゐる筈だ。私は極く緩やかに動き出した。すると前方の闇の中から、物の影がぼんやり浮き出して來る。それが窓から水中に折れ曲つてゐる例の土管だつた。水上約四尺位突き出て、人二人位の太さをしてゐる。將に近づかうとした刹那、私は土管の外に何物かを發見して、心臟がドキツとした。よく見ると、土管のかけから舟の舳がぬつと突き出てゐるのだつた。耳を澄ますと、人の歩く蹺音のやうな幽かな響がする。ミハエルの陰謀の番をしてゐるのは一體誰だらう？ 其奴は目ざめてゐるのか、眠つてゐるのか？ 咄嗟に私はナイフの用意如何と手探りで調べて水の中を進んで行つた。すると其の時、私の足裏に濠の底が觸れた。調べてみると、城の土臺が十五時ばかり出張つてゐて、それが水にかくれて暗礁になつてゐるのだつた。私が其の上立つと、水は腋まで來た。それで私は身を屈めて、土管の折れ曲つた下に隙間があるので、その暗がりやをヂツとすかして見た。

舟の中には一人の男があつた。小銃がその傍にあるらしい、銃身の光りにそれと察しられた。哨兵のゐないのを喜んだのも束の間、とう／＼此處にゐたのだ！ 彼は非常に靜かに坐つてゐる。私は耳をすました。其の呼吸は深く、規則正しく、單調だ。有難い、此奴は寢込んでゐる。私は暗礁の上に膝まづいて、土管の下から手を伸ばし、彼の顔と私の顔とを二呎位の近さまで近づけた。見ると大きな男である。しかもヨハンの兄のマクスであつた。私は帯皮に手を忍ばせて、ナイフの鞘を拂つた。私は、自分の過去を振り返つて、此の時を思ひ出す程嫌なものはない。それが、たとへば、一個の人間、否、叛逆者としての當然の報いか否かは問ふ所ではない。その時私は自分に向つてかう言つた。「これが戦ひの常なのだ！ その上王様の生命は風前の燈なんだもの！」と。私は身を起して、暗礁に繋いである舟の側に立つた。息を忍んで狙ひを定め、腕を振り上げた。彼はもがいた。そして目を大きく／＼見開いた。彼は恐怖のあまり、小銃を握りしめたまゝ、私の顔を見て喘いだ。私の一撃は終に彼を刺し殺したのだ。すると其の時、對岸の堤の上から、戀歌の合唱が聞えて來た。死骸を崩れたまゝの姿にして、猶豫はならじと私は、ヤコブの梯子に身を向けた。今刺し殺したマクスの見張の順番はすぐ終るかも知れぬ。そして代りが來たら萬事休矣だ。私は早速土管に凭れて、水面に近い下端の方から石垣を貫いてゐる、一番上の方まで調べてみた。それは少しも壞れた所もな

ければ、罅さへなかつた。踞いて、尙ほ下の方を調べてみたが、其の時、私の呼吸は思はず急速にはずんで行つた。それは何故か、土管の下の方、ピタリと石垣に喰つゝいてあるべき場所に、一條の光が洩れてゐるではないか！ それは正しく王様の牢室から洩れて来るのに違ひない。私は肩を土管に打ちつけたり、力一杯揺り動かさうとした。實際は、ほんの僅かも廣がらなかつた。私は断念した。だが、私は土管の下の方が石垣の中に全然固定してゐない事を知つたゞけでも見つけものだつた。

しばらくすると、澁い暖れた聲が聞えた。  
「さて、我々仲間の様子が呑みこめましたら、お休み遊ばしませ。所で、私はまづ勳章をつけて來なきやなりません。」

デチャードだ！ 私は咄嗟に英語の訛りを聞き遁さなかつた。

「出發前に何か御用はございませんか？ 陛下。」  
つゞいて王様の聲がした。何時か森の小徑で聞いた、愉快な調子とは似てもつかぬ、弱々しい空虚な聲ではあつたが、正しく王様の聲であつた。

「どうかミハエルに。」と王様は仰せられた。

「一と思ひに殺してくれと言つてもらひたい。予は今此處で、生命を一寸試しにされてゐるも同然ぢや。」

「太公は陛下を殺さうとは思召してゐないので。當分は、」とデチャードが囁いた。「何れ其の時が参りましたら天國へ行く道をゆつくり御覽下さいまし。」

すると王様の御返事で、  
「よし／＼。もう用事がなかつたら彼方へ行つてくれ！」

「天國の夢でも御覽なさいまし——」と、悪黨が言つた。

光は消えて見えなくなつた。扉の門が確乎と閉ぢる音がした。その後王様の啜り泣かれる聲が聞える。王様はお望み通り、今や只一人になられたのだ。何處に王様を嘲り笑ふ者があらうぞ！

私は敢へて王様に話しかけようとはしなかつた。救ひ出されると知つて、驚喜の餘り聲でも立てられたら、それこそ大變だ。私は其の夜は何にも敢行するつもりではなかつたので、もういゝ加減、危険のない間に逃げて、マックスの死體を運び去ることにした。死體を其の儘にしておいては、露顯のものと、舟の繫ぎを解いて、私はそれに乗つた。折しも風は激しく吹いて、櫂の音が敵に聞える心配もなく、私は急いでサブトとフリツが待つてゐる方へ漕いで行つた。恰度そこへ漕ぎつけると、濠を越えて後の方から鋭い口笛が聞えた。

「オーイ、マックス！」と叫んでゐる。

私が低聲でサブトを呼ぶと、する／＼と綱が下ろされた。それを死體に巻きつけて、私はそれを傳つて上に攀ち登つた。

「呼子笛を鳴らして部下を集めろ！ そして綱を引き上げてくれ。もう口を利かない事だぞ！」

サブトとフリツは死骸を引き上げた。それが丁度道傍に引き上げられた時、三人の騎馬が城の前面に現はれて、彼方此方へ疾驅してゐる。此方からはよく先方の様子が分つたが、此方は徒歩であつたので氣づかれなかつた。けれども、味方の六人は口々に叫んでやつて來た。

「畜生、何んて暗い晩だらう！」と聞える甲高い聲。

若いルバートの聲だつた。すぐ其の後に銃聲が鳴つた。到頭味方と敵が衝突したのだ。私は馳け足で前進する。サブトもフリツも、我れ劣らじと後につづいた。

「突つ込め！ 突つ込め！」と、またルバートの聲。怒號をあげて、彼は先頭に立つておそひかゝつた。

「俺はやられたぞ、ルバート！」と敵の一人が叫ぶ。「味方一人に敵は三人がかりだ。君は早く逃げろ！」

棍棒を引摺んで私は疾走した。突然たてがみに身を寄せて、私めがけて飛んで來る若武者一騎！

「クラフスタイン、やられたかッ？」と其の男が叫んだ。

返事はない。

私は突如馬首に跳びついた。馬上の主はルバート・ヘンツオウ。

「望むところ！」と私は叫んだ。

彼は捕はれたも同然だつた。彼の手には只一振りの劍があるばかり。味方は彼をめぐめて夢中に跳

びつく。サブトとフリツも駆けつけた。が、私は二人を押し止めた。二人が餘り近づいて發砲でもしやうものなら、ルバートは死ぬか降伏して了ふかだ。

「いざ、尋常に！」と私は叫んだ。

「ふん、河原乞食風情が！」と、私の棍棒を受けながらも屈せず、物の見事に眞二つに切り拂つた。南無三、しまつたりと（お恥づかしい話だが）頭をかへて、私は命からく逃げ出した。何處まで

も悪運強きルバート・ヘンツオウは、馬に拍車をひと當てすると、彈丸雨と降り注ぐ中を物ともせず、濠端めざして馬を躍らせ、ザンプとばかり水中に跳び込んでしまつた。少しでも月の光があつたのなら、味方は彼を射止めたかも知れなかつた。然し！ 何しろ交目も分たぬ闇ではあり、その闇に乗じて濠に投じ、城の一角に泳ぎついて、ルバートは我々の目から姿を消して了つた。

「畜生、逃げおほせやがつた！」と、サブトは口惜しがつて苦笑した。

「敵ながら天晴れの男さ。」と、私も言つた。「ところで、誰か敵を捕へたかな？」

味方はローエングラムとクラフスタインを捕へたのだが、二人は既に事切れて死んでゐた。ゆつくり埋葬する隙もないので、マクス諸共、我々は三人の死骸を濠の中へ蹴落してしまつた。それから味方は一隊に固まつて、丘を馬で馳け降つた。味方の中央には、三人の勇敢な戦友の死骸が取り圍まれて進んだ。歸る途々、一同の心は戦友の死に重苦しく打ち沈み、王の事を考へては不安に悩んだ。そして若いルバートの奴に、またしても裏を掻かれた事を思つて口惜しがつてゐた。

それに私の上を省みれば、卑怯にも眠れる雑兵を殺した外、尋常の戦ひに一人の敵をも斃せなかつた事が頼に障つて、自分で自分を憤らずには居れなかつた。それに、ルバートの奴に、河原乞食と言はれた事が、堪らなく不快でならなかつた。

## 第十五章 憤怒の言葉

ルリタニアは英國ではない。換言すればミハエル太公と私との争ひは、英國のやうに秘密の厳守されぬルリタニアでは、段々世間の注意を喚起せずには居なかつた。其の夜の異常な事件は、二人の間の争ひを一層明白にしてつた。元來、上流社會では決闘と言ふ事は珍らしい事件ではなく、又、偉い人々の間の私闘は、勢ひ周囲にまで波及して、お互ひの友人や家來まで仲が悪くなるのは通有性である。それはさうと、前述のやうな争ひの後で、其の評判の立つのを、私は警戒する必要があると考へたのだつたが、結局世間の耳に戸は立てられず、其の噂は益々大きくなり始めた。三人の死を世間に秘密にしたところで、其の親類縁者には隠しおほせなかつた。私は嚴重な命令を發して、其の決闘は先例のない許可の下に行はれたもので（宰相は此のため一枚の許可書を作製してくれたが、それが馬鹿に上出来だつた）如何なる危険な場合たりとも、中止を許されぬ事になつてゐたのだ、と公布した。また私は、ミハエルに對して、公の聲明書を發表した。ミハエルも謙讓な態度で之れに應じてくれた。それに依ると、兩者の言は次ぎの一點では一致してゐた。即ち、花札の勝負の時、札をテ-

ブルに投げ出すやうな非禮を、お互ひに忍ぶ事が出来なかつたと言ふのである。そして此の一致が、他の一切の相違點を公衆の前に胡魔化してくれた。此の點ミハエルも中々芝居が上手で、私同様、ルバートから河原乞食と呼ばれていゝ人間だつた。そして、お互ひに憎み合つてゐる二人が、一緒になつて世間の評判を、まんまと欺いて了つたのだ。然し、いゝ事ばかりはなく、反面我々の争ひを延ばす必要があつたのだ。ぐづく延期してゐる間に、王様は我々の救ひを待たずに、牢屋で死なれるかも知れない。或ひは場所を移して、他所に監禁されるかも知れない。それを考へると堪らない焦燥を覺えた。かうして餘儀なく戦ひを中止してゐる間、私の只一つの慰藉となつてくれたものは、フラビアが私の聲明書に、温い心持ちで對してくれた事であつた。そして彼の女の愛を克ち得た喜びを語つた時、姫を愛するやうになつた動機は問はず、早くそれを行爲の上で立證してくれよと、姫に頼まれた。

「まア結婚までお待ちなさい。」と、私は微笑みながら言つた。

休戦の結果と言ふ譯ではなからうが、夜は知らず晝間だけは、ゼンダは言はゞ中立地帯となつて了つて、兩方の兵士が安全に通行する事が出来るやうになつてゐた。

すると或る日、フラビアとサブトと連れ立つて、遠乗りに出かけた私は、途中一人の知人に邂逅した。其の邂逅は、考へてみると随分滑稽でもあり、迷惑でもあつた。私がズツと馬を進めて行くと、勿體振つた男が二頭馬車を停めて箱から出て、丁寧な禮をしながら私の傍に近寄つた。見るとストレ

ルソーの警視總監だつた。

「決闘に關する陛下の御訓令は、我々の感銘措く能はざるものでございました。」と、彼は私に向つて言つた。

若し彼の言ふ通りに、ゼンダの市民があゝの布告を信じてゐるとすれば、もう我々は早速警戒を解いて、またミハエルと争つていゝと、私は決心した。

「君はあの公表のことで、ゼンダに來たのか？」と、私が尋ねた。

「いえ、どういたしまして——。私は英國大使からの依頼によつて參りました。」

「一體、あの英國大使がどうしたのぢや。」と、私は何げなく言つた。

「いや、何、大使の同國人の青年で、相當地位のある者でございますが、その男が失踪いたしましたのでございます。友人にさへ、もう二月も便りがないのでございますが、その青年の姿は、ゼンダで見えなくなつたと信すべき理由がございませんので。」

フラビアは、ほとんど二人の話に注意してゐなかつた。私はサブトの様子などは見ようともしなかつた。

「その理由とは？」

「巴里に居ります、青年の友人で確か、エム・フェザリーと申します者が、我々當局に教へてくれました。たゞから綜合いたしましたしまして、彼がこゝに來たといふのは確かでございます。それに、鐵道の驛員が、

旅行鞆に記した、青年の名を記憶してをりましたので。」

「何といふ名だつたかナ？」

「ラツセンダルと申します。」と彼が答へた。その名は、彼に聞き覚えのないものらしいかつた。然し、總監はフラビアをチラリと見て、聲を秘めて話を續けた。「それに、男は當地へ婦人同伴で來たらしいのでございます。陛下には、ドモーバン夫人といふ名を、お聞き及びではございませぬか？」

「あゝ、知つてゐる。」と、私は見るともなく、ゼンダ城の方に視線を向けながら言つた。

「女は、このラツセンダルと、同じ時刻にルリタニアに到着したのでございます。」

チラと總監は自分を見た。彼は私からなにか聞き出したいやう氣色なで、熱心に私を注意してゐるのだ。

「サブト。」と、私は言つた。「予は總監に話がある。そちは、姫と一緒に、あちらへ行つてくれい。」そして、總監に向つて、「さあ、どういふ話だ。」

彼は私の側近くに寄つた。私は鞍に乗つたまゝ身を屈めた。

「青年は、その婦人と戀愛關係があるのぢやなからうかと思ひますか？」と、彼は囁いた。

「何しろ、二月も消息がないのですから。」と、今度は總監の視線が、城の方へ向けられた。

「さうだ。女はあの城にあるのぢや。」と、私は靜かに言つた。

「だが、ラツセンダル——確かさういふ名だつたナ？——その男はあそこにはゐまい。」



「太公も、戀敵を城に置かれる筈はございますまい。」

「いかにも」と、私は極く眞面目な顔をして應じた。「だが、そちは確か重大事件があるといふ様子であつた喃……」

總監は何かわび言を述べようと手をひろげたが、私は、彼の耳に囁いた。

「これは容易ならぬ事件ぢや。そちは早速ストレルソーに立ち歸れ。」

「然し、陛下、私は當地に、事件捜査の端緒を持つて居りますので。」

「いや、ストレルソーに歸るがい。」と、私は繰り返して言つた。「そして、大使に事件の端緒は擱んだが、一二週間、任せておいてくれと云ふがよい。その間に、その事件の捜査は予が引受ける。」

「大使は解決を非常に急いでをりますが。」

「君はそれをなだめ給へ。兎に角、君の抱いた疑念が眞實としたら、慎重に行動せんければいけない。失敗して、人に笑はれてはいけない。今夜にも歸るやうにせい。」

彼は私の言葉に従ふことにした。それで私も幾分安心して、サブト等のところへ馬を走らせた。これで、一二週間はどんなことがあつても、まあ自分がラッセンダルであることを探られることはあるまい。それにしても、此の聰明な總監は、よくも事實を嗅ぎつけたものだ。彼が感づいた事柄も、いづれは役に立つだらうけれど、今が今早速取りかゝられては、一層王様の生命が危険になる恐れがある。さう思ひながら、私はデヨーヂ・フェザリーの口の軽さを心から呪つた。

「御用はお済みになりましたか？」と、フラビアが訊ねた。

「え、上首尾に——」と、私は言つた。「さて、引返させうか。何時の間にか、ミハエルの領地に入つてゐますよ。」

實際、我々は、ゼンダの町端れまで来てゐた。恰度、その邊から、城の方へ行く丘が爪先上りになつてゐた。三人は城を仰いで、古い城壁の美しさに見とれた。そして、丘の上を、のろ／＼と曲りながら下りて来る一隊の行列に氣附いた。行列は段々近寄つて來た。

「歸りませう。」と、サブトは言つた。

「わたし、もう少し此處に居りたいのよ。」と、フラビアは言ふ。私も彼女の側へ、馬を並べた。

此方へ近づく行列が、漸くはつきりして來た。先頭には、只銀の徽章をつけた黒服の従僕が二人、馬に乗つて進んだ。その後から四頭立の馬車が續いた。馬車の上には、黒い棺衣に被はれた棺が載せてあつた。更に、その後には、無地の黒衣を着けて、帽子を手に持った男が、馬で續いた。サブトは脱帽した。我々はそこに立つたまま、その行列を待つてゐた。フラビアは、私の側に寄り添つて、手を私の腕にかけたまゝ、

「きつと、喧嘩で殺された一人ですわ。」と言つた。

私は馬丁を手でさし招いだ。

「誰の葬ひか、馬を走らせて聞いて參れ。」と命じた。

彼は先に立つた二人の従僕のところ、馬を走らせたが、そのまゝ、後につゞく騎馬武者のところへ行つた。

「おや、あれはルバート・ヘンツオウだ、」と、サブトがさゝやいた。

果してルバートであつた。彼は早速、手を振つて、行列を止めさせ、私のところへ馬を走らて来た。彼はフロック・コートを着て、キチンとボタンを、はめてゐた。彼は悲しげな面持で、いとも恭しく禮をした。然し、サブトが左の胸のポケットに手を差し入れてゐるのを見ると、彼は急に莞爾した。私も亦につこりした。ルバートも私も、サブトのポケットの中の品物が何であるかをすぐ察したからである。

「陛下は、誰の野邊送りをしてゐるかとお尋ねでございましたが。」と、ルバートは言つた。

「これは、我が親友のアルバート、ローエングラムでございます。」

「あゝ、左様か。」と、私は言つた。「先夜の不祥な出来事を、予は何人にもまして、悼んでゐるのぢや。予の訓令は、何よりのその證據ぢや。」

「可哀さうに！」と、フラビアも柔しく言つた。私はその時、ルバートの眼が、彼女を激しく噴めてゐるのを知つて、思はず怒り心頭に發した。思ふまゝに出来るものなら、ルバート・ヘンツオウ如き者の一瞥に、彼女を汚すやうな事はしなかつたらう。而かも、彼は何時までも彼女を見つめて、見とれてさへゐる様子だつた。

「陛下の御懇切なお言葉は、痛み入ります。」と、彼は言つた。「故人に代りまして、私から厚く御禮申上げます。然し、陛下、他の人々として、何れは彼と同じやうに死なねばならぬのでござります。」

「如何にも、誰でもそれは覺悟すべき事ぢや。」と、私は答へた。

「陛下、たとへ王様とても、避けられませぬ。」と、彼は勿體ぶつた口調で言つた。サブトは、その非禮を聞いて、私の側で、低聲で罵つてゐた。

「その通りぢや。」と私は答へた。「して、弟の機嫌は如何ぢや？」

「至極およろしうございます。」

「それは結構。」

「太公は、御健康の恢復次第、間もなくストレルソーへ御歸還のおつもりでられます。」

「では、太公は只病氣の恢復を待つてゐるのぢやナ。」

「いえ、それに二三、雑用がお片附きになりませんので。」と、不敵な彼は、至極穏和な口調で言つた。

「どうぞ、その御用が早くお済みになられますやうにと、お傳へ下さいませ。」と、フラビアが言つた。

「恐れ多い次第でござりますが、私とお姫様同様、希望いたして居ります。」と言つて、ルバートはまじくと彼女を見つめた。姫は顔を眞紅にした。

私は禮をした。ルバートは、極めて丁寧な禮をし、馬を返して、行列に前進の合圖をした。突然、衝動的に、私は彼を追うて、馬を走しらした。彼はサツと馬首を立て直した。死者の靈前、婦人の眼前で、私が何か邪魔をするのではないかと案じたらしい。

「先夜の君の働きは天晴だった。」と、私は言った。「所で、君はまだ若い身の上だ。もういゝ加減、君の捕虜を生きたまゝ返してくれぬか。さうしたら我々とても君に危害は加へはしない。」

彼は嘲笑ひながら私を凝視してゐたが、ついに馬を私の側へ寄せて言った。

「私はいま身に寸鐵も帯びてはゐません。殺らうと思へば、サブトはすぐにでも私を射ち殺せるんですよ。」

「さうするにも及ぶまい。」と、私は言った。

「嘘をつけ！」と、彼は答へた。「よく考へてみる。いつかは君に太公からの申出を傳へたこともあるぞ。」

「僕は黒のミハエルからは、何も聞く必要はないのだ。」

「では僕の言ふ事ならきくか。」と、彼は聲を落して言った。「勇敢に城を襲撃したまへ。サブトとフリツを先頭に立てゝ。」

「行けッ！」と、私は怒鳴つた。

「俺と勝負する時を待つてゐろ。」

「よし、心待ちにして待つてゐよう。」

「叱ッ！ 聲が高い。俺は今君と喧嘩をしてゐるのぢやない、用事を話してゐるんだ。あそこにあるサブトもフリツも、いづれは亡い者さ。黒のミハエルとてもその通り。」

「何と！」

「いや、ナニ、黒のミハエルも、犬のやうにお陀佛になるつてことさ。それから君の所謂捕虜さんも——いづれはヤコブの梯子で、おさらばだ。結局残るは——かくいふルバート・ヘンツオウと、ルリ

タニア國王の君と二人だけよ。」

彼は一寸言葉を切つて、今度は熱を籠めて言った。

「王位と王姫とを賭けての勝負なら相手にとつて不足はない。私はたゞ、陛下の御幸運の程を祈つてゐます。」

「いかにも」と、私は言った。「君を生かしておいちや地獄の鬼共が寂しがつて仕方がないよ。」

「まあ、何とでも考へるさ。」と、彼は言った。

「ついでに、これも覺えて置いて貰ひたい。ちつとやさつとの良心では、あそこにある女から俺を離せさうにはないつて事をね。」

彼はかう言つて、燃ゆるやうな眼を姫に向けた。

「さつさと行けッ！」と、私は憤たが、すぐその圖太さに笑ひ出してしまった。

「君は、主人に反くつもりか？」と尋ねた。

するとルバートは、急に打ちとけた友だちらしい態度で、

「彼奴は俺の邪魔物なんだ。彼奴はやきもちやきのけたものだよ。實際、昨夜なんか俺は彼奴を、ナイフで突き刺すところだった。」

私の心持ちは和んで来た、そして彼の言葉から意外な事を聞きとつた。

「女のことでか？」と、私はさり気なく訊ねた。

「あ、女さ。而かも美人と来てゐるんだ。」と、うなづいて。「だが、君も知つてる筈だが。」

「あ、さうだ、何處か四阿で……、君の友達が散々な目に會つた時……だらう。」

「デチャードや、ゴートのやうな馬鹿共ぢや相手にはならないよ。せめて俺でもゐたらと思つたぜ。」

「ところで、太公がその女に思召しがあるつて譯かな。」

「さうだ。」と、ルバートは言つた。「どうも二人が折り合へさうもない。俺も邪魔してやるだけだ。」

「女の方では、太公を好いてゐるのかね？」

「あ、あの馬鹿女はさうなんだ。だが、細工は流々つてところをお目にかけて上げるよ。」と言ふなり一禮すると、馬に拍車を當て、行列の後を追うて、走り去つた。

私は、ルバートの妙な性格を考へながら、フラビアとサブトのあるところへもどつて来た。私は今まで悪人も數多く知つて来たが、ルバート・ヘンツオウのやうな一風變つた性格の人間ははじめてだつた。

つた。

「非常に様子の立派な方ではございませんか？」と、フラビアが言つた。

勿論、彼女は私のやうにルバートを熟知してゐないために、かう言つたのであらうが、彼のぶしつけな凝視に、すつかり憤つてゐるとばかり思つてゐた私は、これを聞いて全く豫期に反した。フラビアもつまりは只の女だつたのだ。彼女は、彼の凝視を迷惑がらないばかりか、ルバートを非常な優男だと思つたのである。

「それに、お友達の死を非常に悲しんでゐたぢやございませんこと……」と、彼女は言つた。

「否、彼奴のことですから、他に理由があつて、悲しんでゐるのかも知れませんが。」と、サブトはいまいましたさうに笑つて言つた。

私は、段々に氣むづかしくなつて行つた。先刻ルバートが燃ゆるやうな眼をして彼女を凝視したのに比して、私は嘗てどれだけの愛を籠めて彼女を見たかと考へてくると、そんな氣持になるなどは、全く筋違ひの我が儘だつた。そして、夕方になつて、ターレンハイムに歸る途々も、私は依然不機嫌な顔をしてゐた。私が彼女と連れ立つてゐる場合、誰しもさうするやうに、サブトは、二人におくれて歩いてゐた。フラビアは、びつたり馬を私と並べて、半ば羞かしげな、可愛い笑ひを見せて言つた。

「あなたがお笑ひにならないと、私、泣いて了ひますわ、何をお怒りになつていらつしやいますの。」

「ルバートの言葉が、何か癩に障つたのでせう。」と私は答へた。そして門口に来て、馬から下りる時には、私もにこ／＼してゐた。

そこへ下僕が、私に手紙を持って来た。それには、宛名が書いてなかつた。

「これは私へ来たのか？」と、訊く。

「はい。左様でございます。子供が持つて参りましたので。」

私は封を切つてみた。

「ヨハンに頼んで、此の文を差し上げます。以前にも、私は手紙を差上げた事がございました。どうぞ、あなた様が男でございましたら、この怖ろしい殺人鬼の獄舎から、わたしをお救ひ下さいませ。」

ア・ド・モ

私は、それをサブトに渡した。だが、この年老いた頑くな、人間が、この可憐な訴へに對して答へた言葉は、只次の數語だつた。

「自分が掘つた穴へおつこちたんだね、この女は！」

不憫でもアントワネット・ド・モーバンは、當分そのままにして置くより他、仕方がなかつた。

## 第十六章 嵐の前

私は公然とゼンダに馬を驅つて、ルバート・ヘンツオウと邂逅したので、假病は、その時限り止めてしまつた。私は先夜の夜襲が、ゼンダ城に與へた影響をよく看取した。その影響といふのは、それ以來敵は城外へ出ることを、止めたことで、城のすぐ近くまで出懸けた部下の者は、異口同音に、敵は極度に夜警を嚴重にして、攻撃に備へてゐるといふことを報告した。私はド・モーバン夫人の手紙にひどく心を動かされたが、王様を救ひ出し兼ねたと同じく、彼女を救ふ力もないやうに装うた、ミハエルは、依然私に反抗を續けた。そして時々城壁の外に、その姿を見せたが、それには以前のやうに、人々を威壓する力が見られなくなつてゐた。さうして、形勢は日に日に彼に幸ひしなくなつても、彼は王様に禮を失した自分の不明を、少しも謝罪しようとはしなかつた。一刻を争ふ危急の場合に、かくて時は空しく過ぎ去るばかりであつた。私が失踪したために生じた事件は、私に新たな事件を感じさせるばかりでなく、ストレルソアの市には、王様が何時迄も市に歸還されぬことを、不平に思ふ聲が起つて来た。然し、フラビヤ姫が私と一緒にいらつしやる、と云ふ事が分ると、其の不平は和らいだ。私も姫を危険な處に留めて置きたくなかつたし、その上現在の甘い接觸は、日に日に強調されて行つて、とても、これ以上辛抱する事は出来さうもなかつたけれど不平を和らげると云ふだけの理由のために留つてもらつた。周囲の忠告者も、結局満足するやうな答へを得ることが出来なかつたので最後の策として、ストラケンツ元帥と宰相は、——宰相は緊急の用件を、私に言ふためにストレルソアから出向いて来たのだつた。——次のやうな解決を講じた。それは、許婚式の日を、私に決定せよといふのだつた。この許婚式といふのは、ルリタニアでは、結婚式と同様、盛大で重要なものとさ

れてゐた。私は餘儀なく——而かもフラビアが私の側について坐つてゐるところで——それに同意させられてしまつた。その式は二週間後に、ストレルソウの大寺院で取り行はうと云ふ事になつた。この盛儀が一般に報ぜられると、國內到るところ、歡喜の聲に充ち、人々の話題を賑かした。かうした中にも、この許婚式を欲しない者が只二人あつた。一人は、それをまだ知らずにゐる、黒のミハエルであり、他は私によつて代理されてゐるルリタニアの國王である。

三日後、もつと私から金を絞り取らうと慾張つたヨハンは危険を冒して、私のところへやつて來た。それで、許婚式の噂が城内にも傳はつた事を知つた。報告が傳はつた時、ヨハンは太公の側に侍つてゐた。聞くなり黒のミハエルは顔色を變へて呪詛を放つた。ルバートが、私の言つた通りになりましたと罵つて、又、ド・モーバン夫人に向つては、戀敵がなくなつてお喜びでせうと言つたので、ミハエルの機嫌は益々悪くなつた。ミハエルは私かに劍に手を觸れたが、ルバートは平然としてゐた。そして激怒せる太公に意味あり氣な會釋をしながら、「惡魔は、姫君の婿となられる筈の方よりも、立派な男を授けたのですから面白いものです。」と言つた。ミハエルは言葉も荒く黙れ！ 出て行け！ と叱咤したが、ルバートは夫人の手に最初の接吻を要求した。而かも、ミハエルの怒りの眼光を浴びながら、まるで彼女を戀してゐるやうな態度をして。

これは、その消息の中で、さう大したものではなかつたが、後で重大な事を聞いた。即ちターレンハイムで事態が、切迫してゐると同じく、ゼンダの事態も急を告げてゐたのである。何故といふに、王様の健康が非常に害なはれて來たからだ。ヨハンの見た時は、全く衰弱し切つて、殆ど身動きも出來ない程であつた。今は考へてなどゐる餘地もなく、彼等はストレルソウから一人の醫者を迎へた。王様の獄室に導かれた醫者は、眞蒼になつて、慄へながら出て來た。そして熱心に自分を歸してくれらるやう、又これ以上、この事件に關係させて貰ひたくないと懇願した。然し、太公はそれを拒んで醫者を城中に監禁し、此方の望み通り、王様を生かしたり、殺したりしてくれたら、生命は助けてやると云つた。そして、醫者の言葉に従つてミハエルはド・モーバン夫人を王様の許にやり、女だけが與へ得る優しい看護をさせることにした。王様の生命は、生死の境にあつたけれども、私は丈夫で、どこ一つ悪いところもなく、自由だつた。かくて、ゼンダ城は深い憂鬱にとざされて、人々は氣短かになり、よく争ひをするやうになつて來た。そして、殆ど話し合ふこともなくなつた。だが、皆が憂鬱になるに従つて、ルバートだけは、目に微笑みを浮かべ口には唄を歌ひながら、悪事を働いてゐた。そして、ド・モーバン夫人が王様の獄室にゐる時は、その監視には何時も、太公はデチャードをやつてゐた。この警戒は嫉妬深い太公としては、尤もなことであつた。ヨハンは私に、こんな話を聞かせ、褒美を貰つた。而かも、彼は我々と共にターレンハイムに置いてくれといつて、再び獅子の窟のやうな、ゼンダに歸らうとはしなかつた。然し、我々には、ヨハンがゼンダに居てくれる必要があつたので、もつと報酬を増すから、城に歸つてモーバン夫人に手紙を手渡してはくれまいかと頼んだ。その手紙には彼女のために我々が努力してゐることや、出來る事なら、只一言王様に慰めの言葉をか

けてくれるやうにと記しておいた。その故はお疑ひ心と云ふものが病氣に悪いばかりでなく、絶望は  
一層悪いものだから、たとへこれと云ふ病氣がないにしろ、王様は單に絶望のために死に瀕して居ら  
れるに違ひない思はれたからであつた。

「それで、今王様の監視はどうなつてゐるのだ？」と、私は六人組の二人と、マクス・ホルフの死ん  
だことを思ひ出して、訊いてみた。

「日暮れまではデチャードとバーソニンが番をして、夜明けまではルバート・ヘンツオウと、ド・ゴ  
ーテが監視することになつて居ます。」と言ふ答。

「二時に、只二人きりか？」

「左様でございます、然し、他の者共が、その眞上の室に休んでをりますから、下からの聲や呼笛が  
よく聞えるのでございます。」

「丁度眞上の室だつて？ それは少しも知らなかつたナ。その室と監視をしてゐる室とは、すぐ連絡  
するやうにでもなつてゐるのか？」

「いゝえ、そこへ行くには階段を下りて、釣橋の側の戸口を通らねばなりません。でないと王様のお  
室には行けません。」

「その戸には錠が下してあるのか？」

「その錠を持つてゐますのは、只四人の旦那達だけでございます。」

私は彼の身近くにじりよつた。

「その四人が、監房の格子戸の錠を持つてゐるのか？」と、私は低くさゝやいた。

「いえ、デチャードとルバートだけだと存じます。」

「太公の御寢所は、何處だ？」

「離宮の一階で、釣橋に向つて進むと、右側になつてゐます。」

「ド・モーパン夫人は？」

「仰の室と丁度向ひ合つて、左側になつてゐます。然し、夫人が中に入ると、戸にはすぐ錠が下ろさ  
れるやうになつてゐます。」

「閉ぢ込めて置くためにか？」

「仰せの通りでございます。」

「多分他にも理由があるんぢやないか？」

「或ひはさうかも知れません。」

「ところで、その錠は太公が握つてゐるのだらう？」

「え、左様です。ところで、その釣橋は夜になると、釣り上げてしまふのです。そして、その錠も矢  
張り太公が持つてをりますので、太公に頼まない以上、誰も渡れないのです。」

「お前の寝るのは何處だ？」

「お前の寝るのは何處だ？」

「離宮の入口の廣間に、仲間五人と寝むのです。」

「武装してゐるのか？」

「槍があるだけで、鐵砲はございません。太公は仲間鐵砲を持たせるのを危ながつてゐるのです。」  
さう聞いて、私は決心した。私は既にヤコブの梯子では失敗してゐるので、またそこを襲うたところ、成功は覺束ない、他の方面からの攻撃を試みねばならなかつたのだ。

「お前に二萬クラウンの金を與へると約束したが」と、私は言つた。「若し、明晩私の言ふ通りにしてくれたら、五萬クロウンに殖してやる。だが、その前に一寸訊くが、その五人の仲間達は、捕虜が誰であるかを知つてゐるのか？」

「いゝえ、何か太公の私憤上の敵だと信じてゐるのです。」

「では、彼奴等は私を王様だと信じてゐるのだらうね？」

「勿論です。」

「それでは、明晩午前二時かつきりに、離宮の正面の扉を押し開いて貰ひたい。いゝか、一分だつて誤つちや駄目だ。」

「あなたがそこへいらつしやるのですか？」

「何も訊いちやいかん。只、吩咐け通りにすればいいんだ、頼みと云ふのはそれだけだ。」

「では、その扉を明けてしまつたら、私は逃げてもよろしいので？」

「あゝ、出来るだけ早く逃げるんだナ。もう一つの頼みは、この手紙を——これはフランス語で書いてあるから、お前には讀めまい。——ド・モーバン夫人に渡して、この中に書いてある通りにせぬと我々一同の生命が危くなるのだから、必ず間違はぬやうにと傳へてくれ。」

ヨハンは慄へてゐたが、私は結局彼の勇氣と正直を信用しない譯にはゆかなかつた。王様の死を怖れた私は、もうこの上一刻も逡巡しては居れなかつた。

ヨハンの立ち去つた後で、私はサブトとフリツを呼んで、自分の計畫を打ち明けた。サブトは首を振つた。

「どうして時機を待たれないんだ？」と、彼は尋ねた。

「王様が死なれるかも知れないからね。」

「その前にミハエルは、降服しなければならなくなるだらう。」

「それだと、王様の生命は助かるかも知れないね。」と、私は答へた。

「まあ、さうだね。ところでミハエルが降服するとしたら？」

「二週間の間にか？」と、私は軽く尋ねた。サブトは、唇を嚙んだ。

その時急に、フリツ・フォン・ターレンハイムが、私の肩に手を掛けて言つた。

「やつつけやう。」

「君も一緒に行くんだよ——怖がりやしないだらうね。」



「あ、だが、君はこゝに留つて、姫を守つてゐて貰ひたいね。」  
サブト老人の眼は光つた。

「では兎に角、ミハエルを襲ふことにして、」と、彼は笑ひを忍ばせて言つた。「萬一、君が其處に行つて、王様もろ共やられたら、生き残つた者はどうするのだ？」

「フラビア姫を擁立するのさ。」と、私は言つた。

暫し沈黙がついた。老功なサブトは、悲しげに、無意味な冗談を言つて私とフリツを笑はせた。

「何故、ルドルフ三世は君のお曾祖母さんと結婚しなかつたんだらうね？」

「おい、戯談ぢやない。」と、私は言つた。

「我々は今、王様の事を考へてゐるんだぜ。」

「さうだ。」と、フリツも應じた。

「それに又——」と、私は續けて言つた。「私が王様の名を偽つたのは、他人の爲めを思ふからで、一點の私慾もないのだ。若し許婚式の當日までに、王様が救ひ出されて王座にお就きになれないとしたら、結果の如何は問ふ所でない、私は斷然真相を天下に發表するつもりだ。」

「君の計畫を決行するさ。」と、サブトが言つた。

さて、私の計畫なるものはかうだつた。サブトの指揮を仰ぐ一隊の精兵は、離宮の戸口に忍び寄る。若し見つかつた場合には相手構はず殺して了ふ。銃を使ふと音がするから、劍を用ひる。萬事思ふ盡

にはまつて行つたら、ヨハンが扉を開ける時まで、その戸口に達するやうにする。扉が開くと直ぐ、中に跳び込んで、召使ひが呆然自失してゐる隙に一同を生捕つて了ふ。それと同時に、——これこそ計畫の中心點だ——女の悲鳴が、アントワネット・ド・モーパンの室から起る筈である。彼女は續けざまに「助けて下さい、ミハエルさん助けて！」と叫ぶ。そして、ルバート・ヘンツオウの名を口走しのだ。その時、巧く行けば、激怒したミハエルが向側の室から飛び出して来て、サブトの手で生捕られてしまふだらう。だが、まだ彼女の叫び聲は續く。味方はその間に、例の釣橋を卸す。ルバートは徒らに自分の名が叫ばれるのを聞いて目を覺まし、橋を渡つて様子を見に来るに違ひない。ド・ゴータが、ルバートと一緒に來るかどうかが問題だがそれは臨機應變に始末をつければよいだらう。ルバートの足が釣橋にかゝると、愈々私の出る幕になる。私は、また今度も濠の中を泳ぐつもりで疲れない用心に小さい木製の梯子を持つて行くことにした。そして、水に浸つてゐる間は、それに頼つて休み、水から上る時には、それを踏み臺にして上ればよい。釣橋寄りの石垣に梯子を立かけて、橋が渡されたらこつそりと上に匍ひ上がつて、敵を待ち受けるのだ。——若しこの時、ルバートや、ド・ゴータにうまく橋を渡り越されて了つたら、それは私のせみではなく、寧ろ不運といふものだ。ルバート等を斃してしまへば、残るは只二人限りだが、その二人は味方の起した喧騒に周章ふためくところを、素早く襲へばよいだらう。我々はそれまでに必要な室の鍵は、盡く奪つておくのだ。敵は跳び出さうけれども、若し平生の命令を守つて踏み止まれば、王様の生命は累卵の危きに迫るか

ら、味方は外部の戸口から入るより外はなくなる。それにしても有難いことには、監視がルバートでなく、デチャードだと言ふ事だ。と言ふ譯は、デチャードは、冷静で無慈悲で、卑怯でこそなければ、ルバートのやうに大膽不敵でないからだ。その上、假りに彼等が心からミハエルを思つてゐるとすれば、デチャードは、ベルソニンに王様の監視を委ねて、橋を渡り、向岸に行つて、その戦闘に飛び込んで一働きするかも知れないから。

私は絶望的に、かういつた風の計畫をめぐらした。さうと決まれば、敵に油断をさせるに越したことはないので、味方の方では階上階下、盡く、煌々と燈火を點じて、さも酒宴に耽つてゐるかのやうに装ひ、そして、徹宵、音楽を奏したり、人々の姿を彼方此方に動かすやうにせよと命令した。ストラケンツ元帥は、其處に居残つて、出来ることなら、我々が出懸けるのをフラビアに氣附かせぬやうにする手筈であつた。そして、萬一我々が翌朝までに、歸還しない場合には、彼は堂々と兵を進めて、ゼンダ城を攻撃し、王様の身柄を要求する筈である。若し、黒のミハエルが城中にゐない場合には、元帥は出来るだけ早く、王女フラビアを奉じてストレルソーに立ち歸り、黒のミハエルの謀反と王様の暗殺とを公表する。すると忠實なるルリタニア國民は悉く姫の傘下に參集するに違ひない。實を言へば、かうした結果になることは、私の望んでゐた所である。といふのは、王様にせよ、ミハエルにせよ、又私にせよ、他の二人よりも生き永らへるべき筈のものかどうかを、疑つてゐた。まづミハエルが斃れ、河原乞食の私が、ルバートを殺した後に死ぬといふ工合にゆくものなら、それは運

命の神が、ルリタニアに對して出来るだけ情をかけてくれたと見るべきだ。そして、王様の生命を助けてくれた運命の神が、よし、私を殺してしまつたにせよ。私は文句を言ふつもりはなかつたのだ。會議が終つて我々が座を立つたのは、夜も更けた頃であつた。私は、フラビアの室に行つて見た。彼女はその晩は、物思はしげな風をしてゐた。私が歸らうとすると、彼女は私に腕を絡みつけながら差づかしさうに顔を根らめて、私の指に指輪をはめてくれた。私は王様の指輪をはめてゐたが、別に小指には「Nil Quae Fecl」と、言ふ家憲を彫りこんだ、無地の金指輪をはめてゐた。私はこれを抜き取つて、彼女の指にはめてやり、放してくれと言ふ身振りをした。彼女はそれと悟つて、つと身を離すと涙に潤む目で私を潰めた。「貴女が女王になられて、他の指輪をおさしになる日が來ても、これは何時までもはめて置いて下さいね。」と私は言つた。「え、他にどんなのをはめませうとも、これは死んでも離しませんわ。」と姫は答へた。そして指輪に口づけをした。

## 第十七章 ルバートの活躍

その夜は晴れて、澄み渡つてゐた。私は、先夜濠を泳いだ時のやうな詠へ向きの天氣ならい、がと祈つた甲斐もなく、今度は運命の神も幸ひしてくれなかつた。それで、ピツタリ石垣に身をつけて、影にかくれてゐたら、眞向ひの離宮の窓からだつて、姿を見現されることもあるまいと、そればかり

を心頼みにしてゐた。萬一、敵に濠をさぐられたら、私の計畫は失敗に歸すのだが、敵もそれ程用心深くはあるまいと想像した。味方の攻撃に對して、敵はヤコブの梯子を造つて油斷してゐた。ヨハンがヤコブの梯子の下部を、石垣に固定させてしまつたので、それを下から動かすことは、上から動かすよりも難かしいことだつた。爆弾で一打ちに碎くか、それとも永い間コツ／＼と鶴嘴で掘り返すかしなければ、取り除くことは出来なかつた。然し、音を發する事を考へると、どちらの作業も問題だ。さう考へて來ると、濠の中では、敵に對して如何なる損害を與へることも出来ない。ミハエルも當然この疑問を起して、「何の損害も與へ得ない。」と、自問自答したに違ひない。而かも彼は、ヨハンの返り忠で、私にこの策戦ありとは夢にも知らず、ひたすら離宮の大手から、正々堂々と私が襲撃して來る事のみを思つてゐた。私も眞に危険なのは、大手の攻撃だとサブトに言つた。

「表門には、君向つてくれたまへ。」と私は言つた。「それなら、君も満足だらう？」  
それでも彼は不服を唱へて、心安立てに、私と一緒に言ふのだつたが、私は斷然、彼の申出を許さなかつた。若し一人でも命令に服さぬ者が出來ると、隊の士氣が挫けて、危険が倍加する恐れがある。

愈々夜の十二時、サブトの二隊は、ターレンハイムの離宮を後にして、人跡絶えた路をゼンダの街を避けながら進んだ。途中、何事もなければ二時十五分前ごろ、城の前面に着く筈だつた。城の半程手前で馬を乗り棄て、表入口に忍び寄つて、扉の開くのを待ちかまへる。二時になつて戸が開かなかつたら、フリツに頼んで城の裏へ廻つて貰ふ。若し私が生きてゐれば、そこで二人は落ち會つた上、城を襲ふべきか否かを相談する。が、私が死んでゐたら、彼等は全速力でターレンハイムに立ち歸り、元帥を立てて兵をゼンダ城に繰り出すのだ。若し私がそこに居なかつたら、それは私が死んでゐるからで、私が死ぬと、五分間を出でずに、王様の命も絶たれてゐる筈である。

サブトとその部下のことは、これだけにして、この思ひ出多い夜の、私の働きを述べなければならぬ。私は、あの戴冠式の夜、狩小屋からストレルソーまで私を乗せて來た、例の駿馬に跨つて行つた。鞍にはピストルを付け、腰には劍を帯びた。大きな上衣の下に温かい細目に編んだ毛糸のジャケツを着込み、寛やかな半ズボンに厚い靴下、それに軽快なツツクの靴といふいでたちであつた。全身に油を塗つて、大きなウキスキーの壘を用意した。その夜は温かだつたが、私は多分永いこと水に浸つてゐなければならぬかも知れないので、寒氣に對しては充分用心する必要があつた。何故といふに、寒さといふものは人の元氣を挫くばかりか、死なすむ場合に死なして了つたり、人の死ぬ場合に、それを救ふだけの力を失はせて了ふ。たとへ又、生き永らへることが出來たにせよ、リュウマチスになつてしまふのだ。私は又、身體の周りに、細くて丈夫な綱を巻きつけ、例の木製の梯子を忘れずに持つて行つた。サブトに後れて出發した私は、街を左手に見て近道を選んだ。十二時半頃森端れに着いて、木の繁みの中に馬を繋ぎ、ピストルは鞍のかくしに残し、水の中に入る私には役に立たなかつたのだ——梯子を携へて、城の岸の方へ進んだ。此處で私は、腰の廻りに巻いた綱を解

き、それを堤の上の木の幹にしつかと結びつけて、それを傳はりながら濠の中へ下りた。冷たい水に浮かび、梯子を前にして濠を游いで、城壁に近づいて行く時、丁度城の時計が一時十五分前を報じた。暫く游いでゐる間に、見覚えのあるヤコブの梯子にたどり着いた。足に石垣の暗礁が觸れた。私はその大きな土管の影に蹲くまで——私はそれを動かさうと試みたが、微動だにしなかつた——時機を待つてゐた。今でも覚えてゐるが、その時私の感じた最も強い感情は、王様に對する不安でもなく、實に烈しい喫煙慾だつた。だがこの場合、この望みは勿論許さるべきものではなかつた。

釣橋は依然と架つてゐた。私は王様の獄室の外壁に凭れて蹲まつたまま、ぼんやりと見える骨組を、右手約十碼の彼方に眺めた。二碼位此方に寄つたところに、橋と同じ高さの一つの窓を發見した。ヨハンの話の通りだとすれば、それは太公の室の窓に相違ない。橋の向側の、殆ど同じ位置に向ひ合つて、ド・モーバン夫人の室の窓があるのだらう。それはさうと、女といふものは、そつつかしい健忘症な動物である。私はド・モーバン夫人が正二時に襲撃の犠牲になるんだと云ふ事を、忘れねばいいがと祈つてゐた。然し寧ろ私はルバート・ヘンツオウとの一騎打ちを考へて心を躍らしてゐた。私は前に一度敗れた事があつた。ルバートは太公に對する逆心を隠さうとして、しかも味方の面前で、私を刺した事があつた。今坐つてゐても肩の削痕が痛むほどである。

突然、太公の室の窓が明るくなつた。鐵戸が閉められてゐなかつたので、爪立ちして靜かに脊を伸ばすと、室の一部分が見えた。さうした姿勢をとると、自分が光りに照られずに、窓から一碼位室

内が見えた。窓がガラツと開いて誰か室外を眺める様子。それはアントワネット・ド・モーバンの端麗な姿であつた。その顔は影になつてよくは見えなかつたが、光りを背にした美しい頭の輪郭が、ハッキリと見えた。私はやさしく、「忘れないで！」と叫びたかつたが、思ひ止つた。すると仕合せにも、その後から一人の男が入つて来て、夫人の脇に突つ立つた。男は女の腰を抱かうとしたが、女は素早く逃げて、鐵戸に凭りかゝつた。彼女の横顔は、すぐ私の眼の前に來た。私には今入つて來た人間が分つた。それはルバート・ヘンツオウだつた。前屈みになつて、手を女に差し出しながら笑つてゐるその聲から察しても、正しくこれはルバートであつた。

「まだ君の出る幕ぢやない。」と、私は低く呟いた。

彼は頭を、女の頭に近づけた。女が濠の方を指したので、ルバートが何か女に囁いてゐるのが察しられた。それから、女はゆつくりと明瞭な口調で言つた。

「いつそわたし、この窓から身を投げてしまひたい！」

ルバートは窓近く寄つて外を眺めた。

「つれないナ。」と、彼は言つた。「ね、あなたは本氣でそんなことを言ふのですか？」

彼女は何にも言はないらしかつた。ルバートは、じれつたさうに、窓闕を叩きながら、子供が甘へるやうな聲で語り續けた。

「ミハエル奴、首でも縊つて死んぢまへ！ 彼奴には、お姫さま一人で澤山ぢやないか？ 何もかも